その胸に還ろう

キューマル式

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

およそ１００年前に現れた深海棲艦と呼ばれる謎の敵に襲来によって、人類はその版図の３分の２を失った。

希望などどこにもない、絶望だけが支配する世界。

そんな世界に最後の希望が、２隻の艦が降り立った。

「兄さんは……どこに還りたい？」

「決まってる。あいつの胸の中だ」

これは自らの記憶を無くした２人の艦息の進む、長い航海の記録……。

目次

起　希望、降り立ツ
降り立つ２隻 ―― 1
緯度０秘密基地 ―― 5
絶望の世界 ―― 10
圧倒 ―― 24
一日の終わりに ―― 33
準備の日々 ―― 41
夢 ―― 52
目覚めるもの ―― 59
元帥の憂鬱 ―― 62
承　絶望、出現ス
秘匿艦隊Ｅ・Ｄ・Ｆ ―― 69
接触 ―― 83
トラック泊地 ―― 95
それぞれの思惑 ―― 106
予言 ―― 116
出現 ―― 130
怪獣 ―― 144
波紋 ―― 153
夢　その２ ―― 165
外伝　ラヴァーズ結成
駆逐艦　暁の出会い ―― 172
駆逐艦　山風の出会い ―― 181
駆逐艦　Ｚ３マックス・シュルツの出会い ―― 187

転　驚愕、世界ノ真実
転戦 196
探索 203
危機 213

起　希望、降り立ツ
降り立つ２隻

「……あれっ？」
青い青い、どこまでも青い海のど真ん中に、２つの間の抜けた声が響いた。
混乱したように……いや、事実混乱の極みにあって２人はキョロキョロと辺りを見渡すが、その場には海の上に立つその２人以外には人影どころか島の影さえない。
海の上に立つのは２人、それはどちらも少年だ。
片方は鋭い目つきにツンツン頭の１４～１５くらいの年の少年である。もう片方の少年は柔和そうなたれ目の１０前後の少年だ。
どう見ても性格は真逆そうだが顔の造形は似ていることから、兄弟であろうと思える。そんな２人が海の真ん中に突っ立ち、お互いに顔を突き合わせて途方に暮れていた。
海の上に立つ少年たち……それだけで特異な話であるがしかし、この２人の特異性はそんな程度のことではない。
その背中に背負うようにして、鋼鉄の輝きを放つ機械を身に纏っている。
「……なぁ、弟よ」
「……何、兄さん？」
「俺はめちゃくちゃ混乱していて、何が何やらわからないんだが……」
「奇遇だね、僕もそうだよ」
「さしあたって基本的な話なんだが……俺たち、『兄弟』だよな？」
「うん……それは間違ってないってのは分かるんだけど……」
「なら……『俺たちの名前はなんだ？』」
「……」
その言葉に、弟は押し黙る。
２人は『お互いに兄弟である』ということは分かる。しかし、それ以外のことがまったくといっていいほど分からない。

自分たちの名前は何なのか？　年齢は？　両親は？　友達は？
一般的な事柄は分かるのだが、それらの自分たちに関する情報が完全に頭から抜け落ちている。
「参ったな、こりゃ……おまけにここがどこだか、どういう状況だか全くわからん……」
「同感だよ、兄さん……」
２人揃って仲良く肩を落とす。２人の背中に背負った機械が、ギシリと重量を感じさせる音を立てた。
「……で、そろそろこの背中のものについてツッコんだ方がいいのかな？」
「これ、なんなんだろうね？」
２人は揃って振り返るようにして自らの背中に装着された巨大な機械を見る。
それは武骨な金属の塊だ。砲などの明らかな武装が備え付けられており、何らかの武具であることは間違いない。
だがその中で異彩を放つのはその円錐形のシロモノ……ドリルである。２人の背負う機械には、巨大で武骨なドリルが取り付けられていた。
見るからに凄まじい重量があるだろうそれだが、２人は重さなどほとんど感じない。それほどまでに身体の一部であるかのように馴染んでいた。
すると、その機械の中から小さな人影が何人も出てくる。
「な、なんだなんだ？」
「えっと……小さな人？七人の小人？」
「俺たちはどこの白雪姫だ？　あと七人程度じゃないぞ」
弟の呟きにその小人たちはブンブンと首を振る。
「なら……妖精とか？」
どうやらそれで合ってるようだ。肯定するように首を縦に振っている。
「で、その妖精さんたちは何を言いたいんだ？」
「艤装を……始動させてみろ？」

何となくだが、２人には妖精さんたちの言っていることが分かった。
「起動させろって言われてもなぁ……えっ、とりあえずやってみろ？」
「それらしく『始動』って言えばいいのかな？」
弟の言葉に妖精さんたちは首を縦に振る。
「わかったよ。　それじゃ……機関、始動！」
「機関始動!!」
２人がその言葉を口にすると、背中に背負った機械……『艤装』の心臓部が唸りとともに動き出した。
同時に、２人は雷に撃たれたような感覚を味わう。
自分たちの中に膨大な情報が流れ込んでくる。それは背負う艤装の情報だ。
これはやはり戦うための道具だ。その力の使い方が、まるでソフトウェアをインストールでもするかのように２人の中に流れ込んできたのだ。
同時に、２人はこの艤装に対して絶対的な信頼を覚えた。この艤装とともになら超えられぬ試練などない。
この艤装は人類の英知。
この艤装は人類の見た夢。
この艤装は人類の祈りが生んだ希望。
この艤装は人類の堕ちた狂気。
この艤装は人類の醜い悪あがき。
この艤装は人類の運命を拒絶する妄執。
この艤装はそれらの度し難いものをコンクリートミキサーで混ぜ合わせてぶちまけた『人類』という存在そのものを正しく表す、希望と呪いのシロモノだ。
それが、２人には理解できたのである。
突然の情報の濁流に晒されふらつく２人だが、すぐに頭を振って持ち直す。
「痛う……今のは効いたぜ。
でもまぁ……何も分からないからは一歩だけ前進だな」

「そうだね……。
どうやら妖精さんたちが、落ち着けそうな拠点を知ってるらしいよ」
「そりゃありがたいな。
それじゃさっそくそこに向かうとしよう」
そう言って、２人はもはや自分の半身である艤装を起動させた。
２人は未だに自分がどこの誰なのか名前すら思い出せない。だが、この艤装の名前ならば分かる。
だから、２人はその名を高らかに宣言した。
「海底軍艦『轟天』、出撃する!!」
「海底軍艦『羅號』、出撃します!!」
人類最強の矛ともいえる２人の兄弟が今、この海に降り立った。
彼ら２人の行く先になにが待っているのか……それはまだ誰にも分からない……。

緯度０秘密基地

妖精さんたちの案内によってやってきたのは、一見すると何もない島だった。どこにも手を加えられていないように見える、自然そのままの島である。

しかし轟天と羅號にはこの場所がそうでないことが何となくわかった。

「『緯度０秘密基地』……か」

妖精さんから聞いたその名前を轟天はつぶやく。羅號もその言葉に頷いた。

２人ともその言葉にどうしてか、いいようもない『懐かしさ』を感じてしまうのだ。これは失った記憶の中にこの基地のことがあるということなのだろうか……？

何もないように見える島の岸壁、しかし轟天と羅號がそこに近付くとゆっくりとその壁が開いていく。

隠しドッグになっているそこを入っていくと……。

「うわぁ……」

「これは……すごい」

轟天と羅號も、思わず声を上げてしまう。

ドッグにはいくつものクレーンが備わっており、同時に何隻もが整備・修理ができるようになっている。その設備の充実度はもう素人目にもわかるほどで並大抵のものではない。

「これを妖精さんたちが用意したの？」

羅號の問いに、羅號の艤装の妖精さんたちはエヘンッと胸を張った。どうやらその通りらしい。

「妖精さんすげぇな、おい！」

轟天がヒュゥと口を鳴らすと、妖精さんたちはそれこそ倒れるんじゃないかというくらいに胸を張る。妖精さんたちは褒めて伸びるタイプらしい。

轟天と羅號がドッグに着くと、ロボットアームが伸びてきて自動的

に艤装を外してくれる。
　そして２人が海上からドッグに降り立つとそこには……。
「おぅっ!?」
「すごい数の妖精さんだ！」
　そこにはそれこそ数えきれないほどの数の妖精さんたちが待っていた。誰もかれもが笑顔で２人に敬礼をしている。そのあまりに熱烈な歓迎っぷりに、２人は少し引いてしまったくらいだ。
　そして２人は案内されるまま、この『緯度０秘密基地』を散策するのだった……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「……すごい場所だな、ここ」
「ほんとだよね」
『緯度０秘密基地』の食堂スペースで食事をしながら、轟天は羅號とともにしみじみと頷く。
　食事の内容は唐揚げ定食だ。パリッと揚げられた鶏をメインにサラダ、ご飯にみそ汁という一般的な内容である。それをパクつきながら、２人は今日一日基地内を見て回った感想を言い合っていた。
　まず艤装の整備・修理を行える大型ドッグが８つ、これは大規模な艤装改造までもが可能な代物であった。そんなドッグには新型装備を開発するための工房まで併設されている。
　さらに身体を治療するための医療設備……特殊な溶液につかることで傷を癒すことのできるメディカルポッドが完備されている。
　これで艤装の修理や身体の傷で困ることはほぼない状態だ。この段階で軍事基地としては十分すぎるのだが、『緯度０秘密基地』のトンデモナイところはここからだ。
　先ほどから２人が食べている唐揚げ定食……実はその材料はすべてこの『緯度０秘密基地』に備わる『食料プラント』で生産されているものなのである。
　さらに海底や地下採掘によって各種鉱物資源を自動で採掘する『鉱

物プラント』、オーランチオキトリウムの培養によって燃料を生成する『燃料プラント』、それらを材料にさまざまな物資を生産する『工場』が備わっていた。
　つまりこの『緯度０秘密基地』は、外部からなんの補給もなく機能し続けることが可能になっているのである。居住区も広く、最大で１万人ほどの人間が暮らしていける地下居住空間だ。
「ここまでくると一個の『街』……いや、小さな『国』だな」
　感心しているのか呆れているのか、轟天は肩を竦めて言った。
「でも拠点が豪勢だってのはいいことだ。
　妖精さんたちから聞いた、『敵』の存在を考えるとな」
「……『深海棲艦』だっけか、兄さん？」
「そうだ」
　羅號の言葉に、轟天は頷く。
　２人は今までの中で、この『世界』の敵の存在を妖精さんたちから聞かされていた。
　その名は『深海棲艦』、突如として深海から現れ人類から海を奪い取った『敵』である。人類は妖精さんと、彼らの作る『艤装』を身につけることのできる少女たち『艦娘』が、彼女らを指揮する『提督』とともに日夜戦っている……らしい。
　この『緯度０秘密基地』には轟天と羅號以外には、人間は誰もいなかったのですべて妖精さんたちの受け売りである。そんな妖精さんたちも、現在の具体的な世界情勢や戦況については分からないとのことだ。
「……いろいろ慎重に調べないとならねぇな、こりゃ」
「そうだね……」
　２人にとっては、『自分たちは何者か？』という自分たちの記憶探しが目的なのであるが、２人が男でありながら艤装を身につけ戦えるということを考えると、その過程で『深海棲艦』との戦闘は確実にあるだろう。
　かといって何の情報もなく人類戦力である『艦娘』に接触するのも危険だ。

妖精さんたちの話では『艤装を使えるのは適合者の資格を持つ女のみ』なのだそうだ。轟天と羅號は『男』……この段階でもうイレギュラー確定で問題山積みである。『男』が艤装を使えるための研究のために捕まえて『解剖』やら、イレギュラーだから『排除』という判断を下しかねないし、そもそも自分たちが記憶を失った原因が『男が艤装を使えるようにするための人類の人体実験の結果』という可能性もあり得る。そのため、人類戦力との接触にも慎重にならねばならないだろう。

「何はともあれ、まずは情報を集めよう。

そうしないと、とてもじゃないが動きようがない」

「確かに……」

「それと、艤装にも慣れよう。

多分、どこかで誰かとの戦いは避けられない。

その相手が深海棲艦なのか人類なの分からないけどな」

そう言って轟天は肩を竦める。

「……」

羅號は今後のことを思ってか静かに考えを巡らせていた。その表情にはどこか不安な色が見て取れる。

「なぁに、俺たちにはこの『緯度0秘密基地』がある。

生活や戦力の維持には何も問題はないんだ、時間はいくらでもある。

ゆっくり、気長にやっていけばいいさ、弟よ」

「そうだね、兄さん」

励ますように言って羅號の肩を叩く轟天。そんな兄の気遣いに羅號は頷きながら笑った。

こうして2人は拠点を得て自らの失われた記憶を探し、行動を始めることになる。

そして、2日後……。

「……なぁ、弟よ」

「……何、兄さん？」

「俺たちは2日前、
『人類・深海棲艦どちらにも接触せず、いまは慎重に情報を集めよう』
……そう決めたよな？」
「……うん」
「だったら……これはどういうことだ!!」
轟天が額に血管を浮かせながら怒鳴る。
艤装に慣れるためと周辺の偵察に出た羅號の帰還したドッグ、そしてそこには……羅號の後ろに3人の傷ついた少女たちの姿があったのだ。明らかに『艦娘』である。
年の頃は羅號と同じ１０歳くらい、小麦色の肌の少女２人と気真面目そうな少女だ。
気真面目そうな少女は日本人っぽいが、小麦色の肌の少女たちはどうも外国人っぽい。そんな3人組である。
「兄さん、話は後で聞くよ。
今は早く治療をしてあげたいんだ」
「……わかった。
終わったら事情を説明してもらうからな」
憮然とした表情の轟天を尻目に、羅號は3人の少女たちの艤装を解除すると医療施設の方へと案内していく。
こうしてほとんど情報を集めることなく、２人は『艦娘』と接触することになったのである……。

絶望の世界

やってきた3人の艦娘は医療施設での治療を終えていた。メディカルポッドに入ったことで傷はすっかり癒えている。
「……まずは名前から教えてもらおうか？」
若干苛立ちが見える轟天の言葉に3人は少し怯えたように身体を震わせた。やがて、3人の中で黒髪の、気真面目そうな少女から口を開く。
「朝潮型駆逐艦1番艦の朝潮です」
「呂500潜水艦、ろーちゃんです……」
「マエストラーレ級3番艦、リベッチオです……その……『リベ』でいいです……」
ようやく名前を名乗ってくれたのはいいのだが、何とも雰囲気が重い。そのためかうつむき加減で元気もない。
「で、誰が事情を説明してくれるんだ？」
そんな3人娘を前に轟天は不機嫌さ丸出しの表情で先を促すが、轟天の雰囲気に委縮してしまっているのか3人はうつむき黙ったままだ。
「……おい」
その雰囲気にしびれを切らした轟天が再度促そうとするが……。

クゥゥゥ……

「はぅぅ……」
リベのお腹が可愛らしく鳴り、恥ずかしそうに顔を赤くしながらお腹を押さえる。それを見て雰囲気を変える好機だと見た羅號がすかさず割って入った。
「ほら、お腹が減ってたらしゃべるのだってできないし、話はゆっくり食事をとってからにしようよ。
兄さんも3人ともそれでいいよね？　ねっ？」
「……わかったよ」

相変わらず憮然としながらも轟天が頷き、3人娘もおずおずと頷いた。5人は食堂に移動し、昼食をとるようにする。
今日の献立はハンバーグ定食だった。
メインのハンバーグは肉汁たっぷり、デミグラスソースとの相性も抜群だ。温かいご飯にもよく合う。付け合わせの目玉焼きにニンジンのグラッセ、ふかしたジャガイモも付いていて見た目にも美味しそうだ。
「相変わらずコック妖精さんの料理は美味そうだな」
「本当にそうだよね。
……そういえばあのコック妖精さん、名前あるらしいよ」
「どんな？」
『ライバックさん』、だって」
「……ここにテロリストが乗り込んできても余裕で制圧しそうだな、それ」
アハハと笑いながら轟天と羅號はさっそく箸を伸ばそうとするが、ふと見ると3人娘は固まったままだ。
「どうしたの？　食べないの？」
「……おい、まさか俺たちが毒でも盛ったと思ってるんじゃないだろうな？」
「ちょっと兄さん！」
毒を含む轟天の言葉に羅號は諌めるように若干声を荒げた。ややあって、朝潮がおずおずといった感じで聞いてくる。
「あの……本当にこれを食べていいんですか？」
「何言ってんだ？　さっきからそう言ってるだろうが……」
「本当に？
だって……こんな高級な料理、司令官でも食べれるか分からないのに……」
「はぁ？」
その答えに今度は轟天と羅號の目が点になった。確かにこの料理は美味しそうではあるが、これが高級品だと言われると首を傾げざるを得ない。

聞けば彼女たち全員、こんな高級な料理は生まれてこのかた食べたことがないそうだ。今までいったい何を食べていたのかと問えば、返ってきた答えは味の薄い栄養ブロックだという。
その答えに頭を抱える轟天と羅號の前で、ローとリベが「これは最後の晩餐なんですか？」などと言って泣き出し朝潮まで伝播、羅號は泣いている3人を大慌てで慰める。
「大丈夫、大丈夫だよ。
僕がついてる。　絶対に悪いようにはさせないよ。
だから安心して。　ね？」
「おーい弟よ。
いいこと言ってるつもりかもしれねぇが、聞きようによっちゃ俺が何かするように聞こえるから言葉は選んでおくれよ。冤罪が発生したらいくら温厚な俺でも怒るぞ」
羅號は3人娘を抱きしめたり背中をさすって安心させようとしていると、3人ともゆっくりと落ち着きを取り戻していく。3人娘が顔が赤いのは、どうも表情とか雰囲気から判断して泣いたせいなだけではないっぽい。
（この天然性スケコマシが）
轟天は心の中で毒づくとため息をつくが、すぐに表情をもとに戻して思案する。
（こいつらは艦娘、深海棲艦との戦争で最前線を担う存在のはずだ。
その最前線の連中がこの程度の料理を高級品だと言って泣く始末……普通、軍隊の最前線には最優先で食料が配給されるだろ。
おまけに『生まれて初めて』っていうこいつらの言葉を鵜呑みにすれば、一時的に補給が断たれてたとか、そんなチャチなレベルの話じゃない。
思ってた以上に状況はヤバいのかもしれないな……）
そう心の中で呟く轟天。
ちなみにその後3人娘は食後のアイスで再びむせび泣くことになり、さすがに羅號も少し引いてしまったのだった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「私たちはラバウルに所属する艦娘でした……」

やがて食事も終わり人心地つくと、３人に改めて事情を聴くことになった。一番真面目そうな朝潮が率先して状況を説明してくれる。

とはいえ、内容としてはごくごく単純な話だ。

彼女たちを含んだ艦隊は深海棲艦との海戦に敗北、撤退中に追撃を受けた。

そして傷ついた主力艦娘たちを逃がすために彼女らの指揮官である『提督』はローとリベの２人に、『玉砕』を命じたというのだ。

「それ……死ぬまで戦って時間を稼げってこと？」

羅號の問いかけにその時のことを思い出しているのか、ローとリベが涙を浮かべながらコクンと頷く。

「……」

「……抑えろ、羅號。

お前がここで怒ってもどうしようもねぇ話だろ」

「……分かってるよ」

見てわかるほどに機嫌の悪くなった羅號を轟天が諫める。それでも腹の虫が収まらないらしい羅號に轟天は肩を竦めると、そこに名前の出てこなかった朝潮に話を振った。

「で、『玉砕命令』が出たのはその２人だけなんだろ？

なんでお前はいたんだ？」

だがその質問には隣からローとリベが答えてくれる。

「あっしーは命令を無視して残ってくれたの……」

「あさしーはあのまま帰ってもよかったのにリベたちのために……」

どうやら朝潮は玉砕命令に反発、自発的に彼女たちと残ったようだ。

「どうせ私はみなしごでどこにでもいる駆逐艦娘、待ってる家族もいないしあんな命令で２人を捨て石にしてまで生き残る気はないわ。

それに約束したじゃない。　私たちは生まれは違えど姉妹みたいに、一緒に助け合っていこう、って。

私はその約束を守ったのよ」
「あっしー……！」
「あさしー！」
感極まったようにローとリベが朝潮に抱きついて泣き始める。それにつられたように朝潮も泣き始めた。
どうやらどんなところでも美しい友情の花は咲くようだ。羅號も思わずもらい泣きである。
……さすがに轟天も空気は読める。この状況でさっさと話を先に進めろとは言わなかった。しばらくして落ち着いたところで先の話を促す。
そのあとは3人でしばらく耐えていたが、いよいよというところで偶然付近を通りかかり状況を知った羅號が敵を蹴散らし、今に至るようだ。
「羅號、本当にありがとうございました。
おかげでこうして生きていられます」
「らーくん、ありがとうですって」
「いつかこういう命令がでるとは思って覚悟してたけど……リベ、ホントは怖かったの。
だからありがとう！」
命の恩人だし当然ながら本当に感謝しているようで、3人娘の中で羅號の好感度上昇が止まらないらしい。
轟天はそれを半分呆れた視線で横から眺めながら、少しだけ気になった言葉を聞き返した。
「なぁ……今こういう命令がいつか出るかもって覚悟してたって話だったが、こんなむちゃくちゃな命令がよくある話なのか？」
「士気にも関わりますし大っぴらにはされませんけど……結構ある話だとは噂で聞いています。
それにそれ以前に……ローとリベは『外国人』ですから……」
「？『外国人』だと何かあるのか？」
轟天の当然の疑問に、今度は3人娘が驚いた顔をする。どうやら何か『当然のこと』を聞いてしまったらしい。

「……羅號から俺たちの話は聞いてるか？」
「はい。　記憶がない、と……」
「なら悪いが最初から説明してくれ。
『外国人』だとなんで『玉砕命令』につながるんだ？」
「わかりました……」
そして朝潮はゆっくりと、この世界の恐るべき現状を語り始めた……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

突如として深海から現れ、人類に対して無差別に攻撃する深海棲艦が現れたのはもう１００年以上も前の話のようだ。
深海棲艦は人間を決して生かしておかない。船が沈んだ際も丁寧に丹念に一人残らず皆殺しにする、まさしく『怪物』である。
その意図も理由も何もわからないが、人類はただ生存のために深海棲艦との戦いを余儀なくされたが……通常兵器のまったく効かない深海棲艦によって、人類はあっという間に制海権を失ってしまった。
このままでは人類は滅亡する……そう思われたその時、『はじまりの妖精』とのちに呼ばれる2人組の妖精が人類の前に現れ味方をし始めたのである。そして『はじまりの妖精』に呼応するようにたくさんの妖精さんたちが現れ始めた。
彼ら妖精さんは『艤装』を造り、それに適合した女の子は深海棲艦と互角に戦う力を得る。妖精さんの造った『艤装』に選ばれた女の子、それが『艦娘』である。
艦娘の登場によって一方的な蹂躙は阻止できた人類、しかし深海棲艦の膨大な数に沿岸地域すべてを守りきることは不可能だった。
ユーラシア大陸で沿岸防衛線を突破され深海棲艦の上陸を許してしまい、そこからは海戦とともに果てるともない陸上戦が展開された。上陸した深海棲艦に対し、陸上でも能力の変わらない艦娘たちは必死の抗戦を試みるが、戦線はジリジリと後退していった。
そして約３０年前にヨーロッパが陥落、補給の断たれたブリテン島

がその5年後に陥落。その後も人類は戦線をジリジリと後退させられ、現在の人類の勢力圏は最盛期の3分の1といったところ。

現在の人類の勢力圏は

・北米大陸

・香港～ウラジオストック周辺までの沿岸部

・アフリカ大陸南端

・オーストラリア大陸

・ニューギニアなどの太平洋の島々

・フィリピンやインドネシアを中心とする東南アジアの島々

・日本

という状態まで追い詰められている。

しかしここまで来ても人類が一つになることは出来なかった。

最大の戦力を持つアメリカが『アメリカ第一主義』のもと、その戦力を自国防衛のみに廻すことにしたのである。資源をすべて国内で賄えるアメリカだからこそだが、軍事力の低い国にしたら一気に存亡の危機だ。

そんな各国が頼ったのが日本である。

日本はかなりの戦力と、艦娘に関してはアメリカを凌ぐほどの技術と実戦経験を持っているが資源がない。そのため戦力の少ない東南アジア地域やニューギニア、オーストラリアの防衛を請け負うかわりに資源を得るという形で戦力を派遣している。資源を報酬とした傭兵のようなものだ。

とにかく現在、太平洋・東南アジアでは日本が主導となりこの終わりの見えない戦いを続けており、現在のところ深海棲艦のこれらの地域への上陸は水際で防がれていた。

しかし、日本とて余裕はあるわけではない。むしろ日本も、何もかもが足りない。

広がる戦線と細くなる補給ライン……最前線は明日の補給すら分からぬ地獄めいた状態の中で戦いが続いている。そんな状態が続けば、当然ながら『玉砕』やら『死守』やら『特攻』やらの無茶な命令だって出てくるだろう。

そしてそんな中でいの一番に死地に送り込まれるのが日本国籍を持たない、故郷を失った『亡命外国人』とその子孫なのである。
そんな凄まじい状況を聞いて、轟天と羅號は絶句してしまった。
「……じゃあ何、ろーちゃんの故郷のドイツも、リベちゃんの故郷のイタリアも、2人が産まれるずっと前に無くなってて、その子孫で日本人じゃないから最初に死ね、ってこと？」
「現場ではそんなの関係なく戦友として扱うんですが……いかんせん上層部はおおむねそんな考え方です」
羅號が言うと、横から朝潮が肯定する。
一方の轟天は、予想外なほどに最悪の状況にため息をつくと羅號をそばに呼び寄せ、3人娘に聞こえないように声をひそめて言った。
「……はぁ。
羅號、お前のせいでクソ厄介なことになったぞ」
「何、兄さん？　まさか3人を見捨てるべきだったとか言うんじゃないよね？」
轟天の言葉にカチンときた羅號が言い返す。
すると轟天は苛立たしげに頭をガリガリと掻きながら言った。
「……俺たちは2日前に決めたぞ、『艦娘にも深海棲艦にも接触せず、しばらくは現状把握に努める』ってな。
あの判断は正しかったと、今はっきりと確信したぞ。
俺たちの置かれた状況はものすごくヤベェ……」
轟天はとくとくと自分たちの置かれた状況の特異性を語る。
まず彼女たち3人の艤装からその戦闘能力のほどが推測できたが、轟天と羅號に比べたら技術的にも戦力的にも天と地の差があることが分かった。轟天と羅號は明らかにオーバースペックなのである。そんな轟天と羅號の存在が露見すれば、その力をあの手この手で手に入れようとする人間は確実に出てくだろう。
だが、それ以上にまずいのはこの『緯度0秘密基地』である。
3人の食事の反応と今の話だけで本土の各種物資不足の深刻さは理解できた。しかしこの『緯度0秘密基地』はそれらを『生産』し、完全な自給自足を実現している。それだけではなく自動採掘システム

や燃料生成プラント、武器弾薬の製造工場なども完備し、軍事基地としても外部からの補給の要らない『自給自足』が達成できているのだ。こんな場所は間違いなく、この世界ではここだけだろう。
そんなことを3人娘に聞こえないように小声で轟天は羅號に語る。
「俺が人間側なら、どんな手を使ってでも手に入れようとするね。だから接触前にそれ相応の準備が絶対必須だったんだ。
でもその前に、お前はその3人を連れてきた。
……なぁ、そいつらが裏切って俺たちの存在や情報を流されたらどうする？」
「そんな！　玉砕命令まで出されるくらいなんだよ。
それに義理立てして、僕たちを裏切ったりなんか……」
「甘い、甘いぞ羅號。
国に対する忠誠ってのはかなり深いもんだ。簡単に割り切れないものもある。
それにこいつらが自発的に裏切らなくても例えば……家族や友人を盾にされたらどうだ？
そのうえで『ここの技術は人類のために拡散すべき、秘匿は悪だ』とかもっともらしいことを言われてうまく乗せられたら……どうだ？」
「……」
そこまでされたら羅號も絶対大丈夫とはさすがに言えない。同時に自分たちの置かれた状況がどれほど特殊なのかも理解できてしまう。
押し黙った羅號を尻目に轟天は深く息をつくと3人娘を見る。
「……確認だ。
お前ら……今後どうしたい？」
「まさか今さら基地に帰るわけにもいきませんから……ここに置かせて下さい！」
「「お願いします！」」
3人揃って深々と頭を下げてきた。
「……そりゃよかった。
この基地を見られた以上、ここで帰りたいとか言われても監禁する

ことになっただろうからな。
お前らは受け入れるがこっちもいろいろ特殊だ、しばらくは様子を見させてもらうぞ」
そう言って轟天は席を立つと食堂から出て行こうとする。
「兄さん、どこへ？」
「予定通り艤装の慣らし運転がてら周辺偵察だ。
羅號、お前はそいつらが妙なことをしないようにしっかりと見てろよ」
それだけ言って轟天は食堂から出ていった。
「「……」」
残された3人娘は気まずそうにしている。やがて、おずおずと言った感じで朝潮が羅號に頭を下げた。
「ごめんなさい、その……私たちのせいで……」
だが、羅號はそんなことはないと首を振った
「誰に何と言われようと、あの時3人を助けたのは間違いじゃないって僕は胸を張って言えるよ。
それが例え兄さんだって文句は言わせない。
3人は僕が絶対守るから安心して」
「羅號……」
「らーくん……ありがとう」
「ラゴウ……ありがとね」
羅號の言葉にまたも感激する3人娘なのだが、羅號としては当然のことをしているだけなので何ともくすぐったい。
それに……。
「それにね……兄さんも口ではあんな風に言ってるけど、もし僕と同じ立場になってたら兄さんだって3人のことを助けたはずだよ。
もっとも兄さんのことだから『情報収集のために必要だと判断した！』とか言い訳がましいことを言って、素直に『見捨てられなかった』とは絶対言わないだろうけどね」
そう言って羅號は苦笑しながら肩を竦める。それを見て3人も微笑んだ。

「ラゴウ、お兄ちゃんのこと信用してるんだね」
「当たり前だよ、なんといっても僕の兄さんだからね」
リベの言葉に、羅號は少しだけ誇らしげに笑った。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「うぁ……」
うめき声をあげ彼女は目を覚ました。艤装は鉄くず同然、身体もそこらじゅうが痛いが、幸いなことに欠損はなく五体満足だ。
「私……生きてる?」
深海棲艦の攻撃を受け、その爆風で意識がとんでしまったのは覚えている。辺りは夕暮れ時、彼女が気を失ってから1時間ほどといったところだ。
「そうだ……みんなは……!」
ゆっくりと上体を起こすとその時彼女は気付いた。とても嫌な『音』がすることに……。

バリッ、ボリッ……!
グチュ、ブチャ……!

何か堅いものを砕く音と、同時に水っぽい柔らかいものを潰すような音がする。
嫌な予感がふつふつとした。そして彼女が見たそこには……。
「ヒィッ!?」
何があってもいいように抑えていたはずだったのに、悲鳴が抑えきれなかった。
そこでは深海棲艦が食事の真っ最中だった。強固な鋼鉄すら砕くその顎で喰らっているもの……それは彼女の仲間たちの変わり果てた姿だ。砕けた艤装と仲間たちの身体が、まとめて混ざり合ったミンチになって咀嚼されていく。
そして、そんな彼女のあげた悲鳴は食事中の深海棲艦たちに新たな

食材がそばにいることを知らせてしまった。
クルリと振り返ったのはその中心にいたレ級だった。たった1人で航空戦・砲戦・雷撃戦のすべてをこなすまさに『1人聯合艦隊』ともいえる存在である。そのしっぽ型の艤装が持ちあがる。その巨大な口は艤装の油の黒と、仲間の血の赤でべっとりと汚れていることが夕日に照らされてくっきりと映った。
レ級が赤い口を釣り上げニィっと笑う。
途端に取り巻きの駆逐イ級が彼女に向かってきた。敵は砲も魚雷も撃ちはしない。
もう彼女は戦えない、浮いているだけなのだと深海棲艦たちは分かっているのだ。深海棲艦たちにとって彼女は少しばかり『活きのいい食材』でしかない。だから攻撃などせずに、素直に食材にかぶり付くだけだ。
彼女は思う。
この世には神も仏もいやしない。
誰かの祈りを聞き届けてくれるような神様や仏様がいるのなら、もうとっくに世界は平和になっている。
もしいるとするなら……底意地の悪い悪魔くらいのものだ。気を失っている間に終わっていればいいものをこうやって目を覚まし、生きながら喰われる痛みと恐怖の中で死ぬのだ。こんな悪趣味な偶然は悪魔の粋な計らいだろう。
彼女はすべてを諦め、せめてなるべく苦しくないことだけを祈った。大粒の涙が彼女の瞳から零れ落ちる。
迫る駆逐イ級は大口を開けて彼女にかぶり付こうと迫る。だが、その口が彼女に届くことはなかった。

ビィィィィ!!

2条の光線が後方から彼女の脇を通り過ぎた。その光線の直撃を受け、2匹の駆逐イ級が千切れ飛び、海中に沈んでいく。
突然の謎の攻撃に深海棲艦たちが一気に警戒を強め、何が起こった

のか分からない彼女もゆっくりと振り向いた。
そこにいたのは奇妙な艦だ。
戦艦と思われるが、砲は一切存在しない。その代わりのようにパラボナアンテナのような機材や、各所に四角いものが敷き詰められている。
だがそんな奇妙さは些細なことだ。
少なくともそんなものは……『男』であることや、そしてその手にしたものに比べれば些細なことである。
彼の右手は長い柄を持っており、それを肩に担いでいた。ただその柄の先端に付いているものは、槍の穂先などという生易しいものではない。それは巨大な円錐、凶悪なそれの名は……『ドリル』。
超巨大なドリルのついた長い柄のそれは、まるでメイスだ。そんなものを担いでゆっくりとやってきた彼はチラリと彼女の方を見ると、盛大なため息をついた。
「……ダメだ。　ああ、こりゃダメだ。
こんなもん見せつけられたらこう……抑えられなくなっちまう。
俺も羅號に偉そうなこと言えねぇな……」
そして彼は視線を深海棲艦たちのほうに向けた。
「それに深海棲艦……生で初めて見たが、よくわかったよ。
テメエらは『やつら』と同じようなもんだってのがな」
すると彼は何故か首を傾げる。
「はて……今口走った『やつら』ってのは何だ？
……ちっ、記憶喪失ってのは不便でならねぇ」
何やらブツブツと呟いた後、彼はその肩に担いだドリルメイスの切っ先を深海棲艦たちに向けた。
彼女は知っている。
この世には神も仏もいやしない。
神様も仏様もどれだけ祈っても手を差し伸べてなんてくれない、どこまでも残酷で非情なのが真っ暗闇のこの世界だ。
しかし……。
しかしそれでも……。

「海底軍艦『轟天』、敵を撃滅する!!」
どんな真っ暗闇の世界でも、『光』はきっと存在する。
そしてその時彼女は、その『光』に出会ったのだった……。

圧倒

「やれやれ……何やってるのかね、俺は？」

轟天は思わずため息をつく。

偵察とは名ばかりの、艤装に慣れるための散歩のようなものだったはずがこうして深海棲艦の集団を前に戦闘態勢に入っている。そしてそんな轟天の後ろには、今にも殺されそうな艦娘の姿。

「羅號に偉そうなこと言えねぇや」

轟天は思わず苦笑した。

羅號があの3人を助けたことにあれだけ偉そうにご高説を垂れたというのに、いざ自分がそんな場面に出くわしてみれば見て見ぬふりはできなかった。

それに……轟天は今初めて深海棲艦の実物を見たわけだが、その姿を見た瞬間に分かったことがある。

こいつらは人類の『絶滅』が目的だ。滅ぼさなければ人類が滅ぼされる。

人型をした個体はいるが、人の形をしているというだけ。どうあがいたところで決して分かり合えることはない。

何故なら、こいつらは『やつら』と同じ■■■■■■■なのだから……。

「ぐぅっ……！」

突然の頭痛に轟天は顔をしかめる。

「本当に……記憶喪失ってのは不便だな。

よく分からんことを口走ったり、ちょっと何かを思い出しかけると頭痛がしやがる……」

深く考えるのは後だと、轟天は頭を振って目の前の敵に集中する。

そう、『敵』だ。

これも失った記憶に関係あるのだろう。見ているだけで嫌悪感が湧き上がる。

こいつらは一匹残らず叩き潰さねばならぬと、本能が叫んでいた。
「まぁいい……詳しいことはゆっくりと、こいつらを叩きつぶしてから考える！」
その声とともに轟天が攻撃を開始した。
「ＶＬＳ開放。　フルメタルミサイル、発射！」
轟天の背中の艤装、そこから垂直に発射された噴進弾、それが意思を持つように途中で向きを変えながら深海棲艦隊に襲い掛かった。駆逐級はもとより、装甲の分厚いはずの重巡や戦艦ですら一撃でその装甲を貫かれ、内部から爆発していく。
「『やつら』の分厚い防御を貫くためのもんだ、そんな程度の防御力で防げるかよ」
笑いながら言う轟天に、深海棲艦隊は総攻撃を開始した。
レ級から艦載機が発艦し、轟天に襲い掛かろうとする。しかし轟天は慌てることなく指示を出す。
「ドッグファイター射出、制圧しろ！」
轟天から射出されたもの、それは鋭角的なフォルムの飛行機だ。それが猛然と炎を噴き出しながら空へと昇っていく。
その正体はジェット戦闘機だ。数はそれほど多くはないが、そこから噴進弾が発射され迫る深海棲艦の艦載機を叩き落とす。生き残った敵艦載機隊も、その別次元のスピードと機動力によって瞬く間に墜とされた。
続けて深海棲艦隊からの猛烈な砲撃が放たれる。
「回避……はしないほうがよさそうだな」
チラリと背後で茫然としている艦娘を轟天は見た。今ここで回避すれば、下手をすればこの動けない艦娘に敵弾が直撃してしまう。
ならばやることは一つだ。
「小型プラズマメーサービーム砲、全基稼動。　敵弾を迎撃！」
轟天から何条もの光が空に向かって放たれ薙ぎ払われる。それが飛んでくる敵の砲弾をことごとく空中で爆発させた。その光はそれだけにとどまらず、深海棲艦にも放たれる。
光にあたった深海棲艦は、まるでバターを温かいナイフで切るかの

ように装甲を焼き切られて爆発、そのまま海中に姿を消した。
「さて……残りはお前さんだけだな」
いつの間にか大量にいた深海棲艦は海中に没し、残っていた深海棲艦はレ級だけだ。レ級は強烈な砲撃を轟天に向かって連射するが、そのことごとくは先ほどの光が撃ち落としていく。
悔しそうにレ級は歯噛みした。だが、轟天はそれを見て不敵に言い放つ。
「何だお前、もしかして攻撃を当てさえすれば勝てるとか思ってるのか？」
すると轟天は大仰に手を広げた。
「いいぜ、撃ってこいよ。
サービス期間で迎撃はなしだ。受けてやるから撃ってみな！」
その不敵さに怒ったのかそれとも恐怖を感じたのか、レ級から主砲の一斉射が放たれた。それはそのまま轟天に直撃し、爆炎とともに水柱が巻き上がる。
レ級の主砲、その一斉射撃の直撃を受ければ人類側で最強と言われる大和型戦艦であっても無事では済まない。場合によっては一撃で轟沈だ。確かな手ごたえに思わずレ級の表情にいつものニタリとした笑みが浮かぶが……その顔はすぐに凍り付いた。
「なんなんだぁ、今のは？
ただ海水を巻き上げるだけの攻撃か？」
水しぶきの向こうから轟天が現れた。その姿には傷はなく、まったくの無傷である。
「俺の装甲はすべて、超耐熱耐衝撃特殊合金ＮＴ――１とスペースチタニウムの３重複合構造に表面にはブルーダイヤモンドコーティング処理を施した特殊装甲だ。
『やつら』の攻撃に耐えるために造られたこの装甲に、そんなチャチな攻撃が通用すると本気で思ったのか？」
言いながら轟天は右手に持ったドリルメイスを振り上げる。超重量を誇るだろうそれをまるでおもちゃのように簡単に振り上げると、ドリルが回転を始めた。

「さて……覚悟はいいかい？
ミンチになるのお時間だ」
その言葉に恐怖に駆られたのか、レ級はそのしっぽを振り上げながら突撃してきた。しっぽ型の艤装が轟天を噛み砕こうと迫る。しかし轟天は全くひるまず、そのまま回転するドリルメイスを振り下ろした。

グチャ!!

嫌な音ともにしっぽ型の艤装が叩き潰される。それだけでは済まず、回転するドリルによってしっぽ型の艤装がぐちゃぐちゃと音を立てながら引き千切られていく。
レ級の口から、訳の分からない絶叫が響いた。恐怖に顔を歪め、レ級が逃走しようと背を見せる。
轟天はゆっくりとドリルメイスを正面に構えた。すると回転するドリルが光を放ち始める。
「ドリルスパイラルメーサーキャノン、発射！」
放たれたのは光の渦だ。その渦の本流に巻き込まれ、レ級は比喩や誇張ではなく跡形もなく消し飛んだ。
「さて、と……」
深海棲艦を撃滅した轟天はドリルメイスを艤装のマウントラックに戻すとゆっくりと辺りを見渡した、ところどころで深海棲艦の残骸が海を汚しているだけで、静かな海だ。
「……で、大丈夫か？」
轟天は生き残っていた艦娘に振り返る。彼女は目の前の現実が信じられないような顔をしていた。
「私、生きてる……」
「危ないところをギリギリだったみたいだがな……悪運が強いぞ、お前」
そう言って轟天は今だ立ち上がれていない彼女に手を差し伸べる。彼女はその手を握るが、そこで今までの極度の緊張から解放されたせ

いか、そのまま気を失ってしまった。
「お、おい！」
轟天は慌てて彼女を抱き起こすが、起きる気配はない。
「勘弁してくれよ、まったく……」
轟天はため息をついた。
彼女の艤装の損傷は酷い。この状態で放置してしまえば遠からず沈んでしまうだろう。彼女の艤装に乗っている妖精さんたちも助けてほしいと訴えていた。
「そんな目で見るなよ、ここまで来て見捨てたりしねぇよ。よっと！」
妖精さんたちに答え轟天は彼女を、いわゆるお姫様抱っこで抱え上げた。
轟天としてはこの行動に他意はなかった。気絶しボロボロの状態の女の子をまさか引きずって行くような真似はできないし、艤装がある関係上背中に背負うことはできない。
そのために消去法でお姫様抱っこで抱え上げたわけなのだが……。
「……すげっ」
思わず声が出てしまった。
戦闘のせいでところどころ破れた衣服から彼女の白い肌が覗く。すすに汚れながらもその整った顔立ちは『美少女』以外の形容詞が出てこない。
そして何より、外見的に年齢は轟天と変わらない14～15歳くらいだろうに、その胸の成長具合は……明らかにスゴかった。そんなたわわなふくらみが、ところどころ破れた服からチラチラと覗いており非常に目のやり場に困る。
「駆逐艦おっぱいビッグセブンの1人です？　いや、そんな情報はいらねぇから。
触りますか、旦那？　あのな、気絶した相手にそんなことするほど俺は鬼畜じゃねぇぞ」
彼女の艤装の妖精さんたちの言葉に返しながらも、やはり気になってしまうのは悲しい男のさがである。

「しかし……羅號にはどう言ったもんかね……」
再びため息をつく轟天。だが次の深海棲艦が現れる可能性もあるし、艦娘たちに見つかってさらに厄介な話になるものごめんだ。それ以上に彼女は早急に手当てをしたほうがいい。
あれやこれやと考えながら、轟天は『緯度0秘密基地』への帰路に就くのだった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「兄さん、おかえりなさい！」
「ぐっ……羅號……」
誰もいないことを期待しながら轟天は『緯度0秘密基地』のドッグに降り立ったが、その願いは無駄だったようだ。羅號だけでなく、羅號の助けた朝潮・ロー・リベの3人娘まで総出でお出迎え状態である。
気を失った彼女をお姫様抱っこで抱えながら帰還した轟天を出迎えた羅號は満足げなニコニコ顔だ。3人娘まで何か微笑ましいものを見るような感じである。
まるで「こうなることは分かっていました」みたいな雰囲気であり何か言ってやりたいところなのだがうまい言葉が思いつかない。それはなるべく早く彼女を休ませてやるために轟天がかなり飛ばしたせいで、あまり考える時間がなかったのも原因だった。
「その娘は？」
「……深海棲艦に仲間が全滅させられて、やられそうになってたから拾った」
どこか憮然として言い放つと、ますます嬉しそうにする羅號。
「やっぱり兄さんだね。
兄さんも危機に陥った娘を見捨てられず、思わず助けたんでしょ？
兄さんならそうするって信じてたよ」
まったくもってその通りなのだが……なんだかそれを素直に認めるのは負けのような気がしてきた。
「そんなわけあるか。

俺はその……しっかりとした理由があって助けたんだぞ！」
「へぇ、どんな？
いろんな情報も聞けたし、朝潮やろーちゃん、リベちゃんで足りないものがあったの？」
「それは……その……」
無論、そんな高尚な考えなど轟天には欠片もない。必死になって考えを巡らせる。
（どうする？　何かこの３人に無くて、こいつにだけあるものは……そうだ!!）
……人間、往々にして追い詰められて切羽詰まった時にひねり出した考えは穴だらけでロクなもんじゃない。しかし、その瞬間だけは「なんてすごいことを思いついたんだ！俺って天才じゃね？」と心の底から思っていたりするものだ。
もういっぱいいっぱいだった轟天はまさしく、そんな状態だった。だからこそ、そんな言葉を口走ってしまったのである。
「こいつは……『おっぱい成分補給艦』だぁぁぁ!!」
「「「……はぁ??」」」
轟天の言葉に、「何言ってんだこいつ？」という感じで羅號と３人娘の声が重なった。
「だから『おっぱい成分補給艦』だよ！
でっかい胸には夢が詰まってる！　いるだけで目の保養になって男としての士気に関わるからな！
だがそこの３人の小さな胸じゃまったく士気高揚にならん！
そこで不足分を補ったわけだ！」
「いやいやいやいや、兄さん。
３人は歳相応ってだけで小さいとかそういうわけじゃないと思うよ。
というか何をさも当然のことのようにむちゃくちゃなセクハラ発言してるのさ、兄さん！」
呆れたように息をつく羅號。
「あのさぁ……ちょっと面白がってからかったのは謝るからさ、素直

に『見捨てられなかった』でいいんじゃないの？」
「いいや、計画通りの行動だ！」
ここまでくるともう意地である。轟天は素直に見捨てられなかったとは頑として認めない。
そんな意固地な兄に、再び呆れたようにため息をついた羅號はその時に気付いた。
「あっ……。
あの……兄さん？」
「何だ？」
「えーと……」
羅號が言いにくそうにちょいちょいと、轟天の下の方を指さす。
「あん？」
轟天がその指の方にゆっくりと視線を移すと……いつの間にか目を覚ましていた彼女とばっちりと目が合ってしまった。
彼女はちょっと困ったような顔を浮かべながらも、小さく手を振りながら言う。
「えっと……はいはーい、おっぱい成分補給艦の村雨だよ。
あの……よろしくね」
「……」
もうすべてを聞いていた彼女……村雨の茶目っ気をきかせた自己紹介に轟天はしばし無言だった。
やがて轟天は無言でお姫様抱っこで抱えていた村雨をゆっくりと降ろす。
そして……。

ｏｒｚ

あまりの恥ずかしさに膝から崩れ落ちた。
「ちょ、ちょっと。
あの……男の子としては恥ずかしくない普通の反応だと思うよ、うん！」

「……慰めありがとよ。　でも逆にもっと恥ずかしくなるからやめてくれ……」
慌ててフォローに入る村雨に、さらに気恥ずかしなって落ち込む轟天。
こうして轟天と羅號の、人類、そして深海棲艦との初遭遇は過ぎていったのだった……。

一日の終わりに

「……お前さんも境遇は似たようなもんか」
「まぁね、どこも似たような状態よ」
医療施設での治療を終えた村雨も交えた6人は、村雨の話を聞きながら食堂で夕食をつついている。
今日のメニューは麻婆豆腐だ。中央に大きく盛り付けられた辛口の麻婆豆腐に、白いご飯がすすむ。
ちなみに村雨はショートランドの所属だったそうだ。輸送護衛任務の最中に敵艦隊と遭遇、輸送船の海域脱出のための時間稼ぎとして仲間たちとともに捨て石にされたそうである。
「艦娘の命より物資が大切、ってか……」
「貴重な戦略物資だしねぇ」
「捨て石にされたってのにずいぶんと冷静だな、お前」
村雨は3人娘より見た目一回りほど年上だが、どうやら精神の方も一回りは大人らしく落ち着いている。ここの設備や料理の豪華さに驚いてはいたが、さすがにむせび泣くようなことはなかった。
かなり重い話をしているというのに軽快にご飯をパクつきながら答える村雨に、轟天は肩を竦める。
「そういう話は噂でいくらでも聞いてたし、噂だけじゃないってことは気付いてたから。
だからみんな、いつかそうなるだろうって覚悟はしていたし、実際に命令されても『ついに来たか……』って思ったのが本音ね」
「……まったく、聞けば聞くほど嫌な話だな」
轟天は深々とため息をついた。
「……兄さん、これからどうするの？」
「……」
食後の杏仁豆腐を食べ終わり、今はお茶を飲みながらこれからのことを話している。
朝潮・ロー・リベの3人とも村雨は打ち解けているようで、お茶請けのお菓子を片手に会話を楽しんでいた。

「一応の確認なんだが……お前は今後どうしたいんだ？」
「ここに置いてほしいな。
もう戦死認定されちゃってるだろうし、みんなも死んじゃったのに今さら私だけ帰ってもねぇ……どうせまた次の作戦で捨て石にされるだけだもの。
それに……この基地を見ちゃったし、帰るってわけにもいかないんでしょ？」
「まぁな。
でも故郷に未練とかはないのか？」
「そりゃ、本土にいるお母さんには会いたいけどそれは今じゃない。
その時までゆっくり待てるわ」
「そうか……」
村雨の言葉に轟天は頷いた。やはり外見通りなのか、村雨は3人娘よりずいぶんと精神的に大人だ。こんな状況だというのに冷静に物事の判断ができているし、仲間が死んで悲しいだろうに感情のコントロールも出来ている。
そんな風に轟天が心の中で村雨の評価を上げていると、村雨は何やら小悪魔的に笑いながら言った。
「そ・れ・に♪
おっぱい成分補給艦がいないと、轟くんの士気とやる気に関わるもんね♪」
「……頼むからその話を蒸し返さないでくれ。
恥ずかしくて死にそうだよ」
言われて顔を赤くしながら頭を抱える轟天。そんな轟天を面白そうにクスクスと品よく笑う村雨。
よく分からない意地と勢いに任せていたとはいえ、何ということを口走ったのかと今さらながら轟天は後悔した。
同時に、少し精神的に大人かと思えばこうして歳相応にいたずらっぽいところのある村雨の性格は、付き合いやすく気疲れしなくていいと内心でまた村雨の評価を上げていたりする。
「……まぁいい。

それで今後の方針だが……この『世界』の現状は把握できた。
それで羅號に確認したいんだが……お前、深海棲艦を見てどう思った？」
その問いに羅號はしばし目を瞑って考えた後に、ゆっくりと言った。
「その……あんまり口汚い言葉はよくないって分かってるんだけど……率直に言って『徹底的に叩き潰さなきゃダメだ』って思った」
「へぇ、ずいぶんとお行儀のいい言葉だな。
俺は素直に『一匹残らずブッ殺してやりたい』って思ったぞ」
その言葉で、轟天は羅號が自分と同じ感想を深海棲艦に抱いていたことを確信する。
（まぁ当然だな。
俺たち2人が『やつら』と同じ深海棲艦（アレ）の存在を容認できるわけが……）
「ぐっ!?」
「うぐっ!?」
深く考えようとした矢先、突如として襲ってくる頭痛に轟天と羅號は顔をしかめる。
「どうしました、羅號!?」
「らーくん、しっかり！」
「痛ぅ……うん、大丈夫だよ。みんな」
羅號は微笑みながら心配そうにやってきた3人娘に、安心させるように「大丈夫」と言い放つ。
「轟くん、大丈夫なの？」
「……ああ、一瞬鋭い痛みが走っただけだ。問題はない。
……って、何やってんだお前？」
「ほら、撫でてれば少しは痛くなくなるかなぁ、って」
「……まぁ気休めかもしれないけど少し楽になった気はする。
ありがとよ」
轟天は横から村雨に撫でられていた。同い年くらいの女の子に頭を撫でられて恥ずかしそうにするも、しっかりと礼は言う轟天。そん

な轟天に何やら満足そうに村雨は頷いた。

「まぁとにかく……俺と羅號の失った記憶に深海棲艦、そして『ナニカ』が関わっているのは確実だ。

人類をこのまま見殺しにする気はないし、深海棲艦との戦いにも異論はない。つーか、深海棲艦は潰させろ。

ただ、人類との本格的な接触もまだ早い。だからやっぱり今は準備期間だ。

ここの設備を使って俺と羅號の艤装は調整、ほかの全員の艤装は大幅に改造して戦力アップを図る。同時にこの基地の防備も固めよう。『緯度0秘密基地』は俺たちにとっての生命線だからな。

それが終わったら今日みたいに少しずつ仲間を増やしながら人類側と接触して、共同で深海棲艦を潰す。

方針はこんなもんでどうだ?」

「そうだね、それが一番だね」

轟天の方針に羅號も頷く。ほかの4人からも異論の声はない。もしくは自分たちに発言権はなく、轟天と羅號の決定に従うということなのだろう。

「さて……これから忙しくなるぞ」

「そうだね……」

まだまだ分からないことは多い。しかし、大きな前進をした気になる轟天と羅號だった……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

夜のとばりが下り、辺りはすっかりと夜だ。

未だこの基地の場所は誰にも知られていないだろうし周辺警戒は妖精さんたちに任せ、轟天たちは風呂に入って眠ることにする。

ちなみに後ほど村雨から轟天が聞いた話によると、やはりというかかんというか、3人娘は風呂の豪華さでむせび泣いていたそうだ。あの3人は貧乏キャラか何かなんだろうか、と轟天が少し呆れていたのは秘密である。

とにかく風呂も入ったことだし全員今日はいろいろあった。早めに横になろうと各自の割り当てられた部屋に入ったわけだが……。
「……眠れねぇ」
ベッドに横になりながら、轟天の目は未だしっかりと冴えている。
今日はいろいろなことがあった。
羅號が朝潮・ロー・リベの3人娘を拾ってきたことから始まり、今の世界の現状を知り、深海棲艦と戦って村雨を助けた。1日で起きるイベントにしては数が多すぎだ。
入ってきたいろいろな情報、そして初陣を飾った興奮も手伝って目が冴えてしまているのである。
その時。

コンコンッ……

「ん……？」
ドアをノックする音。少しだけ不審に思いながら轟天がドアを開けるとそこには……。
「はいはーい。　あなたのおっぱい成分補給艦、村雨だよ」
寝間着姿で枕を抱えた村雨の姿があった。
「……」
「ちょっ、まっ！　無言でドアを閉めないでぇ！」
「あっ、俺はアホの子は放置する方針なんで」
「放置とか村雨、そんな趣味ないから構ってー！」
「やかましいわ、このアホの子が」
しばしの問答の後、結局轟天は村雨を部屋の中に招き入れた。
「で、こんな時間に何の用だ？」
「えっと……」
何やら言いにくそうに頬を掻く村雨に、轟天は「コイツ何しに来たんだ？」と不信感を含んだジト目になっていく。
やがて村雨は少し顔を赤くしながら、
「あのね、ちょっと恥ずかしいんだけど……その……轟くんに一緒に

寝て欲しいなぁ、なんて……」
　そんなことをのたまった。
「あのなぁ……とりあえず頭は大丈夫か、アホの子？
　男の方がいうことじゃないがお前、自分の身体は大事にしないと……」
「って違う！　違うからぁ！
　そういうえっちいことじゃないってばぁ！」
　呆れ顔で轟天が言うと、顔を赤くした村雨はぶんぶんと首を振る。
そして事情を話し始めた。
　聞けば最前線に身を置き、明日をも知れぬ身だった村雨たち。覚悟はできていても不安が無くなるというわけではない。そこでそんな不安を紛らわすように仲間と一緒に寝ることを習慣化していたそうだ。
「……で、俺に抱き枕がわりになれと？」
「うん。　どうも誰かと一緒じゃないと落ち着いて眠れなくって……。
　でも一緒に寝てた友達はみんな今日死んじゃったし……」
　……案外に重い話だった。
「事情は十分わかったんだが……なんで俺？
　同性なんだしあの3人のところは？」
「年下の仲良し3人組のところに、今日初めて会った子が『一緒に寝てください』って言ったらどんな反応が返ってくると思う？」
「それは分かるが、同じ言葉を男の俺に言うのも難易度高いと思うぞ」
「そこはほら、轟くんは命の恩人だしその分難易度低いかな、って……」
「そういうもんかね？」
　轟天はあきらめたようなため息をついた。
「俺はもう寝る。　好きにしてくれ」
「やった。　ありがと、轟くん♪」
　そう言って轟天はベッドに横になり、村雨も潜り込んでくる。
「……うわぁ。

男の子と同じ布団に入るのって、なんか予想外にドキドキするんですけどぉー」
「そりゃこっちのセリフだバカヤロウ。
男はオオカミなのよ気をつけなさいって習わなかったのかコノヤロウ」
「年頃になったら慎みなさいって教わったかな」
轟天の言葉が面白かったのかクスクスと村雨は笑う。
「それじゃオオカミから赤ずきんちゃんに食べられないための耳より情報をやろう。
……俺が寝ちまうまで、何か話でもしてくれ」
「なになに？　千一夜物語（アラビアンナイト）をご所望なの？」
「まぁな……俺と弟は知っての通り記憶喪失だ。
どんなことでも目新しいからな、なんでもいいぞ」
「で、面白くなかったら村雨はオオカミに食べられちゃう、と？
いいわよ。　それじゃ……」
そう言って村雨が始めたのは彼女の仲間たちの話だった。
仲間たちと泣いて笑って、共に過ごした日々の思い出が面白可笑しく語られる。
最初は饒舌だった村雨だが話しながら仲間たちのことを思い出していたのだろう、もう会えない仲間たちを思いその口調はだんだんとゆっくりになり、最後には嗚咽を漏らし始めた。
「……そっか。　いい仲間だったんだな」
「うん……私の自慢の仲間たちだもの。
轟くんにも見せたかったなぁ……」
「ああ、そうだな……」
涙声で鼻を鳴らす村雨に、話を聞いていた轟天は返す。
「今の話を聞いて、俺はお前のことをうらやましいと思ったよ。俺にはそういう記憶がないからな。
だから……俺は今、不安でしょうがない」
「不安？　轟くんが？」
「……『記憶』ってのはすなわち過去であり、自分を形作る根っこみた

いなものだ。
それが無いってのは例えるなら、真っ暗闇の夜の海をどこにあるかもわからない陸地を目指して泳ぐようなもんだ。不安でしょうがないに決まってる。
もしこれで同じ境遇の弟がいなかったら……俺は不安で狂ってたかもしれないな」
村雨にそうやって記憶がないことへの不安を口にする轟天。
あまりにも強大な力を持ち自分を助けてくれた轟天を、村雨はどこかまったく別の次元に生きる存在だと思っていた。しかしそれは違う。
こうして不安を口にする姿は村雨と同じくらいの歳の、等身大の男の子のものだ。村雨には轟天という存在を、ずっと身近に感じられるようになった気がした。
「……なぁ、俺にも家族や、村雨みたいに大切な仲間や友達がいたと思うか？」
「うん、きっと……ううん、必ずいたはずだよ」
「そっか……」
それっきり2人の会話は途絶え、やがてどちらともなく小さな寝息が聞こえ始めた。
轟天にとっても村雨にとっても衝撃的だった1日は、やっと終わりを迎えたのだった……。

準備の日々

『……』

海上を航行する深海棲艦の艦隊……その編成は正規空母ヲ級2、戦艦ル級2、駆逐ロ級2という非常に強力な護衛艦隊だ。その艦隊が守るのは補給艦ワ級4、軽巡ホ級2という輸送艦隊である。

対空・対艦・対潜すべてに対応できる万全の警備体勢の中で航行していた艦隊だが……。

『!?!!』

それに最初に気付いたのは輸送艦隊のホ級だった。何か……海面スレスレを飛んでくる飛行物体を発見したのである。敵航空機かと艦隊は一気に警戒に入り各艦は対空弾幕を張ろうとし、ヲ級も迎撃のための艦載機を大急ぎで発艦させようとする。

しかしその飛行物体はあまりにも速かった。各艦の対空弾幕よりも速く接近すると急上昇、その後艦隊に向かって急降下を始める。急降下爆撃かと思われたそれは、爆弾を投下することなく、そのまま各艦にぶつかっていく。

凄まじい爆炎が護衛艦隊各艦に巻き起こった。

発艦作業中であった空母ヲ級は1隻がそのまま轟沈、もう1隻が大炎上中で沈むのは時間の問題だった。装甲の厚い戦艦ル級も2隻とも大炎上と傾斜を起こしており大破状態、駆逐ロ級に関しては木っ端みじんである。

一体何が起きたのか全く分からず混乱する艦隊、そこに3つの艦影が高速で突撃してきた。

「村雨の、ちょっといいとこ見せたげる！」

「攻撃開始！　この海域から出て行け!!」

「リベ、本気で行くよー！」

駆逐級の艦娘たちだ。しかしその速度が普通ではない。各艦ともに40ノット越えは確実、下手をすれば50ノット近く出ている。

何とか生き残っている砲を向けようとするル級たちだが、それよりも早く駆逐艦娘たちが魚雷を放った。しかし理解しがたいことに各

艦１本ずつだけである。
　魚雷は高度な未来予測を必要とする武器、扇状に大量に放つことで真価を発揮する。だというのにそれをたった１本、しかもあんな遠距離からでは当たるはずもない。ル級は安心してゆうゆうと砲を向けようとしたその時……当たらないはずの魚雷が炸裂した。しかもそれは３本のうち１本がマグレで当たったというわけではない。２隻のル級と生き残っていたヲ級のそれぞれに同時に魚雷が炸裂していた。これは３本の魚雷すべてが別々の目標に正確に命中したということに他ならない。常識では考えられない事態である。
　護衛艦隊の全滅を理解した輸送艦隊は即座に転身、逃げに入る。しかしその瞬間水柱が上がり２隻の輸送ワ級が炎を上げながら沈んでいった。
「さぁいきます、てー！」
　敵の影は海上にはない。となればその正体は潜水艦だと判断した軽巡ホ級は自身のソナーによってその位置を探ろうとするものの、どれだけやってもソナーには影も形もない。
　軽巡ホ級は狂ったようにやみくもに爆雷をばら撒くが、その２隻の軽巡ホ級に魚雷が突き刺さり轟沈する。
　護衛戦力の消えた、足の遅い輸送ワ級の運命は決まった。数分もしないうちに輸送ワ級は炎を上げながら轟沈し、ここに深海棲艦隊は１隻残らず全滅したのだった……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「すっごーい！　リベたちすっごく強くなっちゃった！」
「本当ですって！　あんな近くまで行ったのに敵に気付かれないなんてすごい！」
「羅號たちの言葉を疑うわけではなかったですが……私たちだけであの規模の艦隊を一方的に殲滅できるなんて……」
　リベとローは無邪気に喜び、朝潮は自分の手に入れた予想外なまでの力に信じられないかのように手を握ったり開いたりを繰り返して

いる。その彼女たちの艤装の形状は、始めて羅號が彼女たちと出会った時とはまるで違っていた。
「ほらほら、驚いてないで仕事の続き。
早く戻って妖精さんたちに調査結果を持って行こう」
「あ、はい！」
そう言って声をかけたのは艦隊の旗艦であり、３人よりも年上の村雨だ。彼女の艤装も始めて轟天が彼女と出会った時とは全く違う。村雨の言葉におしゃべりをやめた３人は陣形を組みなおすと航行を再開した。
彼女たちの向かう先は、もはや彼女たちにとっても家となった『緯度０秘密基地』である。
彼女たちが轟天や羅號と運命的な出会いをしてから早いもので２週間ほどの月日が経っていた。
あの後２人はやはり方針通り戦力の増強に取り掛かった。彼女たち４人の艤装の全面的な改装である。
それはもはや改装というより作り直しに近かった。普通の工廠では絶対にありえない光景に４人は若干の不安を感じていたわけだが……それは杞憂だった。
信じられないほどの索敵範囲と精度を誇るレーダーとソナー。
とんでもない遠距離から当たり前のように命中し戦艦級の装甲すら一発で貫く対艦誘導噴進弾（ミサイル）。
信じられないような速度で連射される主砲。
敵航空機を自動的に叩き落とす迎撃機銃群。
水上目標だけでなく潜航中の潜水艦にすら自動で追尾し命中する対艦対潜誘導魚雷。
彼女たちからすればＳＦ小説の中にでも出てくるような超兵器のオンパレード、それが彼女たちに搭載された装備だったのである。
そんな新兵器を装備して今日は彼女たち４人は初任務の真っ最中のところで敵艦隊を発見、攻撃を仕掛けたというわけだ。
試射は何度もやったし短時間とはいえ集中的に訓練したので新兵器の扱いには熟知したつもりだったが今日は初の実戦、不安がなかっ

たわけではないのだが……最初の対艦誘導噴進弾(ミサイル)だけで一方的に敵を屠れたことでその不安は吹き飛んだ。本来ならばこんな駆逐艦・潜水艦の４隻での編成では手も足も出ないだろう規模の艦隊だったというのに、終わってみれば完全勝利(パーフェクトゲーム)である。
「この力があれば深海棲艦なんて……」
「そうね。
　でもだからこそ２人は慎重にもなるし、頭を抱えてるのよね」
　朝潮と村雨は自分たちの手に入れた強力な力に驚き、同時にどうしてあれだけ２人が慎重になっていたのかが分かる。
　この力は誰もが欲しがるものだ。それこそ、どんな手を使っても何を犠牲にしても……それが２人と同じように強力な力を手に入れた今なら分かった。
　いや……。
『同じ』なんて、うぬぼれが過ぎるわね。
　私たちなんて轟くんたちと比べたら足元にも及ばないもの」
　苦笑しながらの村雨の言葉に、それが聞こえていた３人は同じように苦笑しながら頷いた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

　海が燃えていた。
　この泊地を任された深海棲艦の上位種……泊地棲姫は目の前の光景の意味が全く分からなかった。
　泊地が燃え、次々と仲間が沈んでいる。それはいい、大量の敵が来たのならそれもありえるだろう。
　しかし……彼女らの前に立ちふさがったのは、たった２隻だけだった。
　敵から訳の分からない光線が飛べば味方は灰燼へと姿を変え、大口径砲が吼えれば味方が木っ端みじんに吹き飛ぶ。
　無論深海棲艦隊もされるがままではない。砲撃・航空攻撃・雷撃……ありとあらゆる攻撃手段を駆使して敵を撃滅しようと試みた。

しかし……そのことごとくがこの２隻には通用しない。
空を埋め尽くすような航空機に対し、その２隻から発艦した３０機程度の航空機が一方的な空中戦を展開する。その空の死神の群れを運良く通り抜けたものもあったが、それを待っていたのは光線とありえない精度の機銃の迎撃、そしてどこまでも追いかけてくる噴進弾という新たな死神の群れだ。
戦艦たちの集中砲火は届く前に空中で光線が貫き爆発させ、砲弾が敵にまで届かない。魚雷だって同じだ。
破れかぶれと突撃していく艦たちは２隻が持つ凶悪なドリルのついたメイスで文字通り叩き潰され、あるいはそのドリルの回転によって千切れ飛ぶ。
そして出来上がったのが目の前の屍山血河である。それはもう『悪夢』としか言いようがない。
「バンバンババーン、深海棲艦、ぜんめつだ～♪
死ねぇ、深海棲艦！
轟天ブリーカー!!」
「うん、ベアハッグで潰すのは効率悪いからやめようね、兄さん」
その２隻は何やら訳の分からないことを口走りながらドリルの切っ先を向けた。そこから放たれた光の奔流の中に、泊地棲姫の意識が溶けていく。
それがこの泊地の最後だった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「わかってはいたけど……すがすがしいほどに無茶苦茶よね、轟くんたちって」
轟天と羅號は、先に『緯度０秘密基地』に帰投していた村雨たちの出迎えを受けていた。羅號はすでに３人娘に連れられてどこかに姿を消している。
轟天は村雨と連れだってゆっくりと廊下を歩きながら、お互いの任務の話をしていた。そして轟天たちの敵泊地攻略の様子を聞いたと

きにため息とともに村雨の口から出たのが冒頭の言葉だ。
「なんだよ、実際にこの近くに敵泊地なんてあったらお前らも妖精さんたちも安心して作業できないだろ？」
「それはそうだけど、ねぇ……」
本来ならば大量の艦娘たちがその死を覚悟で戦い、それでも勝利できるか分からない深海棲艦の泊地攻略戦……それをもう『近所に蜂の巣ができたからちょっと駆除してくる』ぐらいのレベルでやっているのだから開いた口が塞がらない。
もっとも……。
「私たちももう、無茶苦茶は変わらないかな」
今日の自分たちの戦いも十分無茶苦茶だと思い出し、村雨は苦笑する。
「そういえば改造後の初実戦だったんだよな？　どうだった？」
ここの妖精さんたちの力でも、俺たち並みの装備を用意するには1年はかかるって言うから1週間で用意できるまでにかなり妥協したっていう話だったんで心配だったんだ。
それでどうだった？」
そう言ってくる轟天の顔は真剣そのもの、混じりっ気なしの本気で言っている。
艤装は直接的な生存率に関わる、艦娘にとって命を預ける大切なものだ。それに『最高のもの』を用意できず、改装で動けない期間が長すぎてはいけないと大幅に『妥協したもの』を使わせていることに轟天の中では思うところがあるようだ。あの規模の敵を一方的に叩ける装備でまだ心配だと言う。
「この人は一体何と戦ってるんだろうか……？」と村雨は心の中で呆れたように呟きながらも、案外に心配性な轟天に問題ないと伝える。
「そりゃよかった。　それで、仕事の方の首尾は？」
「そっちもバッチリ。　妖精さんたちはいつでも作業に取り掛かれるって」
今日、村雨たち4人は周辺の島々への偵察を行っていた。その目的

は早期警戒用のレーダー基地、そして第二拠点の建設である。
今はまだ準備段階、深海棲艦とも艦娘とも接触は控えたい時期だ。というわけでこの周辺の島々に隠しレーダー基地を建設し、その位置を掴んで遭遇しないようにするというわけである。最終的には対艦・対空ミサイルを配備し、深海棲艦が周辺海域に入った段階で迎撃することも考えている。
さらにこの『緯度０秘密基地』は本当の意味で轟天たちの家であり生命線だ。その存在は限界まで秘匿したい。そこで第二拠点を建設しておこうというのである。人類との接触時にはその第二拠点をさも本拠地のように振る舞い、『緯度０秘密基地』の存在を隠すのだ。さすがに規模は『緯度０秘密基地』ほどのものはここの妖精さんたちでも難しいようだが、それ相応のものならすぐにでも建設に取り掛かれるとのこと。
まぁ村雨たちごく一般的な艦娘たちからすれば、この『それ相応』の基地ですら一般常識を外れたものでここの妖精さんたちの技術には感心を通り越して呆れているわけだが、轟天にしてみれば知ったことではない。
「もともと人の住んでた島だったらしくて、港湾施設跡があったわ。そこをベースに手を加えるから、妖精さんたちはそこまで長い時間はかからずに形になるだろう、って」
「ふぅん……ん？」
そこまで聞いていた轟天は何かに気付いて手を伸ばす。
「どうしたの、轟く……んんぅっ!?」
村雨が艶っぽい悲鳴を上げて、顔を赤くしながらお尻を押さえる。
「ちょっとぉ、いきなりおしり撫でるとか困るんですけどぉー。なに、村雨に『おっぱい成分補給艦』だけじゃなくて『おしり成分補給艦』にもなって欲しいの？」
「ばっ……違う！　今のは事故だ、誤解だ！」
いきなりのセクハラに顔を赤くしながら頬を膨らませ抗議する村雨に、ぶんぶん首を振りながら誤解だと轟天は声を上げる。
「これ！　これを取ってたんだよ！」

そう言って轟天が見せたのは何かの植物の種のようだ。
「これがスカートに付いてたから取ったんだよ。　まだたくさんついてるぞ」
「やだ、ホントにたくさんついてる！」
言われて村雨は後ろを見ると、確かにスカートのおしりの辺りにまだいくつも植物の種がついていた。
「こんなにたくさんついてるってお前、森にでも入ったのか？」
「そんなことないわよ、今日調査したのは港湾施設跡だけだって。
ただ……深海棲艦に人類が駆逐されちゃった島だからね」
「ああ、前に話してた『現象』のせいか」
村雨の言葉に轟天は「なるほど」と頷く。
深海棲艦は人間を決して生かしておかない。そんな深海棲艦によって制圧されてしまった地域の人間は皆殺しになるわけだが、その後のその土地の自然環境の回復速度が異常に高まるという『現象』が見られていたのだ。原因はまったくの不明である。
そのためか第二拠点の建設候補地となっている島の港湾施設跡はまるで森に呑まれたかのような状態になっており、そこらじゅうで草木が生い茂る状態だったようだ。スカートについた植物の種もその時ついたものだろうと村雨は言う。
「人間を殺しつくした後、深海棲艦が木に化けるんだって言う人もいるわよぉ～」
「それはいくらなんでもオカルトが過ぎるだろ」
驚かそうとでもいうのか、おどろおどろしく言う村雨に轟天は苦笑する。
そんな2人が食堂へとやってきた時だ。
「ちょうちょだもん！」
「いや、これ絶対蛾だと思うなぁ……」
何やらリベの力強い主張と、羅號の困ったような声が聞こえる。
「なんだなんだ？」
「あ、兄さん」
後ろからの声に羅號が振り返る。

「毎日あんなに仲がいいお前らがケンカか？
珍しいな」
轟天の言う通り、羅號と3人娘の仲はいい……どころか過剰なほどだ。基本的に羅號には3人のうちの誰か、もしくは3人全員がべたべたとひっついているのがデフォだ。こんな歳からハーレムの主となり、リア充街道一直線となった弟に「弾薬庫爆発しろ」という呪いの電波を轟天は日々飛ばしているのだが、残念ながら今のところ効果はない。
「いや、別にケンカってわけじゃないんだけど……」
チラリと見ると、リベはちょうどいいと轟天に話を向けた。
「ゴーテン聞いて聞いて！
ラゴウが全然聞き分けないんだよ！」
「いや、全然要領を得ないんだが……」
「これこれ！」
そう言ってリベは机に広げていたものを轟天に見せてくる。
それは『絵本』のようだ。かなりくたびれた感じから見ると、今日の偵察のときに拾ってきたものだろう。日本語ではないので言葉は分からないが、そこには2人組の女の子が描かれている。
「ああ、『はじまりの妖精』の絵本ね」
轟天の横から見ていた村雨が納得したように頷いた。
「『はじまりの妖精』って１００年くらい前の深海棲艦が現れた時に人類に味方して現れたっていう？」
「そうよ。
『はじまりの妖精』に続くようにほかの妖精さんたちが現れて私たち人類は深海棲艦と戦う『艦娘』の力を手に入れた。
それがなかったら人類はとっくに深海棲艦に絶滅させられてたから、『はじまりの妖精』のことは絵本なんかでも書かれて、みんなそのことは知ってるわ。
私も子供の頃お母さんに読んでもらったなぁ……」
懐かしそうに村雨が語る。
「ふぅん……それで、それがどうしたんだ？」

頷いて先を促すと、今度は朝潮が説明をする。
「今日の任務の時に落ちてたのでその絵本を拾ってきたんです。
それでみんなで懐かしいねって言いながら見てたんですが……この絵」
そう言って朝潮の開いたページにはその『はじまりの妖精』が、極彩色の羽根をもつ虫のようなものに乗っている絵が描かれていた。
「子供のころを懐かしんで「きれいな蝶だね」って話をしてたんです。
そうしたら……」
「らーくんが「これは蝶じゃなくて蛾だ」って言いだしたんですって」
「それでラゴウ、何回も「蛾じゃなくてちょうちょだよ」って言っても聞いてくれないの！」
話の分かった村雨がなるほどと頷く。
「なるほどね……。
羅號くん、昔から『はじまりの妖精』は蝶に乗って現れたって言われてるの。
だからこれは蝶……」
「……いいや、これは蛾だよ」
村雨は羅號に向き直ると諭すように語りかけようとしたが、その言葉を横から轟天が叩き落とした。
「俺も羅號に同感だ。
こいつは蝶じゃなくて蛾だ。　絶対に間違いない」
「もう、ゴーテンまで！
これはちょうちょだもん！　綺麗なちょうちょだもん！」
「いーや、絶対に蛾だね！」
いきなり割り込んできて蛾だと主張する轟天に、リベも負けじと言い返す。
その姿を見ながら村雨は肩を竦めた。
「もうどっちでもいいじゃない。
それより食事にしましょうよ」
「そうですね、村雨さん」
村雨と朝潮が食事の支度をはじめ、羅號やローがそれに続く。

結局『蝶か蛾か?』という話は食事が終わった段階でうやむやになり、それっきりになったのだった。

夢

それは巨大な都市だった。
世界に名だたる巨大都市、そこには百万人を超えるだろう人々が日々を過ごし、今よりよき明日を目指して必死で生きていた。眠らない街は夜の闇の中でさえ、まばゆい光に満ちていた。
だがそれは今……がれきの山へと変わっている。夜の街を満たしていたまばゆい光に変わって街を彩るのは燃え盛る炎の赤だ。
そしてその上空を2隻の巨大戦艦が飛行していく。どちらも艦首に装備した『ドリル』が特徴的だった。
そのうちの1隻、そのブリッジの艦長席に座る男。歳は４０歳半ばくらいか。その鋭い眼光は何物をも貫く、強い意志が見て取れる。
そして男はゆっくりと口を開いた。
「……こちらはどれだけ残った？」
その言葉にオペレーターは悲痛そうにゆっくりと首を振りながら答える。
「『火龍』、『エクレール』、『ランブリング』、『モンタナ』、『ソビエツキー・ソユーズ』、『インヴィンシブル』、『ガスコーニュ』、『フリードリヒ・デア・グロッセ』、『アルファ号』、『黒鮫号』……すべて轟沈しました。
地球防衛軍艦隊の残存戦力は旗艦であるこの『轟天』と、2番艦である『羅號』の2隻だけです。
しかも我らの基地である『緯度0秘密基地』がやられたうえ、各国の主要都市はすでに破壊しつくされています。
日本はこの東京以外はまだ軽微な状態ですが……これではもはや本艦隊の修理どころか補給すら絶望的です……」
「そうか……では我々が世界最後の戦力というわけか……」
そう言ってその男は少しだけ黙とうするように目を瞑るが、すぐに目を開き軍帽を被りなおす。
「これが文字通り、人類最後の戦いだ！
仲間たちの死は無駄ではない。その証拠に……見ろ、『やつら』の残りは2匹だけだ。

本艦と羅號で『やつら』を撃滅する！
そして……生き残った人類に希望の未来を!!
総員、一層奮起せよ!!」
「「了解です、神宮司司令!!」」
そして……人類最後の戦いの火蓋は切って落とされた。
ミサイルが、火砲が、メーサービームが。人類の英知、『科学』によって造られた戦うための力が夜空を染め上げる。
対する『やつら』も黙ってはいない。
世界の都市を破壊しつくし人類を滅亡の瀬戸際に追い込んだ極彩色の閃光が、轟天と羅號の装甲に激しい火花を散らせる。
その光景はどこまでも暴力的で、それでいてどこまでも綺麗だった。
いつまでも続くかと思われたその光景……しかしその均衡が崩れる。
「神宮司司令！　ら、羅號が!?」
轟天のモニターには各所から炎を上げる羅號の姿が映し出されていた。
エネルギー消費を抑え、安定して火力を連続して叩き込むために実弾兵装中心に改装された2番艦の『羅號』……その自慢の大型砲はひしゃげ、面影はもはやほとんど残っていない。
もう『羅號』は戦えない……素人目にもそれが明らかな状態だった。
「司令！　羅號から通信が!?」
オペレーターの声とともに中央モニターに映し出されたのは４０ほどの歳の男だ。頭から血を流し、片目をつぶっている。ノイズ混じりの画面から、そのカメラの向こうにある羅號のブリッジの惨状が見て取れた。
『神宮司司令……『羅號』はほとんどの戦闘力を消失し、沈むのも時間の問題です。
これより……『羅號』は『やつら』に対し、特攻を敢行します!!』
「ま、まて日向!!」
『待ちません！　人類に、どうか未来を!!

……あとは頼みます、兄さん!!』
そして通信が切れる。
モニター越しのそれが、血を分け婿養子になったことで名字の変わった実の兄弟の、今生最後の会話だった。
「『羅號』が、『羅號』がやりました!!」
『羅號』のドリルが『やつら』の腹を貫いた。そしてそこで耐えきれなくなった『羅號』の船体が中央付近から折れて砕ける。
閃光と爆発、それをドリルに貫かれた状態で受けた『やつら』はそのまま内側から焼き尽くされた。
「これで……残りは1匹だ!!」
だが残された『やつら』も必死だ。轟天に残されたすべての力をぶつけてくる。
「メーサー第二、破損!!」
「後部ミサイルハッチ損傷!!」
「補助動力のハイパーレーザー核融合炉停止!!」
「表面装甲融解!!」
「メイン動力室から入電！
重力炉の出力低下！　現在出力75%までダウン!!」
絶望的な報告の数々が上がってくる。しかし、彼の闘志は揺るがない。
「怯むな！　こちらも苦しいが『やつら』も苦しい！
今まで散っていった多くの仲間たちが見ているぞ！　恥ずかしいところを見せるな!!
撃て！　撃てぇ!!　撃てぇぇ!!!」
そして、ついにその執念が『やつら』に突き刺さる。
「艦首ドリルスパイラルメーサーキャノン、最大出力！
照射しながら突っ込め!!」
「総員、衝撃に備えろぉ!!」
『轟天』の……いや、人類の執念をのせたドリルが『やつら』を貫いた。
「や、やった！」

ブリッジクルーの誰かが歓声を上げるが、次の瞬間ドリルに貫かれたままの『やつら』の放った極彩色の閃光が『轟天』の装甲を叩いた。
「ぐっ！
損害を報告せよ！」
「後退用ブースター損壊！　本艦は後退ができません!!」
「そんな!?　『やつら』に突き刺さったままだぞ!!」
その瞬間、必死でもがく『やつら』の極彩色の閃光に再び『轟天』が揺れた。
このままでは『やつら』を仕留めきれず、『轟天』は破壊される……
一気に騒然となるブリッジに、彼の声が響いた。
「総員退艦!!」
「退艦!?　どういうことですか、司令!!」
「……このまま、『やつら』を貫いたままで海上にまで出る。
そして、そこで『轟天』を自爆させて『やつら』を確実に葬る！
なに、操艦くらいは私もできる。
副長、君は部下たちを連れ脱出してくれ。
これからの世界の未来を……頼む！」
「司令……わかりました！
ご武運を、司令!!」
敬礼を残し、副長たちは生き残った部下たちを連れ『轟天』から脱出していく。残っているのは彼だけだ。
「さて……行くぞ、『轟天』！
最後の大仕事だ!!」
彼の言葉に応えるように、もはや砕ける寸前の『轟天』はそのドリルに『やつら』を突き刺したまま海へと飛んだ。
そんな中、彼しかいないはずのブリッジに何者かの声が響く。
【お前は、お前たちは自分たちが何をしているのか分かっているのか!?
自分たちの行いの意味を理解しているのか!?】
その焦ったような声に、彼は笑って答える。
「そんなものは分かり切っている。　人類の敵を倒し、人類に希望の

未来を!!」
【【人類にできる正しさは『絶滅』しかないというのに！
　何故、何故それに抗う!?】】
「死に抗うのは生物の本能だ！
　貴様らの言う絶滅の運命など、決して受け入れはしない!!」
【【我々は、我々は■■■■■なのだぞ！
　それを……理解できない！　理解できない!!】】
「それがどうした!!
　例え貴様らが■■■■■なのだとしても、人を滅ぼそうとするなら我々の敵だ!!」
【【おのれ人類！　知性を、そして『科学』を持ったどこまでも愚かで邪悪な生き物め!!
　その力でどれだけの同族を殺し、どれだけの取り返しのつかない破壊を振りまいてきた!!】】
「知性は、そして人類の力である『科学』は明日に生きる誰かの未来を創るための力だ。
　確かに人はその力で相争い、破壊を振りまいてきた……。
　だが、人類はいつまでもそこまで愚かではない！
　きっと……この愚かな行いの果てにいつかきっと、人類は『科学』によって正しい未来を見つけ出してくれる！　私はそう信じる!!
　だからこそ私は人類の未来を信じ、貴様らと力の限り戦った！
　そして貴様らに打ち勝ったのだ!!」
　すると、その声は一拍置いてから答えた。
【【……認めよう。
　我々は君たちに、人類に負けた。　もはや人類の絶滅は不可能だろう。
　……『この世界』では】】
「……何だと？」
【【『世界』とは一つではない。　無限の可能性、その先にも『世界』はある。
　そしてそこには変わらず愚かな人類がいるだろう。

その『世界』で今度こそ人類は絶滅させる！】】
「貴様らはそこまで、そこまでして人類を『絶滅』させたいか……!?
……いいだろう、例えどんな『世界』であろうと変わらない。
人類は黙って滅びなど受け入れん！　必ず滅びに抗う!!
その『世界』の人類が貴様らと戦い、そして勝利する!!」
【【果たしてそうなるかな？
この『世界』で起きた奇跡が何度も起こるかな？】】
「人を……人類を舐めるな!!
それにそれでも、それでも人類が危機に陥るのなら……私が、弟が、我々地球防衛軍がその『世界』を助けよう！
例えこの魂、百万魂魄生まれ変わろうとも必ず貴様らのいる世界にたどり着き、何度だって貴様らを打ち砕いてみせる!!」
【【おのれ……どこまでも、どこまでも忌々しい人類がぁぁぁ!!】】
「ここまでだ！　貴様らはここで……消えてなくなれぇぇぇ!!」
海へと飛び出した『轟天』が、ついに最後の役目を果たす。
その自身のエネルギーすべてによって、『轟天』から閃光が溢れ出る。そしてその閃光は何もかもを呑み込んでいった……。

「あん？」
轟天はどこか間の抜けた声とともに目を覚ますと、ガバリと上体を起こした。
「なんだ……？」
すると轟天の隣から可愛らしい声がする。
「うぅん……」
横を見れば、眠っていた村雨が轟天の動きで目を覚ましてしまった

のか、眠そうな目を擦っていた。
「もう起きる時間？」
轟天が時計を見るとまだ４時……もう少し眠っていても大丈夫だろう。
「いや、まだ大丈夫だ。
俺ももうひと眠りするよ」
「……何かあったの？」
「いや……何か……夢を見たような気がするんだ」
「……もしかして怖い夢だったの？
村雨がよしよししてあげようか？」
「そんなんじゃねぇよ……」
冗談めかして笑う村雨に答えて、轟天は再び布団を被った。
「ただ……なんだかとても大切な夢を見たような気がする……。
どんな夢だったのかは全然思い出せないんだけどな……」
「ふぅん……」
しばらくすると再び村雨のやすらかな寝息が聞こえてきて、轟天ももうひと眠りしようと目をつぶった。
「なんだろうなぁ……どんな夢か全然覚えてないけど……。
大切な誓いを……した……ような……」
そう呟いて轟天も目をつぶる。
起床時間までの短い間、轟天は再び夢の世界に旅立つのだった……。

目覚めるもの

そこはどこなのか……ゴツゴツとした岩肌の洞窟のような場所だ。しかし洞窟特有のジメジメとした雰囲気もなければ、真っ暗ということもない。冷涼にして澄んだ空気に満ち溢れ、光る苔のような植物によって十分な明るさを保っている。
そこに声が響いた。
「ついに時が来てしまいました……。
あれから１００余年……『封印』は解かれ、再び『滅び』が現れる……」
２つの声が唱和するように響く。
それは2つの、少女の姿をした人影だった。
「あの１００余年前では人は……どうやっても『滅び』に抗えなかった……。
だからすべてを賭けて『封印』を施しましたが……もはやそれにも綻びが生じ始めている……。
『滅び』は遠からず、再び現れるでしょう……」
憂うような声……そこには大いなる慈愛が見え隠れしているような気がする。
「でも１００余年前とは違う。今は……2つの『希望』が間に合ってくれた」
その声には安堵の色が見えた。
2人は祈るように腕を組み、目を瞑る。
「『希望』よ……どうか人類の未来を……お願いします」

キシュウウウウン！

その2人の背後、そこで巨大な『何か』の鳴き声が響いた……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「はぁはぁ……!!」
夜の闇の海を、荒い声の少女が駆けていた。
駆逐艦『朧』の艦娘である彼女の表情には隠しようのない恐怖が見える。しかし、それでも守らなければならない約束が彼女の足を動かしていた。
彼女の駆逐隊は敵泊地周辺への夜間偵察任務へと赴いていた。
気心の知れた仲間たち……今まで幾多の死地を乗り越えてきたその連携は巧みで、みんなと一緒ならきっとどんな敵とも戦えると信じていた。しかし、そんな仲間たちは『朧』を置いて逝ってしまった。
だが、彼女たちを襲ったのは見慣れた深海棲艦ではなかったのである。
「必ず、必ずあの『化け物』のことをみんなに伝えるから……!」
『漣』はバリバリと頭からむさぼり食われた。
『潮』は一瞬で輪切りにされた。
『曙』は朧を逃がすために囮としてその場に残った。
そんな仲間たちの最後を、そしてその情報を生きて持ち帰るのだ。その思いが、朧の恐怖に震える身体と心を奮い立たせる。
だが……そんな彼女の足元に、すでに死神は迫っていた。

ザバッ!!

「がぁっ!?」
突如として現れた巨大な何かに、朧は捕まっていた。
それはハサミだ。甲殻類のような赤い色の巨大なハサミが、朧の腰をがっちりと捕まえていた。
「い、ぎゃぁぁぁぁぁぁ!!??」
そのハサミの圧力に、朧の口から絶叫がほとばしる。艤装と装甲がその圧力に耐えきれずにひしゃげ、朧の女の子らしい細い腰の骨が砕け散る。
「この！　このお!!」

血を吐きながら手にした１２．７ｃｍ連装砲を撃つが、ゼロ距離だというのに強固なそのハサミはほとんど傷つかない。
「ぐ、ぎゃ、がぁ……」
朧の口からはもはや、悲鳴でさえ血の混じった壊れたコーヒーメーカーのような音が漏れるだけだ。
薄れる意識の中で朧は絶望しきった顔で、最後の最後に苦笑を漏らす。
「私はカニ派。　エビは……嫌いよ」

バチンッ!!

元帥の憂鬱

カリカリカリカリッ……

ここは日本本土、深海棲艦からの侵攻を防ぐ海軍の総本山ともいえる横須賀鎮守府の執務室である。

調度品は飾り気はほとんどなく、実用性を重視する使用者の性格が見て取れる。

壁には地図がかかっており、そこに手書きで前線や補給線が書き足されている。その補給線は伸びきり、苦しい現在の戦況を克明に記していた。

そんな執務室の重厚な執務机で書類に筆を走らせる男が1人。

齢６０ほど、しかしその覇気のみなぎる身体は老いを感じさせない。この男こそ日本海軍の頂点に立つ、中條信一元帥その人であった。

「閣下、ショートランド泊地からの報告書です」

「うむ、ごくろう」

秘書艦である大淀から書類を受け取る中條元帥はその内容に目を通すと、露骨に顔をしかめた。

「またか……」

思わずため息が漏れる。

そこには輸送船弾の護衛任務成功という戦果が記されていたが、その隅には駆逐艦娘３人の被害が小さく書かれていた。需要の約３ヶ月分の戦略物資の輸送成功ということが大々的に書かれており、駆逐艦娘３人の被害を惜しんでいる様子はない。損失分の補充を願うというだけだ。

中條元帥は頭が痛くなったが、何もそれはショートランド泊地だけの話ではない。

やれ外国人艦娘や駆逐艦娘は全滅しましたが大型艦は無事です、だの。やれ外国人艦娘や駆逐艦娘は犠牲にしましたが戦略物資は無事

です、だの……そこかしこからそんな報告がさも当たり前のように上がってくる。あまりにも容易に犠牲を出し過ぎだ。
確かに少数を犠牲にして大きな戦果を得る、というのはある。中條元帥とてそんな経験がないわけではない。だが、最初から犠牲を強要するようなことなど戦術上の『外道中の外道』だ。その外道が限定的・例外的に行われるのならまだ話は分かるが、今はそれが蔓延し、頭の痛いことに外国人艦娘や駆逐艦娘を使って敵を誘引したり、撤退時の殿として特攻を命じる、別名『捨て艦戦法』と呼ばれる戦法が常道化してしまっているのである。
確かに戦艦や空母、重巡といった大型艦になればなるほど適合者の数は少なくなり、その戦闘力も絶大だ。彼女ら大型艦は深海棲艦との戦いの主力である。
逆に小型艦、特に駆逐艦は適合者の数が多く、１０歳ほどの少女ですら適合者となりえるため、大型艦娘とは比べ物にならないほどに補充は容易である。
しかし……彼らは分かっているのだろうか？
そういやって犠牲にしている彼女たちが、『艤装を纏い戦うことのできる人間の女の子』であるということに。
「あやつら……人が木の股から産まれてくるとでも思っとるのか？」
少女たちが成長し、子を産み、育むことではじめて『人』は増えるのだ。その生産者である少女たちをこんなにも簡単に戦争で消耗していて、一体どこの誰が次代の『人』を産み育んでくれるというのだろう？
「しかし……それでいて一定以上の戦果はあげているというのがまた、憎たらしい」
「まぁ……これだけ頻繁に犠牲を出しておきながら結果を出せないようではよほどの無能ですから。
そんなの、それ以前の問題です」
正直、平気な顔で『捨て艦戦法』を駆使するような提督など罰してやりたいと中條元帥は心の中では思っているが、そういう提督たちもしっかりと結果は出しているあたりタチが悪い。おかげで叱責する

わけにもいかず、悪循環は続いていく。中條元帥と、彼の心中を良く知る大淀は揃ってため息をついた。

中條元帥は考える。一体、いつからこんな流れになってしまったのか？それは１５年ほど前からの戦況悪化が原因だ。

深海棲艦が現れてからすでに１００余年の時を、人類はこの戦争に費やしている。深海棲艦は同時多発的に全世界の海に現れたが、沿岸防衛線を突破しインド・中央アジア周辺から一群のユーラシア大陸への上陸を許してしまう。そしてそのままその一群は数を増やしながら西進、ヨーロッパ方面へと進撃し激しい攻防戦ののちに欧州が陥落。同時にアフリカ大陸も北部から南下して制圧していった。そしてそんな深海棲艦のヨーロッパ・アフリカ方面軍ともいえる一群が制圧をほぼ完了し東進を始めたのがおよそ１５年前のことだ。

ユーラシア大陸の陸地では深海棲艦東進軍に対し中国・ロシアといった国家がおびただしい血を流しながら抵抗するなか、インド洋を東進する深海棲艦東進軍の大艦隊に対して、日本海軍は必死の防戦を決意。しかし日本は元々が太平洋の深海棲艦の一群と戦っており、全戦力をその深海棲艦東進軍との戦いに投入するわけにはいかなかった。

そのため最精鋭ともいえる者たちを抽出して決戦に臨んだのだが……深海棲艦東進軍の大艦隊はなんとか退けたものの、その代償としてこの作戦に参加した優秀で経験豊富な提督と艦娘がほぼ全滅してしまう。それによって、特に指揮官側である提督の人材が払底してしまったのだ。その深刻さの度合いは、戦時を理由に教養課程を削りに削って、ヒヨッコのまま戦場に出さざるえないほどであった。

そんなヒヨッコ提督たちも、それでも提督を志す一般的には優秀に分類される人間だ。自らが死なないために、文字通りの死に物狂いで勉強を行う。過去の海戦で勝利した時の戦術を研究し、それを生かそうというのだ。勉強熱心は大いに結構なことであるが……この時に目についてしまったものが悪かった。

ヒヨッコ提督が活路を見出したのが１５年前の深海棲艦東進軍の大艦隊を退けた海戦だったのだが、このときに使った戦法というのが

『捨て艦戦法』だったのである。
命を捨ててでも国を護ろうとした提督と、提督たちと心を同じくした自ら特攻を志願した艦娘たちによる『限定的な外道戦法』として例外的に行われた『捨て艦戦法』……それをヒヨッコ提督が試してしまい、しかも大きな戦果をあげてしまった。そうなればヒヨッコ提督たちがこぞって真似をし始める。そしてそのヒヨッコ提督が先輩になり、さらに後輩提督たちに『捨て艦戦法』を伝授して、後輩提督たちも実践する。それによってこの『限定的な外道戦法』だった『捨て艦戦法』がいつの間にか常道化してしまったのだ。
彼らは被害が少なく戦果をあげれる有効な戦法だと思っているだろうが、それは違う。
目には見えず、もっとも補充に時間のかかるだろう『人的資源』という希少資源を削ることで戦果をあげているのだが、それを正しく理解していない。今の状態など、未来のための貯金を切り崩しながら生活しているようなものだ。そしてその先にあるのは、避けられない『破滅』という結末である。
しかし、それを憂う良識と見識を持つものはあまり多くはなかった。
「日本は……いや、世界は……あとどれだけの間もつのだろうか……？」
「……私には分かりかねます、閣下」
中條元帥の言葉に、中條元帥の思想の理解者でもある大淀は言葉を濁した。
日本も、そして世界も無限にこんな戦争を戦い続けられるわけではない。今の１００余年もの間もたせているのが奇跡だ。対して深海棲艦は初めて現れた１００余年前からその勢いは変わらないという。今のままでは、いつか確実に人類は……『絶滅』する。
『何か』が……この流れが変わる大きな『何か』が、人類には必要だった。
「ふぅ……すまない、今のは聞かなかったことにしてくれたまえ、大淀くん」

「はい閣下、私は何も聞いていません」
こんな気弱な発言を海軍のトップがしたとなれば士気にも関わる。それを理解している大淀は何もなかったこととして、次の書類を用意した。
「閣下。
ご子息からの……トラック提督からの報告です」
「うむ」
中條元帥は頷いて書類を受け取る。
中條元帥に長く秘書艦として仕え、彼の思想を理解している大淀はいわゆるデキる女である。
中條元帥の息子である中條義人提督は、幼少のころから中條元帥の思想を教え込んできた。中條元帥と同じく世界の未来を憂う良識と見識のある立派な提督で、『捨て艦戦法』など決してしない。それでいてしっかりと戦果をあげているという理想的な提督である。彼からならば中條元帥を悩ませるような報告書ではあるまい。だから先の報告とで嫌な気分になっているだろう中條元帥の気を紛らわせようと気を利かせ、大淀は順番を変えて次はトラックからの報告書を見せることにした。
しかし、それを受け取った中條元帥の顔が険しいものに変わっていく。
「あの……どうなさいましたか？」
「……いや、少し気になる報告を見つけたのでな」
そう言って中條元帥がその部分を見せてきたので、大淀はそれに目を通す。
それは行方不明だった駆逐隊の艦娘の一部が発見されたという内容だった。
なんでも夜間偵察に出た駆逐隊が未帰還となり周辺を捜索、するとその駆逐隊に所属していた艦娘の1人の遺体を発見したというものである。周辺に敵の痕跡はなく、発見された遺体は上半身のみの状態で下半身は千切れていたが、やけどはないという。
……確かにおかしな話である。敵の火砲で吹き飛ばされたとした

ら当然やけどがどこかにあるはずだ。深海棲艦に喰われたにしても、戦闘の痕跡がほとんど感じられない。何よりも遺体が『綺麗』すぎる。深海棲艦に喰われたのなら良くて腕や足の一部、普通はミンチになって深海棲艦の腹の中だ。

では何らかの事故に巻き込まれた、とも考えたのだが駆逐隊が丸々消えるような、そしてこんな遺体が残されるだろう事故というのが思いつかない。

だが同時に、確かに奇妙な話ではあるが、こうは言ってはなんだが駆逐隊1つが全滅したくらいで中條元帥がここまで過剰に反応しているというのが大淀にとっては一番奇妙だった。

やがて、考え込んでいた中條元帥は静かに大淀に指示を出す。

「大淀くん。

すまんが今すぐ、これと同じような奇妙な事件がここ最近に起きていないか調べてくれんかね？

他の仕事はすべて後回しでかまわない」

「……わかりました」

最優先でという中條元帥の指示にやはり奇妙なものを感じたものの、大淀は一礼して仕事のために執務室を出る。1人になった中條元帥は、机の奥から木の箱を取り出すと、その箱を開けた。そこに入っていたのは石だ。『太陽をかたどったような円と射線、そしてそれを四分する十字の溝の入った石』が入っている。

中條元帥にとっての大切な、生涯のお守りであるそれを手に取ると、中條元帥は若きあの日のことを思い出す。

中條元帥はその昔、海で死を覚悟した。

人員輸送のための船に乗り、そこに深海棲艦が襲撃、艦娘たちの奮戦虚しく船は沈没した。艦娘たちの必死の戦いのおかげで深海棲艦が直接喰らいにくることこそなかったが中條元帥は海に投げ出され、死を覚悟した。

しかし、中條元帥は死ぬことなく、ある島に流れ着いた。そしてそこで『彼女たち』に命を救われたのである。

人心地つき、『彼女たち』が一体何なのか理解した当時の若い中條元

帥は必死で、『彼女たち』に人類への助力を願い出た。一緒に再び深海棲艦と戦ってほしいと願い出た。
しかし、『彼女たち』からの答えは意外なものだった。
深海棲艦は本当の絶望ではない。『彼女たち』は深海棲艦が現れ出した１００余年のその昔、その『真なる絶望』の方を封印し、今は身体を癒している最中なのだと語った。いつか封印が解け、『真なる絶望』が復活するその時に再び戦うために今は人類に助力できない、と言われたのだ。
深海棲艦だけで人類はすでに窮地に立たされているというのに、それ以上の絶望の存在を聞かされ、目の前が真っ暗になったのをよく覚えている。
そして、そんな絶望する中條元帥に『彼女たち』は言った。
「『この世界に２つの『希望』が現れる。それまでは絶望の封印はもたせてみせる。
そして絶望が姿を現したその時こそ、２つの『希望』とともに再び人類とともに戦いましょう』
……思えば、随分と昔の話だ」
中條元帥は苦笑いをする。
思えばその言葉を、『彼女たち』の語った『希望』の存在を信じてがむしゃらに戦い続け、この元帥という地位にまでたどり着いたのだ。それは中條元帥にとって人生を変えた出来事だった。
一しきり苦笑すると、中條元帥は顔を引き締める。
「あの奇妙な事件……深海棲艦とはどこか違う事件が、『彼女たち』の言っていた絶望の前兆なのかもしれん……」
少なくともその可能性がある。
中條元帥はそのまま窓から空を仰いだ。
「どうか人類の前に、あの言葉通りに２つの『希望』と『彼女たち』が現れてくれることを……」
そんな短い祈りの言葉は、誰にも届くことなく空に溶けた。

承　絶望、出現ス
秘匿艦隊Ｅ・Ｄ・Ｆ

「……私、夢でも見てるのかしらね？」
叢雲は未だに目の前の状況が信じられなかった。
彼女はごくごく当然のように大した戦果は期待されず、ごくごく当然のように損耗していく普通の駆逐艦娘だ。そしてごくごく自然な流れで艦隊撤退のための捨て石を命じられ、ごくごく当然のように沈む……はずだった。
しかし、そんな死を待つばかりの叢雲を助けた艦隊があった。
見たことのない新兵器を使い、瞬く間に深海棲艦隊を沈めたその艦隊はボロボロの叢雲のところにやってくると手を差し伸べる。
「あなたには2つの選択肢があります。
このまますべてを忘れて自分の基地に戻るか、それとも今までのすべてを捨てて私たちと来るか……どちらにしますか？」
そう問われ叢雲はしばし呆然とするも、ゆっくりと頷く。
「戦友はみんな沈んだ。
どうせ死んだことになってる駆逐艦娘1人が今さら戻ったところで、弾除けにされるのがせいぜいよ。
なら……そっちについていくわ」
「結構。
私たち『秘匿艦隊Ｅ・Ｄ・Ｆ』はあなたを歓迎します」
そして差し出された手を叢雲は取り、今に至る。
今は損傷によりほとんど動けなくなった叢雲を曳航しながら、彼女らの基地とやらに向かっている最中だ。
すると叢雲に手を差し伸べ、今も隣を進んでいる駆逐艦娘『不知火』が言う。
「まだ混乱していますか？」
「ええ。

これから死ぬんだって覚悟決めたら謎の艦隊に助けられた、なんて安っぽい漫画の展開よね。
混乱するなってほうが無理な話よ」
「道理ですね。
不知火も最初はそうでしたから……ですが、これからあなたもその謎の艦隊の一員です」
「そうね」
言われて叢雲は艦隊のメンバーを見渡す。
旗艦は戦艦『ウォースパイト』、空母『グラーフ・ツェッペリン』に水母『コマンダン・テスト』、重巡『ポーラ』に駆逐艦『不知火』に『長月』という構成である。
聞けばこの謎の艦隊は叢雲と同じように捨て石にされたり部隊が全滅した、『帰る場所のない艦娘の集まり』であるという。ならばよく捨て石にされると言われる『亡命外国人艦娘』の割合が多いのも納得だ。
しかし全員の艤装は見たこともない改造が施されており、叢雲の記憶にあるものとは全く違っている。先ほど自分を助けた時の新兵器といい、考えれば考えるだけ謎だらけだ。
そう思いながらもどうせすぐに自分もその一員になるんだし、その辺りも分かるだろうと思考を投げ出す。すると、隣の不知火が言った。
「見えてきましたよ」
視線を巡らすと、そこには1つの島が見えている。そして不知火は大仰に手を広げながら言った。
「ようこそ。　私たちの家、『ラゴス島秘密基地』へ」

〜〜〜

『ラゴス島秘密基地』へとやってきた叢雲は、まずはそのドッグの設備で目を丸くする。どう見ても一般的な鎮守府や基地とは比べ物にならない設備の良さだ。見たこともない工作機械も多く、その高度な技術を連想させる。

その後入港すると、叢雲は高速修復剤ですぐに傷を治療してもらった。高速修復剤は貴重で、基本的に戦艦や空母といった大型艦専用とも言っていいものだ。叢雲のような駆逐艦はよくて入渠、悪ければ損傷したまま次の作戦に駆り出されることなど珍しくもない話なのである。

その治療の間にこの基地の司令官らしき人物と内線で連絡をとっていた不知火の話では、司令官への挨拶はあとでまずは施設の見学をという話になったらしい。不知火の案内の元で施設を回っているわけだが……どこもかしこも驚きしかない。

味の薄い栄養ブロックではない、美味しい料理を出す食堂……ありえない。ちなみに今日の昼食はトンテキ定食だった。

清潔でのびのびと入れる入浴施設……ありえない。

自動採掘と精製プラントによる戦略物資の生産……ありえない。

農園と食料プラントによる完全な食料の自給自足体制……ありえない。

もうどこもかしこもあり得ないだらけでいい加減叢雲は驚き疲れていた。

「もうホント何なの、ここ？」

実は私、もう死んでて天国にいるとか？」

「この世の地獄、戦場を渡り歩く私たち艦娘が、死んだら天国に行けるとでも？」

「ああ、そりゃ無理だわ」

不知火の冗談に叢雲も苦笑しながら返す。

「……では最後に、司令のところに案内しますね」

「いよいよ、ってことね……」

これだけのあり得ないような場所のトップに君臨する人物なのだ、生半可な人物ではなかろう。そう思って叢雲は表情を引き締める。

そして不知火に連れられて移動を始めようとしたその時だった。
「おやっ？」
「どうしたの？」
「いえ……今から司令にと思っていたのですが、少し予定変更です。
先に副司令の方から行きましょう」
「副司令？」
首を傾げながらも、建物を出て歩き始める不知火に着いて行く叢雲。そしてその場所にやってきた。
そこは中庭の、少し大きめの木の下である。そこにはある一団が陣取っていた。
「えへへっ……ろーちゃん、任務頑張りました！
だかららーくんに撫でてほしいなって」
「あっ、ろーちゃんズルい！　リベも、リベも！」
「あ、暁はレディだからナデナデなんていらないんだけど……どうしてもって言うなら撫でてもいいのよ」
「ん……構わないでいいけど……別に撫でられるの、嫌いじゃ……ない」
「羅號、信賞必罰は組織運営では重要なことです。
ですからその……任務達成で私も頭を撫でて欲しいと……」
「そう、そうね……信賞必罰は必要ね。
私も……撫でられるのはイヤではないわ」
６人の少女が、同じくらいの歳の１人の少年に纏わりついていた。叢雲の記憶が確かなら全員艦娘、呂５００にリベッチオ、暁に山風、朝潮にＺ３マックス・シュルツというメンバーである。
並べ立てると艦娘としての共通点はまるで見受けられないが、ここにいる６人に限っては共通点は丸わかりだ。この６人全員、この少年に恋をしているのである。やり方は様々だがそれぞれが精いっぱいに甘えて、自らの存在を猛烈にアピールしているのだ。
もうこの段階で叢雲は胸焼けするような甘ったるい雰囲気にお腹いっぱいなのだが、当事者である少年はまるで気にした様子もなく、慈愛すら感じさせる微笑みで全員に対応していた。

やがて少年はこちらに気付いたように視線を向けてきたが、叢雲としてはちょっと巻き込まれたくないというのが本音である。
「ああ、不知火さん。　任務ご苦労さま」
「ありがとうございます、副司令」
「あはは、そんな大仰な呼び方はいいって」
その言葉に苦笑する少年。どうも『副司令』と呼ばれるのは本意ではないらしい。
というか、これが本当にこのすさまじい秘密基地の『副司令』なんだろうか……叢雲は思わず少年を凝視してしまう。
「副司令、お楽しみのところ申し訳ありませんが、彼女が今日救出した艦娘の叢雲です。
司令のところに行く途中だったのですが、姿が見えましたので先にこちらに挨拶に来ました」
「駆逐艦『叢雲』よ。おかげさまで助かったわ。
これからはこき使ってくれて構わないわよ」
「僕は海底軍艦『羅號』、見ての通り男だけどよろしくね」
差し出された手を反射的に握り返しながらも、叢雲はあまりに異質な言葉に呆けたように返す。
「えっ？　男なのに……艦娘？
いえ、この場合は艦息？」
頭を捻る叢雲に不知火は助け船を出す。
「気持ちは分かりますがすべて真実です。
そしてこの基地、いえおそらく地球上で最強の戦闘能力をもった艦の1人だと思いますよ」
「何をバカな……」と叢雲は思ったが、先ほどの新兵器の数々を使った戦闘を見た後ではやすやすとは否定できないことに気付いた。
「僕より兄さんの方が強いと思うけどなぁ……」
「副指令は『五十歩百歩』という言葉をご存知ですか？」
謙遜なのか本気なのか分からない羅號の呟きを、不知火は少しだけ呆れたように返した。
「では司令のところに行ってきます。　お邪魔しました」

「うん。　また食事のときにね」
そう言って羅號と別れる不知火と叢雲。去り際にチラリと見ると、すぐに羅號は元のように6人の少女に纏わりつかれていた。
「何なの、アレ？」
少し離れたあたりで小声で不知火に尋ねる。
「見ての通りですよ。
世界でここにしかいない男の艦息である羅號と彼を慕う最古参艦娘、通称『ラヴァーズ』の面々ですね。
ああ見えて一応、この基地のヒエラルキーのトップにいる存在ですよ」
「……ＯＫ、常識はさっさと投げ捨てた方がいいってことがわかったわ」
返ってきた答えに、お手上げとばかりに叢雲は肩を竦める。
男の艦息に超技術満載の基地……どうやら自分の着任したところは予想以上にとんでもないところだったようだと再確認する。
やがて建物を進んだ2人は、扉の前へとやってきていた。
「この先にココの司令が？」
「ええ、司令と秘書艦がいます」
「さっきの副指令が『兄さん』って言ってたってことは……」
「お察しの通り、男の艦息ですよ」
叢雲がひとつ息をつくのを横目に見ながら、不知火はドアをノックした。
「司令、叢雲さんをお連れしました」
しかし、中から声はない。
「？　司令？」
訝しみながら不知火はドアを開け、叢雲もそこから中を覗き見る。
「「あっ……」」
そしていくつかの声が重なった。
そこには2人の男女の姿があった。女の方は叢雲と同い年くらいの艦娘だ。叢雲の記憶が正しければ、白露型駆逐艦3番艦の『村雨』だろう。

一方の男の方も、年齢的には叢雲や不知火と同じくらいだ。今までの話からすると、彼が男の艦息でここの司令官なのだろう。
それだけならなんらおかしなところはないのだが……状況はそうでもない。
まず村雨は眠っているようで、ソファに横になって目を瞑っている。そして少年の手はその彼女のスカートの端をしっかりと握っていった。
すると村雨は身じろぎすると、目を覚ました。
ボーっとした目で自分のスカートを掴む少年の姿を認めると、寝ぼけ眼のままトロンと微笑む。
「なぁに轟くん、村雨にいたずら？」
その甘い声には嫌がっている様子はない。
それを理解した叢雲と不知火はゆっくりとドアを閉める。
「「……ごゆるりと」」
「ちょ、ちょっと待てぇぇぇぇ!!」
そんな声が響いた。

～～～

がら頷く。
「だが、俺たちの目的も他とは変わらん。
深海棲艦の殲滅……そのために力を貸してもらうぞ」
「言ったでしょ。　存分にこき使ってちょうだい」
「結構。
大破した艤装は、新型へ改造作業を行う。
改造作業の完了までは身体を休めるのと、ここでの生活に慣れるようにしてくれ。
不知火、しばらく面倒を見てもらっていいか？」
「了解です、司令」
叢雲の隣で不知火がビシリと敬礼をしたが……その視線は冷たい。
かく言う叢雲の視線も冷たいが、不知火の視線はそれ以上だ。
「な、なんだよ不知火？」
居心地が悪そうに聞き返す轟天に、不知火はその冷たい視線のまま言った。
「いえ別に。
ただ……仲がよろしいのは結構ですが風紀を司令自らが率先して乱されては困ると不知火は愚考しているだけです。
そういうことは見えないように自室でやっていただかないと……」
「だから誤解だって説明しただろうが！
村雨（アホの子）がサボって寝てたの！　親切で優しい俺はめくれ上がったスカートを直してやろうとしただけなの!!」
そう力説するが不知火と叢雲の視線はもう、言い訳をする痴漢を見る目だった。
「おい村雨、お前からも誤解だって言ってくれ！」
話を振られ、仕方ないといった感じで村雨も言葉を発する。
「不知火、轟くんも男の子なんだし……そこのところ少しは理解してあげないと」
「おーい、援護射撃のつもりだろうが、完全に誤射しちゃってるぞ。
なに『しょうがないから許してあげる』的な空気になってるわけ？
ほら、不知火と叢雲の視線が俺の装甲をぶち抜くくらいに冷たく

なってるぞおい！
だから、俺は無実なんだっての!!」
轟天はわめくが不知火たちの視線は変わらぬままだ。
やがて轟天はあきらめたかのように肩を落とす。
「あー、もういい。
まぁ、これからはここの一員だ。
ゆっくり休んで、馴染んでくれや」
「了解よ」
敬礼とともに退出していく不知火と叢雲。やがてしばらく進むと叢雲が言った。
「あれが……司令？」
「と秘書艦の村雨です。
ここでは最古参ですので、副司令や『ラヴァーズ』の面々とならんでヒエラルキーはトップですよ」
「大丈夫なの、この基地？」
「……思うところがあるのは分かりますが、あれで司令と副司令の戦略と戦術は確かなものですよ。そしてなによりその戦闘能力は間違いなくこの地球上で最強です。
村雨や『ラヴァーズ』の面々もああ見えて戦闘では頼もしいですからね」
「ふぅん……それでずっと疑問だったんだけど、ここの組織の『E・D・F』ってなんの略よ？」
「恐らくご想像の通りかと思いますが……『地球防衛軍』の略だそうです。
司令と副指令が決めたそうですよ」
「また大げさな名前ね」
そう言って叢雲は肩を竦めるが、今まで聞く司令と副指令の風評、そしてこの基地の特殊性から考えてそれだけ大きなことが言えるだけのものを持っているとも叢雲は理解できた。
そして、叢雲は最後に一つ、気になることを質問する。
「ねぇ、やっぱり司令と秘書艦の村雨ってデキてるの？」

「みんな見たことがあるそうですが……寝間着姿の村雨が毎朝のように司令の部屋から出てくるのを、それ以外の解釈ができるのなら違うのでしょう」
「うわぁ……私らと同じくらいの歳なのに、随分とススんでるわねあの子」
「ええ、まったくです」
何を想像したのか、揃って顔を赤くする2人。
こうして駆逐艦『叢雲』は、この『ラゴス島秘密基地』に着任した。

～～～

さすがにこの状態を他人に知られたら、もうどんな顔していいかわかんないぞ」
「大丈夫よ、私だって見られないように気を付けてるもの」
「ならいいんだけど……」
何かを隠し通せていると思っているのは、悲しいかな本人たちだけである。
そんな2人だけの秘密の時間……轟天はしみじみと言った。
「もうあれから4か月か……ずいぶんと変わったもんだ」
「ホントよね。　たった6人だったあの頃が遠い過去みたい」
あれから……轟天と羅號がこの世界で覚醒してから4か月の月日が流れていた。
その間に第二拠点ともいえる『ラゴス島秘密基地』は完成した。轟天たちの真の本拠地である『緯度0秘密基地』の存在を知っている方がもう少なく、轟天と羅號、それに村雨と『ラゴス島秘密基地』が完成するまでの間に羅號が助けてきた通称『ラヴァーズ』の面々だけである。
人の数も増え、装備も充実した。
全員が艤装を根底から大改修し、高性能レーダーと対艦誘導噴進弾を標準装備。機関出力も大幅に上がっており、もっとも足の遅い戦艦ウォースパイトですら35ノット以上の速力を誇り、駆逐艦級に至っては50ノットという異次元級の快速を誇る。この艦隊では例え駆逐艦級であろうと、そこらへんの艦隊など一方的に屠れるだけの力を持っている。空母や水母の艦載機にいたってはすべてジェット機とジェット水上機、ターボジェット水上機という有り様。
その戦力が総勢30人、今日助けた叢雲を加えて31人だ。十分すぎるほどの戦力だろう。
さらに周辺の無人島へのレーダー設置も完了し、早期警戒網も完成した。拠点の防衛能力も格段に上がっており、たとえ拠点に深海棲艦の10個艦隊が攻めてこようと一方的に勝利できる確固たる自信もある。
『足場固め』という、初期目的は達成したとみていいだろう。

「そろそろ……次の段階に進むべきだな」
「それじゃ……」
「俺たちだけで深海棲艦を倒せるわけじゃない。
そろそろ国家……日本と接触すべきだ」
「……」
轟天の言葉に、村雨は押し黙る。その胸に去来しているのは懐かしい故郷の光景か、それとも違うものなのだろうか？
２隻の海底軍艦が、ついに歴史の表舞台に躍り出ようとしていた。
そしてそれは、この先の見えない戦争が『真の終わり』に向かう第一歩であったのだった……。

秘匿艦隊Ｅ・Ｄ・Ｆ
『司令艦』
轟天（海底軍艦）
羅號（海底軍艦）
『秘書艦』
村雨（駆逐艦）
『羅號側近艦隊（通称：ラヴァーズ艦隊）』
朝潮（駆逐艦）
呂５００（潜水艦）
リベッチオ（駆逐艦）
山風（駆逐艦）
暁（駆逐艦）
Ｚ３マックス・シュルツ（駆逐艦）
『所属艦娘』
ウォースパイト（戦艦）
ビスマルク（戦艦）
イタリア（戦艦）

グラーフ・ツェッペリン（正規空母）
アクィラ（正規空母）
コマンダン・テスト（水上機母艦）
秋津洲（水上機母艦）
プリンツ・オイゲン（重巡洋艦）
ポーラ（重巡洋艦）
名取（軽巡洋艦）
阿武隈（軽巡洋艦）
由良（軽巡洋艦）
酒匂（軽巡洋艦）
Z1レーベリヒト・マース（駆逐艦）
皐月（駆逐艦）
三日月（駆逐艦）
長月（駆逐艦）
若葉（駆逐艦）
霞（駆逐艦）
不知火（駆逐艦）
浜風（駆逐艦）
叢雲（駆逐艦）

『解説』

轟天、羅號を頂点とした秘密艦隊。拠点は『ラゴス島秘密基地』。轟天や羅號その他の所属艦娘によって、捨て石にされたり全滅しそうになったところを助けられた、『もはや帰る場所のない艦娘』によって構成されている。

通常鎮守府のほとんどが『損耗するなら外国人艦娘から』と考えている傾向があるためそうして捨て石にされたところを積極的に保護した結果、非常に『外国人艦娘』が多い。

日本艦娘の場合は大型艦を逃がすために軽巡・駆逐を捨て石にする傾向のため、日本艦娘は軽巡以下の小型艦娘しか所属していない。重巡以上の大型艦娘はすべて『外国人艦娘』という珍しい構成になって

いる（例外として秋津洲は低い戦闘能力から囮にされてしまったようだ）。

誘導兵器やジェット機などの超技術を有しており、それぞれの艦娘が他とは別次元の戦力を持つ。

現在は轟天・羅號の方針に従い、国家とは接触せずに対深海棲艦のための力を蓄えている。捨て石にされたり、そもそも産まれる前に祖国が滅んでいる『亡命外国人』が多く国家への帰属心は薄く、問題なく轟天と羅號の指示に従う。

最古参である轟天との関係を噂される秘書艦『村雨』、そして同じく最古参で羅號との関係を隠そうともしない通称『ラヴァーズ艦隊』の発言力が極めて大きく、轟天・羅號からの信頼も厚い。

本当の切り札とも言える『緯度０秘密基地』の存在を知るものも轟天・羅號・村雨・ラヴァーズ艦隊の９名だけである。

接触

大海原を往く艦隊。その先頭にはドリルを持つ戦艦の姿があった。轟天の率いるE・D・F艦隊である。その艦隊構成は轟天、村雨、アクィラ、不知火、叢雲、霞という駆逐4、空母1、そして海底軍艦1という構成だ。

そんな艦隊の先頭を行く轟天に、隣に並んだ村雨が小声で聞いてくる。

「ねぇ……」

「あん？」

「交渉、うまくいくと思う？」

その声は若干の不安が見え隠れしている。轟天が後ろを振り返れば口には出さないものの、皆の顔に同じように不安だと書いてあった。村雨の言葉は全員を代表しての言葉だったのだろう。

それもしょうがないことだと、轟天は思う。E・D・F艦隊はさまざまな理由で元の場所に帰れない、訳アリ者の集団である。その事情のほとんどは、時間稼ぎなり囮なりで『死を命じられた』というものだった。かく言う村雨だって輸送船の離脱のために死ぬと分かっている囮となり、仲間たちは全滅の憂き目にあっている。そのせいで全員がどうしても大なり小なり軍という組織を、ひいては日本という国家そのものに不信感を抱いているのであった。

「なぁに、うまくいくさ。

そんなに心配するなよ」

E・D・F艦隊のリーダーということになっている轟天は、これ以上不安がらせるわけにもいかないとできる限り軽く返す。

「どのみち俺たちだけで深海棲艦と戦い続けるってのは無理がある。

まぁ、それはやればできるかもしれないが……存在を秘匿したまま深海棲艦と戦い続けるのはどうやっても不可能だ。このままいつまでも隠密活動を取り続けられるわけじゃないし、そのうちチラリと空撮でもされて不明艦ってことで噂にくらいはなっちまう。そのくらいならいいが、敵だと思われて攻撃でもされたらさすがにこっちもや

り返さなきゃならない。そうなってからじゃ、関係修復は面倒だからな。
だから俺たちはそうなる前に本格的な接触を日本としておく必要がある。それが今か後かの差だよ」
「それはそうだけど……」
「それに、そのために相手だって選んでるんだぜ」
なお不安そうな村雨に、轟天はなだめるように言った。
今、轟天たちが向かっているのはトラック諸島、そこにあるトラック泊地だ。事前に調査した結果を考慮しての判断である。
「聞く限り、トラック泊地の提督ってのは理不尽な命令はしない、デキる提督だろ。
おまけに元帥の息子だってんで中央へのコネも十分。
『お土産』だって持ってきてるんだ、これを見れば噂通りのデキる男ってならいきなり敵対ってことにはならんさ。
それにもしダメってことになっても、すぐに救援できるように羅號たちを残してきたんだ。駄目なら駄目で羅號の救援を待って脱出すればいい。
……まぁ、俺がいるんだしそんなフザけた真似はさせないけどな！」
そう言って「安心しろ」とでもいうように村雨の肩に手をまわすと、ポンポンと叩く。
「まぁ、どのみち私たちは轟くんを信じるしかないか……頼りしてるわよ、轟くん」
「そういうこと。大いに信用してくれよ」
いつもの調子に戻った村雨に、轟天も満足そうに頷く。
「……それで、任務の真っ最中だというのにお二人はいつまでイチャイチャしているのですか？」
「うぉっ!?」
「きゃっ!?」
すぐ近くにまでやってきていた不知火に驚いて2人は飛びあがる。
「な、なんだよ不知火。俺たちは別にイチャイチャなんかしてないぞ」

轟天の言葉に同意するように村雨はうんうんと頷くが、不知火は刺すように冷たい視線のままだ。
「司令は一度、客観的にご自分たちの姿を想像することをお勧めします。
後ろから見ていた分には、司令が村雨の肩を抱いてイチャイチャしていたようにしか見えませんが？」
言われて見ると、他からの視線が痛い。
不知火と同じく性格がきつめな叢雲と霞は、不知火同様の冷たい視線だ。冷凍砲のように装甲が凍り付きそうに痛い。
逆にアクィラからは微笑ましいものを見るような、生温かい目で見られている。これはこれで居心地が悪い。
「いや、俺は至極真面目に村雨の不安をだな……」
「そういう態度には見えませんでしたもので」
言い訳じみたことを言ってみるものの、冷たい視線は全く変わらない。轟天が居心地悪そうに肩を竦めた、その時……。
「んっ？」
轟天が不意に真剣な表情で空を見つめている。
「どうしたの、轟くん？」
「偵察に出したドッグファイターが、深海棲艦と戦闘中の艦娘を発見した。おそらくはトラック泊地の艦娘だな」
「戦況は？　危なそうなの？」
「戦況は……今のところは互角ってところだな。
……あっ、こりゃヤバい」
何かに気付いた轟天が顔をしかめる。
「艦娘の両側面から深海棲艦の増援2艦隊が接近中だ。しかも片方は上位種までいる結構な艦隊だ。
艦娘側は敵増援に気付いていないな。
こりゃいま戦っている正面の艦隊と、両側面からの増援で半包囲が完成してヤバいことになるぞ」
「……そう言いながら、轟くん笑ってるわよ」
呆れたように村雨に言われて、轟天は自分が笑っていることに気付

いた。
「なぁに、あっちへの『お土産』が増えると思ってな。
総員、戦闘準備!!」
その瞬間、全員の雰囲気が変わる。それは艦娘という深海棲艦と戦う戦士の顔だ。
「艦娘の援護を行う。
対艦噴進誘導弾(ミサイル)や航空機攻撃はやってもいいが、それだけで決めるな。『手加減』しろ。
最終的に接近して、艦娘から良く見えるところでこっちの力を見せつけてやれ」
「了解。　それで、轟くんは?」
「俺かい?　俺はちょっと上位種のいる艦隊と遊んでくる」
そう轟天はニヤリと笑った。

〜〜〜

空防衛を担当しているのは秋月なのだ。敵の投弾を許したというのは、対空防衛網を突破されたという秋月の落ち度でもあるからだ。
しかし、そんな秋月が睨む空には、大量の敵航空機に対し、数の少ない味方の航空機が必死の空中戦を展開している。
「榛名さん、ごめんなさい！」
空中戦を担当している瑞鳳が敵航空機を防ぎきれていないことを詫びるが、それは仕方ないことだろう。
敵の艦隊構成は戦艦タ級1、軽空母ヌ級2、重巡チ級1、駆逐イ級2。
対する榛名艦隊は榛名、瑞鳳、秋月、そしてザラ、浦風、天津風という戦艦1、軽空母1、重巡1、駆逐3という構成である。航空戦力は相手の方が単純計算で倍だ。そのため制空権は劣勢の状態、常に頭上を押さえられている不利な戦いを強いられている。同時にいまの制空権の状態では観測機を飛ばすわけにもいかず弾着観測できず、榛名の砲の命中率は下がっていた。
「いいえ、瑞鳳さんはよくやってくれています。
それに……そろそろザラさんたちがやってくれるはずです！」
航空戦の劣勢を挽回すべく、敵への強襲を仕掛けるために離脱したザラ、浦風、天津風たちを榛名は信じていた。そして、戦友の信頼に応えないものはこの場にはいない。
「何事も粘り強く！　撃ち方、始め!!」
ザラたちの側面からの強襲によって敵の陣形が乱れる。その猛攻で敵駆逐イ級1隻と軽空母ヌ級1隻が撃沈された。
沈んだ軽空母ヌ級の所属だった航空隊なのだろう。途端に、敵航空隊の一角が混乱を始める。
「今よ！　数は少なくても、精鋭なんだから!!」
そのチャンスを瑞鳳は見逃さなかった。瑞鳳に残存していた少数ながら優秀な戦闘機隊が混乱した敵機に、猛禽のごとく襲い掛かる。そして空の戦いは互角にまで天秤が戻った。
そして、そんな戦友の活躍に呼応するように榛名も動く。
「砲撃開始！　てぇーーー!!」

榛名の主砲の一斉射、その砲弾がついに戦艦タ級に直撃した。
「よし！」
いまだ撃沈には至っていないが確かな手ごたえがあった。そしてトドメを刺すべく、主砲弾の装填を行う榛名。
しかし……。

ドゥン!!

「きゃぁぁぁ?!!」
「榛名さん!?」
榛名が左側面からの衝撃で吹き飛ばされた。慌てて起き上がろうとする榛名、そして秋月はその方向へと視線を向ける。
そこには……。
「えっ……」
「嘘……」
そこにいたのは戦艦タ級1、空母ヲ級2、重巡ネ級1、軽巡ツ級1、そして……戦艦棲姫1。艦娘にとって、深海棲艦の中でも特に会いたくない上位種を含んだ強力な艦隊が接近中だったのである。
「は、榛名さん!?」
瑞鳳が悲鳴のような声を上げた。見上げれば、2隻の空母ヲ級から発艦した艦載機によって瑞鳳の航空隊は壊滅一歩手前の状態、制空権は完全に敵の手中に握られてしまっている。
事ここにきて榛名は勝利は不可能だと判断した。決断したのなら榛名の行動は早い。
「撤退します！
ザラさんたちにもそう連絡を!!」
ザラたちは榛名の仕留め損ねた戦艦タ級を撃破、ダメージは受けているものの残敵の掃討を完了していた。
幸いにして戦艦棲姫の足はそれほど速くない。ザラたちと合流し対空防御を固めながら離脱を図ろうとする榛名たちだが、そんな合流しようと近付いてくるザラたちの周囲に水柱が立った。それを発砲

したのは当然戦艦棲姫……であったのなら、どれほどよかったか。
「榛名さん、あれ！　新手です!!」
秋月が指さす方向、これから逃げようとしていた先に新たな敵艦隊が現れる。戦艦ル級3、駆逐ロ級3の艦隊だった。まさしく『前門の虎後門の狼』というやつである。榛名艦隊は前後から挟み撃ちの形になってしまったのだ。
「……全員、散開してトラック泊地を目指してください。
榛名が時間を稼ぎます」
「榛名さん、秋月は最後までお供します」
「瑞鳳も残った九九艦爆で少しでも敵に損害を与えます。
大丈夫、精鋭だもん」
「ありがとう、秋月さん、瑞鳳さん……」
榛名たちは顔を真剣なものに変えると武器を構えた。その時だ。
「は、榛名さん！　あ、あれ!!」
「今度はなんですか、瑞鳳さん！」
言われて空を見上げた榛名はそこで言葉を失った。数的不利によってもはや壊滅一歩手前になっていた瑞鳳の航空隊を援護するように、どこからともなく現れた航空機が深海棲艦の航空機に攻撃を仕掛けていた。
その機体は瑞鳳の零戦とは形状がまるで違う。空飛ぶ三角形とでも言うか、プロペラはなく機体後部から炎を吐いて飛んでいた。そのスピードはまったくの別次元の存在である。
「噴式!?」
「でもあんな形状、見たことないよ!!」
榛名は最近になってチラホラと噂に聞く噴式の航空機とわかったが、瑞鳳はそれが見たことのない形のものだと断じる。すると、その謎の噴式航空機から小さな魚雷のようなものが発射された。それが炎の尾を引きながら、逃げ惑う敵の航空機をまるで猟犬のように追い回し、炎の塊へと変えて海上へと叩き落としていく。
「噴進弾（ロケット）ですか!?」
「でもでも、あの噴進弾（ロケット）いま曲がったよ!?」

目の前で巻き起こる不可解な出来事に、榛名たちは混乱の極みとなる。

そこに通信が入った。

『これより貴艦隊の援護に入ります！』

その言葉とほぼ同時に、空を再び噴進弾（ロケット）のようなものが６発飛んでいく。今度は謎の噴式航空機から発射されたものではなく、それよりも巨大なものだ。それが榛名艦隊の前方を塞いでいた戦艦ル級３、駆逐ロ級３に飛んでいく。それに気付いた敵艦隊が対空機銃で弾幕を張るが、その謎の噴進弾（ロケット）は凄まじい速度でぶつかっていく。大爆発が巻き起こり駆逐ロ級３隻はそのまま轟沈、そして戦艦ル級３隻も沈む寸前ともいえる大ダメージを負っている。

「すごい……」

一度の攻撃で敵艦隊を壊滅寸前にまで追い込んだ攻撃に、自分たちの航空隊で同じことをするにはどれだけの艦攻と艦爆に攻撃させれば可能だろうかと瑞鳳はその攻撃力に声を漏らす。一方の榛名は攻撃力よりも、６発が全弾命中という命中率の方に脅威を感じた。

「榛名さん、艦隊です!!」

秋月に言われて見れば、こちらに向かってくる艦隊の姿があった。駆逐艦４、正規空母１という艦娘の艦隊である。だが、噴式航空機を飛ばせるのは蒸気カタパルトと装甲甲板を備えた翔鶴型改二甲のみであるはずだ。しかしそこにいる空母艦娘は翔鶴型ではない。見覚えのないような空母艤装を纏ったセミロングの明るい茶髪の外国人艦娘……アクィラである。

異常なのはそれだけではない、駆逐艦娘４人も見たことのない艤装を纏っている。そしてその戦闘速度は明らかに最速と言われている島風の速度を超えていた。

「全員、艦隊の対空防御!!」

「「了解!!」」

先頭を駆けていた、おそらく村雨と思われる艦娘の指示で他の３人の駆逐艦娘――こちらは不知火、叢雲、霞と思われる――が散開、榛名たちを守る形で輪形陣を敷いた。

「あなたたちは……」
「話は後で！　これより対空戦闘、開始します!!」
榛名はリーダーと思われた村雨に話しかけるも、それを遮るように4人は砲を空に向けた。そして……『連続した』発砲音が響く、村雨たち4人の持つたった1門の砲、それが文字通り凄まじい速度で連射された。同時に重低音を響かせながら、機銃らしきものが発射される。
凄まじい密度の対空弾幕が瞬時に形成された。そしてその密度以上に凄まじいのがその命中率、砲と機銃がまるで敵機に吸い込まれていくように敵航空機を直撃していく。その光景に対空防衛を担当している秋月が驚きで目をむいた。
噴式航空機に翻弄されていた敵航空機隊は、間を置くことなくすべて空から叩き落とされていた。
「やっちゃうからね!!」
「沈め!!」
「私の前を遮る愚か者め。　沈めっ！」
村雨の言葉に、先ほどの攻撃でかろうじて浮いている戦艦ル級3隻に向かって、村雨と不知火と叢雲が『各1本づつ』魚雷を放った。
魚雷は扇状に多量に放つのが当然なのに、たったの1発づつではほとんど命中は望めない。それをみて秋月は『弾切れなのかな？』と訝しんだが、しばしの後、戦艦ル級3隻が水柱とともに沈んでいく。3発全弾命中だ。そのあまりのありえなさに、秋月は声もない。
そして戦艦ル級が沈むのを確認すると戦闘は終わったとばかりに駆逐艦娘4人は砲を下げ、アクィラは着艦作業に入っていく。それを見て榛名は慌てて近くにいた村雨に話しかけた。
「あの、そこの……」
「あ、大丈夫でしたか？」
「ええ、おかげで……って、まだ後方から戦艦棲姫を含んだ艦隊が接近中です！
警戒を解かないでこのまま離脱を……」
まだ後方から追ってきているだろう戦艦棲姫の艦隊がいるのだ。

警戒を解くのはまだ早いと榛名は忠告しようとするが、村雨は微笑みながら言った。
「それなら大丈夫ですよ。
だって……なんで今、戦艦棲姫の艦隊からの攻撃がないと思いますか？」
……言われてみれば、さっきから自分たちの後方から追ってきているだろう戦艦棲姫の艦隊からの砲撃が全くない。榛名艦隊はそれに始めて気付き、そして何故だか嫌な予感がした。振り返ったら最後、自分たちの中の何かが粉々に壊れてしまうような……そんな予感だ。
しかし確認しないわけにもいかず、恐る恐る振り返る。そして目に飛び込んできたその光景に、全員が驚愕で目を見開いた。
そこにいたのはたった1隻、たった1隻の戦艦だった。だがその戦艦は一から十まですべてが『異常』だけで構成されている。
砲のようなものはどこにもなく、アンテナのようなものと四角いものが敷き詰めた甲板。艤装を纏うには女でなければならないという絶対的ルールがあるのにも関わらず、どう見ても男。そして……巨大なメイスのようなドリル。
『常識』というものが欠片もなく、『非常識』だけで構成されたその戦艦がたった1隻で敵艦隊と戦っている。
……いや、訂正しよう。そこで行われていたのは戦闘ではなかった。巨象が蟻を踏みつぶすかのようなそれは戦闘とは言わない。『蹂躙』だ。
先ほどの飛翔魚雷のようなものが発射され空母ヲ級2隻が直撃を受け、内部から膨れ上がるように爆殺される。アンテナのようなものから光線が吐きだされ、戦艦タ級と重巡ネ級と軽巡ツ級の装甲がまるで縁日の飴細工のように融解し、大爆発が巻き起こった。
あの幾多の艦娘たちを絶望の淵に叩き落としただろう戦艦棲姫が、恐怖の表情を浮かべながらがむしゃらに主砲を乱射するも、その主砲弾は空中で光線に貫かれて爆散し、その男の戦艦には届かない。
そして、その戦艦がドリルメイスを振り上げた。
「ミンチのお時間だぜ」

その戦艦の声なのだろう、男の声が聞こえる。
こちらは背中しか見えないが、榛名艦隊の誰もが『よかった』と思った。どんな表情で言ったかは分からないが、その顔を見たらきっと一生もののトラウマになるような顔で言っているのだろうと何となく想像できてしまう。
ドリルが戦艦棲姫を貫き、穿ち、砕き、潰していく。断末魔の絶叫が海域に響いた。
最初はガリゴリと硬い音が響いていたのに、だんだんとグチャグチャという水っぽい音に変わっていく。それに比例するように絶叫も小さくなっていき、ついにドリルの回転音しか聞こえなくなった。
やがて元が何だか分からない肉塊へと姿を変えた戦艦棲姫が波間に消えるとドリルの回転が停止し、そしてその戦艦が榛名艦隊へと振り向いた。
歳は秋月と同じくらいの14～15歳の少年、ところどころに返り血はついているものの完全な無傷である。超重量を誇るだろうドリルメイスを片手で軽々と担ぎ、その顔の左側をオイルのように真っ黒な深海棲艦の返り血で汚しながら、壮絶な笑顔でこちらにやってくる。
榛名艦隊は誰も動けない。彼女たちにとってはドラゴンから逃げていたらラスボスの魔王とエンカウントしてしまった気分だ。素性を知らない彼女たちにとって、その戦艦は深海棲艦とほとんど変わらなかった。
そして脅威はその戦艦だけではない。今も輪形陣で榛名艦隊を守る、未知の武装を使う艦娘たち。考えようによっては彼女たちに包囲されているのと同然だ。どうしても緊張してしまう。
すると、村雨がその戦艦の元に向かうと、ハンカチでその顔についた返り血を拭いた。
「なんて顔してるのよ、轟くん。
艦隊の人たち、すっかり怯えちゃってるじゃない！」
「しょうがねえだろ、戦闘でちょっとハイになっちまったんだよ」
「もう、顔くらい拭いてよ！」

「わかったわかった、自分でやるって。
まったく……お前は俺の母親かっての」
ブツブツと言いながらも、村雨びハンカチを受け取り乱暴にゴシゴシと顔を拭う。
「ほら、轟くん。あいさつあいさつ。
人間、第一印象が判断基準の７０％なんだって」
「へいへい」
あの魔王のような戦艦を相手に物怖じせずに話す村雨と思われる艦娘に、秋月は戦慄を禁じ得ない。このことでのちに村雨は駆逐艦娘たちに『魔王の飼い主』とあだ名されることになるが、それはまた別の話だ。
榛名の前にまでやってきたその戦艦は、右手を出しながら言った。
「俺の名は轟天。
コンゴトモヨロシク」
「よ、よろしくお願いします」
榛名はやっとのことで、それだけのセリフを絞り出したのだった。

トラック泊地

戦いは終わり、改めて榛名艦隊の前に轟天たちＥ・Ｄ・Ｆ艦隊が並んだ。
「改めて……海底軍艦『轟天』。
一応このＥ・Ｄ・Ｆ艦隊のリーダーってことになってる。
よろしく」
そう言って手を差し出すと、いろいろと思うところはあるのだろう、少々ぎこちない動きで榛名が握手を返した。
「トラック泊地所属の榛名です。
危ないところを助けていただき、貴艦隊の救援に感謝します。
ですが……失礼ですが、そちらの所属はどこですか？
榛名はあんな新型兵装の話や、男性用の艤装が開発されたという話を聞いたことがないのですが……」
「いや、所属はないよ。
まぁ、『訳アリ』ってやつさ」
「それは……」
そう言うと、榛名は何か言いたそうにもごもごとしている。おそらく言いたいことはあるものの助けられた手前、言っていいものか迷っているのだろう。その姿を見て轟天は「無理に言わなくていい」と手をひらひらと振る。
「言いたいことは分かる。
自分たちで言うのもなんだが、俺たちが怪しさ大爆発の集団だって自覚はあるからな。むしろ警戒しないほうがおかしい」
無所属の艦隊、見たことのない新型兵装の数々、そして適合者の女性しか纏えないはずの艤装を纏う男、『艦息』。もう怪しさのオンパレード状態、怪しくない部分を探し出すことのほうが難しいくらいだ。苦笑する轟天に、その後ろでは村雨をはじめとした艦娘たちが同意するようにウンウンと頷いている。
「その辺はおいおい話すけど……俺たちは深海棲艦と戦っているって

ことは事実だ。
そこは信用してほしい」
「それは……先ほど助けていただきましたので理解もできますが……」
「なら道すがら話すさ。
どうせこっちの目的地もトラック泊地だからな」
そうして傷付いた榛名艦隊を守るように周辺警戒をしながら、E・D・F艦隊はトラック泊地へと進み始める。その間に、轟天は大まかな話を榛名にしていた。
「記憶喪失、ですか？」
「まぁな。
胡散臭い話だって自覚はあるから、信じる信じないは任せるよ。
妖精さんたちからの情報で『男』ってだけで俺の立場は微妙だっていうことは理解できた。いきなりどこかの鎮守府なり泊地なりに駆け込んで保護を求めるってわけにもいかなかった。モルモット扱いはまっぴらごめんだからな。
だからこうやって……日本海軍（そちらさん）がいらないって捨てた連中を助けて仲間にしているってわけだ」
「はぁ……」
榛名はその話に相槌を打つものの、記憶喪失やら『艦息』やらといろいろと現実味が無くて困ってしまう。それにトラック泊地では噂で聞く程度で決して行われることはない『捨て艦戦法』の犠牲者を前にしているとなると、やはり居心地がいいものではない。
「とはいえ、俺たちもいつまでも隠れて活動するってわけにもいかない。それでいい加減日本海軍と接触しようってことになってな。で、調べてみたらアンタらトラック泊地の提督はまともそうだったんで、ちょっと話をしに行こうとしてたところだ。
俺たちの望みは『立場』と『保証』。
俺を含めた仲間をそっちの技術解析のためのモルモットにされるわけにはいかないから、それ相応の『立場』と『保証』が欲しい。
そのかわりにこっちは技術提供や、俺を含めた戦力を貸し出す用意

もある。
俺たちの力をその眼で見たあんたなら、これがどういう意味か分かるだろ？」
「ええ、よく分かります」
轟天の言葉に、榛名は深く頷いた。
事実目の前でその実力を見た榛名としては、彼ら6隻を相手に自分を含むトラック泊地の全員が戦ったとしても、勝利は難しいだろうほどの戦力を有していると判断している。そして恐らく、彼らはまだ実力を隠しているという予感があった。
とにかく、これらの新技術や戦力の重要性はすぐさま榛名には理解できた。しかし榛名にはそんな、ともすれば世界がひっくり返るようなことに関して決定権などない。
「では、私たちにはトラック泊地提督への口添えを期待している、ということでよろしいですか？」
「話が早いな。
まぁ、こっちが会談を希望しているってことと、あんたらがその眼で見たことを提督に伝えてくれればいい」
「ええ、助けていただいたことも含め、すぐに提督に連絡をとりましょう」
言葉を返しながら、自分たちを助けた理由の一つがこれだったのだろうと榛名は理解した。つまり轟天はトラック泊地に対して恩を売るのと同時に、自分たちの戦闘能力の生き証人として提督への連絡役を榛名たちに期待しているのだ。
「なに、そっちを護衛しながらトラックに向かうんだ。
時間はあるしゆっくりやってくれ」
話は終わりとばかりに轟天はめんどくさそうに手をひらひらと振ると、榛名との話を打ち切って隣の村雨と何事かを話し始める。
榛名はそれを横目に、トラック泊地宛ての緊急電をいれて状況を報告する。
（ひょっとしたら……私は歴史の節目に立ち会っているのかもしれない……）

疲弊し衰退していくだけの人類の現状、それを変える『何か』に自分は立ち会った……榛名は漠然とだがそう感じていた。

～～～

ツリとつぶやいた。
「なんていうか……ショボいな」
　手入れは行き届いているようだが作業クレーンは機器は古めかしくこじんまりとしていて、轟天はかなりショボいという感想を抱いた。ここが本当に南方における一大拠点の一つなのだろうかと疑問に思ってしまう。しかし、それを隣で聞いていた村雨は肩を竦めながら言った。
「それ、ラゴス島秘密基地がおかしいだけだよ。
　私から見たらさすがはトラック泊地、納得の設備だわ。
　……これが現在の戦況の結果、ってことよ」
「そうか……」
　そう言って、轟天は再び辺りを見渡す。
　村雨や他の艦娘からの話で、現在の人類の戦況が厳しいということは聞いていた。だが話で聞くのと、実際に目で見るのとではその衝撃と理解は全く違う。轟天は今初めて、現在の人類の苦しい状況を正しく思い知っていた。
　それからひまを潰すこと小一時間、榛名が轟天たちのところにやってきた。
「会談の用意ができましたので、どうぞ」
「俺と村雨で行く。
　他はここで待機させるが、構わないか？」
「ええ、どうぞ。
　こちらにもお茶をお持ちしますよ」
　榛名の了承を得て轟天は村雨だけを連れて残りの全員に待機するように告げると、榛名の先導に従って歩き出す。
　レンガ造りの倉庫に、こじんまりとした司令部棟。どちらも手入れが行き届いており、施設全体が小奇麗な印象を受ける。すれ違う艦娘たちがこちらに好奇の視線を浴びせてくるが、彼女らの健康状態も良さそうだ。少なくとも絶望に曇った瞳の艦娘は1人もいない。これなら提督の人となりにも期待がもてそうだと轟天は心の中で呟く。
　やがて、轟天たちは重厚なドアの前にやってきていた。

「提督、お連れしました」
「どうぞ」
　榛名が開けたドアの先には、先ほどまで海で一緒だった瑞鳳が、そして執務机で作業する軍服の男。
　歳は３０代前半の働き盛り。覇気に満ち、柔和そうながら芯の強さが伺える眼光。それを見て轟天は「これは当たりかな？」と心の中で笑った。
「はじめまして、私はこのトラック泊地提督、中條義人という」
「ああ、はじめまして。
　俺は海底軍艦『轟天』、こっちは俺の秘書艦の村雨だよ」
「は、はじめまして」
　差し出された手を轟天が握り返す。そして続けておっかなびっくりといった感じで村雨も握手を交わした。中條提督はそのまま柔和そうな顔を崩さず、手で来客用ソファへと促し、２人が座る。
　そんな２人の正面に提督が座ると、その後ろに榛名と瑞鳳がたつ。２人は護衛なのだろう。
「改めて、貴艦隊の救援に感謝します。
　おかげで私は、大切な部下たちを失わずにすんだ」
「別に構わない。俺たちの目的も深海棲艦の撃滅だ。
　それの最中にたまたま近くにいたからってだけの話さ」
「それで……榛名たちから大まかな話は聞いたのだが、もう一度確認をさせてほしい」
　そして轟天は再び、自分の状況と経緯を語る。
　過去の記憶がないこと、その記憶を探していること、深海棲艦と戦っていること、そしてその過程で『捨て艦戦法』などで帰る場所のない艦娘たちを保護して拠点を築き活動していること、轟天の妖精さんたちによって開発された新兵器で武装を強化しているなどだ。
　自分で説明しながら、どう考えても怪しい集団だと自覚して心の中で笑ってしまう。
「とてもすぐには信じられない話だが……榛名たちが嘘を言うはずもないか」

「なに、自分で言うのもなんだがこんな怪しさ大爆発な話だけで信用してもらおうとは思ってないさ。
村雨」
「はい。　提督、どうぞ」
轟天が言うと、村雨は懐から何かの紙を取りだすとそれを中條提督へと差し出す。
「なにかな、これは？」
村雨から書類を受け取った中條提督がそれに目を通していくと、だんだんと顔つきが変わっていく。
「これは……」
「俺たちからのお土産だよ」
その書類は、今回持ってきて譲渡する予定の、轟天たちによって造られた兵装の詳細データだ。
「実物を持ってきてあるし、それをそっちに贈るよ。
それを試験してみれば、俺たちが言っていることが荒唐無稽な妄想じゃないって分かると思うぜ」
「……いいのかい？」
「俺たちの欲しいのはさっきも言ったように『立場』と『保証』だ。
そのためにはあんたよりも『上』を動かさないとならない。
一応、こっちも事前の調査はしてある。あんたが元帥の息子だってことも、親子仲が良好だってことも知っててな。そこを動かそうっていうんだ、このぐらいのものは出さないとお話しにもならないだろ？」
「……わかった、ありがたく受け取るよ。
ただ……私ではここの泊地でならともかく、君たちの希望通りにできるとは現段階では確約できない」
「そこらへんはまぁ、応相談ってところだな。
ただ……」
その瞬間、轟天の雰囲気が変わる。細められた目からは殺気が漏れだしていた。それを感じ取った榛名と瑞鳳が思わず中條提督の前に飛び出そうとするが、中條提督は静かにそれを手で制す。

「俺や仲間に降りかかる火の粉は容赦なく払いのける。
俺をモルモットにしたいからその身を差し出せだの、死を命じておきながら生きてたのなら自分たちの所属だから村雨たちを引き渡せ、とかふざけたことを言ったら……俺は相手が誰だろうと本気で怒るぞ」
「……肝に銘じておくよ。
君たちとはいい関係を築きたいからね」
そう中條提督が答えると、轟天からの殺気は消えた。
「こっちも同感だよ。敵は深海棲艦だけで十分だぜ」
元の飄々とした感じに戻った轟天が肩を竦める。
「少なくとも君たちのことは元帥に報告して判断を仰ぐことになる。
今すぐに回答は出せないが……その間、君たちはどうする？
もしここに留まるなら、賓客としてできる限りのもてなしはさせてもらうよ」
だが、その言葉に轟天は笑顔で首を振る。
「いや、遠慮しておくよ。
こっちも日本海軍（そちらさん）がカッツカツでやりくりしてるってのは知ってるよ。それにたかるってのもな。
逆に土産として少しだが糧食も持ってきてるから受け取ってくれ」
そう言うと話は終わったと轟天と村雨は立ち上がり、机にコトリと箱のようなものを置く。
「専用の通信機を置いてく。俺たちに連絡を取りたいときに使ってくれ。
俺たちはしばらくしたらお暇させてもらう。
荷物は今使ってるドッグに置いていくから、あとで回収してくれ。
っと、帰る前にトラック泊地（こ）を見学してってもいいか？
ちょっと興味あるんだ」
「もちろんだとも。
瑞鳳、彼らの案内を頼む」
「は、はい！」
中條提督に言われ、瑞鳳の案内で轟天たちは部屋を出る。残ったの

は中條提督と榛名のみ。
「……どう思う、榛名？」
「……彼らの素性や事情については、正直榛名では嘘か本当か判断できません。
ですが……彼らの戦闘能力を目にした榛名から確かなことを一つ。
提督、絶対に彼らと敵対してはいけません。
それだけは、それだけは確実なこととして榛名は言えます」
「……そうだな、それだけは間違いないだろう。彼らとの共闘態勢が築くことができれば、これほど嬉しいことはない。
しかし……これほど強大な力だと、手放しで喜ぶわけにもいかないものだ」
フゥ、と中條提督は大きく息をつくと、轟天から渡された兵装データの書類を机に投げ出す。
「……とにかく、これは大変なことだ。
明日一番にでもこれらの兵装の試験を行う。それと……父への報告も」
「はい、提督。
すぐに元帥閣下への報告の準備をしましょう」
中條提督と榛名は頷きあうと、すぐに自分の仕事へと取り掛かった。

～～～

どれもこれも一般の装備と比べたら強力なのよ。
もしかしたら、あれを使ってこっちに攻撃してきたり……」
「いや、こっちの技術を見せつけないとてもじゃないがまともに話を聞いちゃくれないよ」
「だったら食料プラントの技術とかのほうが……」
「バカ言うな、軍事技術なんかよりそっちの方が渡しちゃいけない技術だよ。食料ってのはどこにだってぶっ刺さる強力な武器だからな。それに、その危険性も考えて大したものは渡してないだろ？」
村雨の言葉に、心配ないと答える轟天。
今回轟天たちが提供したものは３つ。
艦上ジェット戦闘機『Ｆ―２　バンシー』と艦上攻撃機『ＡＤ―１　スカイレイダー』、そして『オート・メラーラ１２７ｍｍ単装速射砲』である。
しかし『バンシー』と『スカイレイダー』は普通の艦娘の装備としては強力だが、轟天たちにとっては旧式も旧式だ。今回同行しているアクィラの艦載機はすべて『ＡＶ―８Ｂ　ハリアーⅡ』である。『バンシー』と違い、空対空ミサイルを積んでの対空戦、対艦ミサイルを積んでの対艦戦双方が可能で、おまけに垂直離着陸まで可能だ。
『オート・メラーラ１２７ｍｍ単装速射砲』は村雨たちの装備しているものと同じだが、この真価を発揮するのは高性能なレーダー、そして高度なＦ・Ｃ・Ｓ（ファイア・コントロール・システム）と合わせた時だ。村雨たちが使えば敵機を面白いように叩き落とす脅威の命中率を誇るオート・メラーラ１２７ｍｍ単装速射砲も、それ単体だけでは高速連射可能な砲でしかない。もっとも、それでも十分強力だが……。
とにかく、今回提供したものはどれもこれも戦力として、村雨たちの装備しているものよりも数段落ちている。そもそも今回のプレゼントは、相手にこちらの技術力を見せつけて侮られないようにするためのデモンストレーションに近い。そのため、艤装の大改修が必要となるような超高性能兵装を贈っても意味はないだろうという配慮と同時に、もしもそれを使って攻撃を仕掛けてきても十分対応できるように選んだのである。

「それに、あの提督はバカじゃない」
轟天は中條提督の目を思い出す。
私欲や保身ではない、あれは真っ直ぐな使命感に燃える瞳だった。それだけでも轟天にとっては信頼に値すると断じられるが、部下である艦娘たちに対する配慮も十分だ。轟天たちは今日の昼食風景を見せてもらったのだが、噂の味の薄い栄養ブロックとやらは出ているものの、それと一緒に野菜や鶏肉の入ったスープが出ていた。なんでも島内で手の空いた艦娘たちが畑や養鶏をやっているらしく、艦娘の環境を少しでも良くしようと頑張っているらしい。村雨たちが元いた所属とはまるで違う扱いとのことだ。そのためか提督の艦娘たちからの評判はすこぶる良く、士気はそのまま高い戦果にも繋がっている。
「つまり情報通りのデキる提督だよ。
俺たちに敵対するってのは損しかないってわかっているさ。そんな選択、選ぶはずがない」
「確かにそうね」
そう頷く村雨の脳裏には、以前の所属で過ごした日々がよぎっているのだろう。トラック泊地との違いを想ったのか、どこか遠い目をしていた。
「さて……あとはあの提督の親父の、元帥閣下どのも同じくらいデキる男だってのを祈るばかりだな。
老害系だけは勘弁だぜ」
「今まで調べたところだと大丈夫そうだけどね」
「いやいや、蓋開けてみるまで分からないぞ」
冗談めかして言う轟天に、村雨もつられて笑う。
しかしまだこの時轟天は、元帥との話が自分たちの失った記憶に繋がるとは夢にも思っていなかったのである……。

それぞれの思惑

「閣下から指示された不審な艦娘の遺体の件ですが……現在のところ、同種の不審な艦娘の死亡事例は確認できませんでした」
「そうか……」
　大淀の報告を聞きながら、中條元帥は静かに頷きながら考える。中條元帥の読み通り、これが『彼女たち』の言っていた『真の絶望』の前兆だと仮定して、その兆しが見えたのは今のところトラック泊地だけだ。中條元帥もその『真の絶望』が一体どんな形のなんであるのかは分からない。だからこそより一層の警戒をすべきであろうと考える。
「……以後もしばらくの間、同種の不審な事件がないか注意していてくれ。
　特にトラック泊地とその周辺ではより一層の警戒を。
　予定されている敵泊地攻略戦も近い、偵察は注意深く密にするよう指示してくれ」
　中條元帥の指示にいつもなら大淀は即座に動き出すが、今日はその瞬間を見計らったかのように電話が鳴り始めた。
「はい、こちら執務室。
　はい……わかりました、閣下へかわります」
　電話に出た大淀が受話器を差し出しながら、中條元帥に言う。
「そのトラック泊地からです。
　ご子息から、何か緊急で元帥に指示を仰ぎたい案件があると……」
「何!?」
　警戒しているトラック泊地からの連絡である。しかもこのタイミングだ。
（まさか……『真の絶望』が現れたのか!?）
　最悪の事態を想定し、中條元帥は大淀の手からひったくるように受話器を受け取ると、中條元帥はすぐに会話を始めた。
「私だ。

うん……何!? それは、確かな話なのだな？
物的証拠も置いてった？ それで、その試験の結果は？
うん……うん……分かった。私が直接交渉にあたる。
それでだ、先方にはこう伝えてくれ……いいな、必ず今言った通りに先方には伝えてくれ。
ではな、私も大急ぎでそちらに向かう」
「あの……閣下？」
ガチャリと受話器を置き何事かを考える中條元帥に、大淀が恐る恐るといった感じで声をかける。
はたで聞いていただけの大淀にはその詳細は分からない。しかしこの中條元帥がこうも感情を露わにするような何か大きなことが起こったことだけは分かった。
「……大淀くん、今日からしばらくの予定はすべてキャンセル。
私はトラック泊地へと向かわねばならん。すぐに支度を始めてくれ」
「了解です。 ですが……一体トラック泊地で何が？」
中條元帥の指示にすぐに頷く大淀だが、どこか納得いかなそうな顔だ。そんな大淀に中條元帥は、
「なぁに、『彼女たち』の言っていた『希望』、その姿を見てくるのだよ」
そんな風に少し茶目っ気をきかせながら答えたのだった。

～～～

「瑞鳳？」
「ごめん提督、今話しかけないで！」
訝しみながら再度声をかけると、いつもの穏やかな瑞鳳らしからぬ鋭い声が飛んで中條提督は慌てて口を紡ぐ。そして空中の航空機が高度を落とし、陸上に仮設された滑走路へと着陸する。
「……ふぅ」
すると瑞鳳は額の汗を拭いながら、大きく息を吐いた。そして慌てたように中條提督に振り返る。
「ごめんなさい提督、さっきは怒鳴っちゃって。
集中してたから手が離せなくって」
「それは構わないが……『アレ』はそこまでの難物なのか？」
中條提督の視線の先には今しがた着陸したばかりの航空機があった。それは轟天たちが〝土産〟と称して置いていったジェット艦上戦闘機『F―2　バンシー』である。中條提督の言葉に、持参した水筒でのどを潤しながら瑞鳳が答えた。
「うん、一瞬でも気を抜いたら失速して墜落しちゃうかもしれない」
「瑞鳳でもか……」
トラック泊地の航空戦力は瑞鳳、龍鳳、大鷹の３人だ。瑞鳳は榛名と並んでトラック泊地の中でも最古参の１人であり、このトラック泊地の空の守りである。零戦くらいなら目を瞑りながらでも発艦できるだろうほどの練度を誇る。そんな瑞鳳でもあの『バンシー』の扱いは難しいというのだ。
「噴式だから空母から飛ばすなら最低限飛行甲板の装甲化をしないといけないし、操縦も整備もかなり複雑。
ただそのかわり性能はすごいの！
速度が段違いだから一撃離脱戦法に徹したらたぶん零戦とか普通の機体じゃまるで歯が立たない。
その上、対地ロケットランチャーを搭載しての対地攻撃にまで参加できるの！」
興奮気味にまくしたてる瑞鳳に若干引きながらも、それほどまでの高性能なのだということが中條提督には理解できた。

「分かった。それでもう一つの方は？」
「うん、この子もすごいよ！」
そう言いながら、流れるように発艦作業を行うのは轟天たちの〝土産〟のもう一つ、レシプロ艦上攻撃機の『ＡＤ―１　スカイレイダー』だ。見慣れたプロペラを回転させて、勢いよく空へと舞い上がる。
「この子、なんと流星の４倍近いペイロードがあるの！」
「それは……ちょっとした戦略爆撃機並みだな」
「そう！　だから攻撃力満点！
爆弾だろうが魚雷だろうが搭載できる凄い子だよ！」
こちらもこちらで凄まじいものらしい。しばし中條提督は空を舞う『スカイレイダー』を目で追う。するとそんな中條提督の後ろから声が聞こえてきた。
「提督、提督！」
中條提督が振り返ってみると、それは秋月だった。何やら全力疾走でやってきたため肩で息をしながら呼吸を整えている。
「はい、秋月ちゃん」
「あ、ありがとうございます瑞鳳さん」
瑞鳳の差し出した水筒でのどを潤し、改めて秋月は中條提督の前に立った。
「提督に指示されていた『オート・メラーラ１２７ｍｍ単装速射砲』の試射試験が終わりました。
アレ、すごいですよ！」
そう興奮気味にその感想を語る。
「あの『オート・メラーラ１２７ｍｍ単装速射砲』、自動装填装置内蔵でもう物凄い速度での連射が可能でした。あれを対空戦闘で使えれば今まで以上の戦果は間違いなしです！」
防空戦闘を担当する秋月としては、驚異の連射速度を誇る『オート・メラーラ１２７ｍｍ単装速射砲』がずいぶんと気に入ったようだ。その感動を思うままに捲し立てる。
「わかった、わかったから落ち着いてくれ秋月」
「あ……すみません」

中條提督は少しばかりその勢いに引いてしまい秋月に抑えるように言うと、秋月は少し顔を赤らめながら姿勢を正す。
「とにかく、彼らからもらった兵装は、どれもこれも今までの装備とは一線を画すほどのものであることは間違いないんだな？」
「うん、実際に運用しようとするなら改修や整備なんかで結構大変だろうけど、性能が凄いって言うのは間違いないよ」
「私も瑞鳳さんと同感です。
今までの装備と違う特殊な使用感ですから相当に練習は必要でしょうが、これが装備できれば一気に戦力のアップが見込めます」
「そうか……」
その答えに頷きながら、中條提督は今更ながらことの重大さを思い知っていた。
これらの兵装はきっと、彼らの力のほんの一部にすぎない。特に彼女たちが目撃した、光線兵器を乱射し戦艦棲姫を無傷でいともたやすく葬ったという轟天の力は絶大なものだろう。彼らをなんとしても仲間に引き込まなければと決意を新たにする中條提督。と、そこに榛名がやってきた。
「提督、先ほど連絡がありました。
元帥閣下ですが、３日後にはこちらに到着の予定です」
「受け入れの準備を進めてくれ」
「それにしても……元帥閣下の動きはさすがに早いですね」
「父もことの重大さを認識しているのだろう。
こちらとしては彼らに対する認識が私と同じだったということはありがたい限りだね」
つまりは『絶対に味方に引き込みたい、敵にしてはいけない相手』という認識だ。中條提督の言葉にその力の一端を間近で見た榛名、瑞鳳、秋月もウンウンと頷く。
そこで榛名は思いだしたように言った。
「ところで……ご命令通りの電文を彼らに送りましたが……あの内容は一体？」
「それが分からない。

だが元帥(父)からくれぐれも、と念を押されてあの内容になった。
私もその意図は分からないのだが……」
そこで中條提督は一度言葉を切り、「これは私の勝手な想像なのだが……」と前置きしてから続ける。
「もしかしたら……父は彼の過去について何か知っているのかもしれない」
「……あの轟天さんの記憶喪失の件ですか？」
榛名の言葉に、中條提督はゆっくりと頷いた。その脳裏に最悪な想像――轟天の記憶喪失の原因がまさに日本海軍にある――がよぎる。もしそうだとしたら轟天は味方になってはくれまい、それどころか敵対する可能性も大だ。
「……とにかく、彼らの反応を待ってみよう。
さしあたって元帥閣下の受け入れ準備をしっかり頼むよ」
「「了解!!」」
中條提督はふと頭をよぎった不安を振り払うように頭を振り、軍帽を被りなおすと空を見上げた。トラックの空は今日も快晴だ。
「このまま暗雲などなければいいが……」
祈るように小さく呟くと、中條提督は執務室へと戻っていった。

～～～

何の気負いもなく進んでいく。
「羅號くん」
「あ、村雨さんこんにちは」
村雨に気付いた羅號がぺこりと頭を下げるとそれにならう様にラヴァーズの面々も頭を下げる。幾人かからは邪魔しないでとばかりに幾分棘のこもった視線を感じるが村雨は気にしない。
「羅號くん、轟くんが至急来てほしいって呼んでるわ。
日本との今後の件で話があるって」
「日本との件で？
あれは僕の存在を日本には極力隠すってことで兄さん主導で進める手筈でしょ。
何かあったんですか？」
「うーん、私も詳しい話はこれからなんだけど……どうも何かあったみたいなの」
「わかりました。すぐ行きます」
その言葉に不吉なものを感じた羅號はすぐに立ち上がる。しかし、それを見てすぐさま『ラヴァーズ』の面々からも声が上がった。
「私も行きます！」
「ろーちゃんもです！」
「リベも！」
「あ、暁もいくわ！」
「わ、私も……」
「……私も同行するわ」
次々に声が上がり、気がつけば8人という大所帯で轟天のいる執務室までやってきていた。
「……あのなぁ、ぞろぞろと執務室に討ち入りにでもきたのかお前らは。
まぁお前らは全員最古参、手間が省けていいんだが……」
それを見て呆れ気味の轟天。だがここにいるメンバーは『緯度０秘密基地』の存在を知っている、重要な最古参メンバーである。どうせ後から知らせることになるだろうし、と気を取り直して轟天は羅號を

見る。
「さて、実は今しがた日本海軍から俺たちと正式に交渉したいって連絡があった」
「早いね」
「しかも交渉に元帥まで引っ張り出してくれたらしい。元帥直々に俺たちと交渉するそうだ。
やっぱりあの提督は『当たり』だよ。
……とまぁ、全体的にはいい話だったんだが……羅號、ちょっとお前に確認しておきたいことができてな」
「何、兄さん？」
「お前……今まで日本海軍の偵察機や潜水艦に姿を見られたことあったか？」
少しだけ鋭い視線で羅號に問う。それを受けて羅號も真剣な表情でしばし考えるが、すぐに首を振った。
「ないよ。
レーダーやソナーには常に気を配っていた。存在を察知されるような位置に近付いたことはないよ。僕のレーダーやソナーを騙せるようなステルス性を持ってるなら話は別だけど、そんなの日本海軍にはないだろうし。
だから僕は今まで日本に姿を見られたなんてことはないはずだよ」
「……だよなぁ」
羅號が答えると、轟天の方も最初からそうだろうとは思っていたのだろう、やっぱりといった風に頷く。
「兄さん、それがどうしたの？」
「……実はさっき言ったように日本海軍から俺たちと交渉したいって連絡があったんだが……そこで『俺と同格のもう一隻も出席してほしい』って言ってきてるんだよ」
「「ッ!!?」」
その言葉に全員が息を呑んだ。
「最初はただのブラフかとも思ったんだが、『俺と同格のもう一隻』って数まで限定してきている。これは羅號、お前の存在を相手は知って

ると見た方がいいだろう。
で、お前が見られたわけじゃないとなると他の可能性は……」
「まさか……スパイ？」
村雨がそう言った瞬間、明らかに部屋の温度が下がった。その原因は羅號のそばの少女たちからである。彼女たちの目は冷たく、暗く、そして殺気に満ちている。
彼女たち『ラヴァーズ』にとって羅號は特別すぎる存在だ。そんな羅號に害を為した者には彼女たちは慈悲も容赦もない。もしスパイがいるのなら、すぐさまにでも彼女たちは『狩り』を始めるだろう。その本質は『狂信者』に近いものがある、と轟天は見ている。
そういった本質を羅號にだけはうまく隠して恋する乙女でいるのだから、女は怖いと轟天は心底思う。しかしこのまま放置すれば大変なことになりそうなので慌てて轟天は止めに入った。
「待て待て待て待て、俺もその可能性に思い至って妖精さんたちに確認をとった。外部に不審な電波が発信した形跡はあるか、ってな。結論は『そんなものはなかった』、だ。
それにスパイがいて俺たちの存在がとうに日本海軍に露呈してたんなら、何かしらのコンタクトがあっちからあったはずだ。だがそれもなかった。
だから『スパイがいる』って可能性は限りなく低いと俺は考えてる」
その話を聞いて『ラヴァーズ』の面々から殺気が引いていくのを感じて、轟天は心の中でホッと息をついた。
「でも兄さん。
見られたわけでもない、スパイでもないならどうやって僕の存在を知ったのさ？」
「そう、そこなんだよ羅號。
もしかしたら……『最初から知っていた』んじゃないかって話だ」
「それって……！」
「ああ、俺たちの無くした記憶のヒントかもしれないぞ」
驚きに息を呑む羅號に、轟天は静かに頷く。
「羅號、今度の交渉は向こうのご希望通りお前も来い。

……羅號が出る以上、どうせ着いて来たがるのは分かってるからお前らも来い。
こっちも全力で、向こうの真意を見極めてやる」
轟天の決意を含んだ言葉に、羅號は大きく頷いたのだった。

予言

「あれが件の艦隊か……」
「はい……」
今日は轟天たちE・D・F艦隊との交渉の日だ。中條元帥が双眼鏡でお気を眺めながら呟く。
「しかし……本当に轟天[彼]の同型艦がいるとは……」
隣で同じように双眼鏡をのぞく中條提督は、轟天と並んで航行する、同じように巨大なドリルを搭載するという非常識の塊を見て呻く。そして、隣の元帥を見ながら言った。
「何故、轟天[彼]の同型艦がいると知っていたのですか?」
E・D・F艦隊に交渉のための電文を送ったのは中條提督だ。その内容は元帥の命令によって『交渉にはもう一隻の同型艦も連れてこい』というような内容になったことに疑問は持っていたが、本当に同型艦はいた。ということは元帥は、やはり彼らのことを何かしら知っているということである。
「まさか……」
嫌な予感がした。
轟天は、自らは記憶を失っており、己の過去を知らないという。その原因が日本海軍の行った何かしらの人体実験の結果だとしたら……。
しかしそんな中條提督の心を読んだのか元帥は首を振る。
「あいにくと男性適合者を造るような研究も実験もやってはおらんよ。そんなことができるだけの余裕はない。
第一、彼らの生身の部分はいいとしてその艤装……あの明らかに我々の技術レベルを超越した武装についてはどう説明する?
あれだけのものが造れる技術があるのなら、とっくに量産体制に入っとるよ」
そう言われれば、確かに納得のできる話だ。しかし、やはり『なぜ元帥が轟天たちのことを知っているのか?』という疑問は残る。

「それはこの会談で話そう。心配しなくていい、別にやましい話ではない。
ただ、古い恩人に話を聞いた、というだけだ」
「はぁ……」
どこか遠い目をしながらそう言う元帥に、中條提督はあいまいな返事をすることしか出来なかった。

〜〜〜

「ええ。提督も元帥閣下もお待ちです。
案内しますのでどうぞ」
「了解。
俺の方は村雨に来てもらって残りは待機してもらうが……羅號、お前の方は全員は無理だ。
せめて半分に減らせ」
さすがに『ラヴァーズ』の面々全員で会議に出るのは無理だろう。その言葉で熾烈な椅子取りゲームが勃発するかもと言った後に密かに轟天は後悔したがしかし、すんなりと暁、山風、マックスが待機すると言いだした。どうやら彼女たちの中では彼女たちなりに順番というものが出来ているようである。なんだか弟周辺がどんどんと後宮とか大奥とかになっているような気がして轟天は短くため息をついた。
結局最初期のメンバー……轟天・羅號・村雨・朝潮・呂５００・リベッチオの６人で榛名の先導でトラック泊地を歩いていく。そんな中、世間話がわりにと轟天が口を開く。
「俺たちの『お土産』はどうだった？」
「ええ、さっそく試させてもらいました。
すごいですね、あの装備は。艦載機は２種類とも素晴らしい性能を発揮しましたし、あの高速連射が可能な速射砲、試射を担当した秋月ちゃんが是非とも自分に使わせてくれって言ってきかないんです。
……まぁ、過半以上の子たちにはそれよりも頂いた糧食の方を喜んでいましたが。
あの大量のチョコレートですが、全員に配り終えた後に残っていたものを巡って駆逐艦の子たちが争奪戦をやりまして……現在罰として泊地内を掃除中です」
「あはは、満足してもらえたようで何よりだ。
ただ、あれは喰いすぎると本気で太るぞ」
甘味はいつの時代でも人を狂わすらしい。特に轟天たちが贈ったのは軍用レーションに入れるチョコレートだ。それだけで一日分のカロリーを摂取でき、しかも味も悪くないというとんでもない代物で

ある。当然、喰いすぎれば一気に太る。
その言葉に、ビシリと榛名が固まった。どうやら彼女もチョコレートの魔力にはかなわなかったようで、この様子では結構な量を食べているようだ。
「……ま、まぁ艦娘なんて激務の連続だし、多少のカロリーなんてどうってことないんじゃないのか、うん！」
さすがに空気を読んだ轟天が言い訳じみたことをいうものの、榛名は肩を落としたままだ。
「うわぁ……女の子にカロリーの話なんて轟くんったらデリカシーがないんだから」
「しょうがないだろ、こんなことになるなんて思わなかったんだよ！」
からかうようにクスクスと笑う村雨へ轟天は言い返すものの空気は微妙なままだ。結局、その微妙な空気は払拭されることなく会議室へとたどり着いてしまう。
「元帥閣下、提督、お連れしました」
「うむ、入ってくれ」
部屋に入ると、そこに待っていたのは覇気に満ち溢れた６０ほどの歳の男だ。その目には力が溢れており、とても年齢を感じさせない。軍服にはいくつもの勲章が輝いており、彼の人生が戦いの連続であったことを物語っている。
轟天と羅號が一瞬気圧されるほどの覇気に、なるほど彼こそが日本海軍元帥であると理解する。同時に２人は心の中でホッと息をついた。懸念していたような、『老害』という要素が感じられないからだ。
「はじめまして、私は日本海軍元帥、中條信一という。こっちは私の秘書艦の大淀だ」
元帥が自己紹介をし、隣の大淀もペコリと頭を下げてくる。
「ご丁寧にどうも。
俺は海底軍艦『轟天』、そしてこっちが弟の羅號」
「はじめまして、海底軍艦の『羅號』です」
互いに自己紹介をすると、席について話が始まる。
まず、改めて轟天は自分たちが記憶を失っていること、『捨て艦戦

法』で見捨てられた艦娘を保護し仲間にしていること、そして妖精さんたちの助けで拠点を築き新型兵装を開発しながら生活していることを話す。そして自分たちの目的は『深海棲艦の殲滅』であり、そのために日本と接触したと語る。
「俺たちは仲間が不当な扱いを受けずに過ごせるための『立場』とその『保証』が欲しい。
もしそれを約束してくれるなら、俺たちの持つ技術の一部を提供し、戦力として俺たち自身を派遣する用意がある。もっともタダってわけにはいかないからそれなりの対価は支払ってもらう」
「……つまり『傭兵』のような感じで理解すればいいかね？」
「そういう理解でもいいが、俺たちE・D・F艦隊は一歩進んで『同盟』を日本と結びたいと思ってる」
轟天は『商品』を並べると、「さぁ、どうだ？」とでも言うように元帥を見た。
元帥は手元の書類を見ていたが、老眼鏡を外して一度目を瞑る。そして轟天をはっきりと見ながら言った。
「私としては今すぐにでも君らと『同盟』を結びたい。
しかし、だ……ことはそう簡単でもなくてな」
「つまり……僕たちが『怖い』ってことですか？」
羅號の言葉に元帥は「そういうことだ」と頷いた。
「これだけの技術力と戦力を持った集団だ、やはり無警戒というのは無理がある。
とはいえ、ここで君らと同盟を結ばないという選択肢は絶対に人類のためにはならない。
だからこそ、『妥協』がほしい」
「具体的にはどんな『妥協』が欲しいんだい？」
「そうさな……連絡員ということでこちらからの人員をそちらに送り込ませてほしい」
「俺たちの首に鈴をつけさせろ、ってことか？」
轟天はこの連絡員が自分たちの『監視役』だということにすぐに気付いた。

「あくまで建前上のことだ」
「……いいぜ。
ただし変なスパイ行為はなしにしてくれよ」
「そんなつまらんことで、この話をふいにするつもりはないよ」
轟天の言葉に肩を竦めながら応じる元帥。しばしの沈黙が訪れ、書記である大淀がペンを走らせる音だけが室内に響く。
ややあって、頃合いと見たのか轟天の雰囲気が変わった。それを感じ取って元帥は「いよいよか……」と心の中で襟を正す。
「……今、俺たちはそっちの頼みを聞いて1つ『妥協』したんだ。
だから1つ、『対価』を支払ってもらえないか？」
「わかっている。君らは何が欲しい？」
「……『情報』だ」
そして、轟天は元帥をまっすぐに見た。
「俺と羅號は始めに言ったように過去の記憶がない。俺たちはその手がかりを探してるが……今のところは何の手がかりもない。
でもあんた……俺たちのことを何か知ってるな？
羅號の姿は今のところ、日本海軍（あんたら）には見られていなかったはずだ。スパイの線も考えたが、それならもっと早くそっちからの接触がなきゃおかしい。
だから羅號の存在を日本海軍（あんたら）が知る手立てはなかったはずだ。なのにあんたはこの会談への招待状に『俺と同格のもう1隻も』って羅號を引きずり出した。最初はブラフの類とも思ったが、数まで限定してるのはおかしい。そうなれば……あんたは羅號の存在を知っていたとしか思えない。
教えてくれ、あんたは俺たちの知らない、俺たちの一体何を知っている？」
嘘は許さぬと言った、殺気すらこもる轟天の視線が、元帥の視線と交錯する。
「……確認だが、もし仮に君らが日本海軍（我々）のせいで記憶を失っていたとしたら、この『同盟』の話はどうなるかね？」
「……どうもしねぇよ。

『同盟』の話は俺と羅號だけじゃねぇ、『E・D・F艦隊』に所属する全員の今後に関する話だ。
だが記憶の件は俺と羅號の個人的な事情だ」
「しかし君が一言言えば、その個人的な事情で組織の行動を決定することも仲間は納得するのではないかね？」
「だとしても、そんなことはする気はさらさらないね。
一応、俺もE・D・F艦隊のリーダーを名乗ってる身だ。そんな個人的な事情で、仲間の未来を危険に晒すような真似ができるかよ。
もっとも、俺と羅號個人としては、あまりいい気がしないのは確かだろうがな」
「そうか……」
肩を竦める轟天に、元帥は小さく頷く。轟天という相手が単に戦闘能力が特出した個人ではなく、正しく集団のリーダーであるということが元帥には理解できた。
「で……それが答えなのか？」
「とんでもない。
元帥として誓って言うが、我々日本海軍では、新たに男性適合者を生み出すような研究は行っていない。
今の戦況だ、そんなリソースがあるのなら前線で戦っている艦娘のための追加武装や補給物資のためにつぎ込むよ。
それに君らの身体はいいとして、その艤装やそこに使われた技術の出所はどう説明するのかね？
それだけの兵装の開発が出来ていたのなら、とっくに量産体制に入ってもう少し戦況をマシなものにしとるよ」
そう元帥は肩を竦めながら答える。
一方の轟天と羅號も、元帥の説明は納得できる話だ。しかし、そうなると今度は元帥が2人のことを知っていたということが謎のままだ。
そして、答え合わせだというように元帥が語り始める。
「実は私も君ら2人のことは知らない。
ただ君らのことを知っているかもしれない者から話を聞いたにす

ぎんのだ。
ずっとずっと昔……私がまだ若かったときに『命の恩人』たちからな」
そして元帥はどこか遠い目をしながら昔語りを始める。
輸送船を襲われ海に投げ出されて死を覚悟したこと、しかし奇跡的に生き延びて『ある島』へと流れ着いたということをだ。
「私の流れ着いたその島は、『彼女たち』は『インファント島』と呼んでいた」
「『インファント島』？」
轟天はその名前を口にするとどういうわけだか、頭の中の『何か』が反応する。隣を見れば羅號も同じような顔をしていた。この『インファント島』という場所はやはり自分たちの記憶に何かしら関係があるようだ……そう思いながら轟天は先を促す。
「私も生きて戻ってから調べてみたが、そんな名前の島はどこにも存在しなかった。
無論だが、どこにあるのかもわからない。
だが……あの時の出来事は、『彼女たち』の存在は本物だった……」
「さっきから、あんたを助けた『彼女たち』っていうのは誰なんだよ？」
「『彼女たち』とは、この世界に生きるものなら誰もが知っている存在……『はじまりの妖精』のことだよ」
その言葉に、会議室内の全員が息を呑んだ。
およそ１００年前、深海棲艦出現と同時に現れて人類を助けたという伝説の存在である『はじまりの妖精』……彼女たちに会ったというのである。この話を元帥が語るのは初めてらしい。息子であるはずの中條提督も、そして側近として長く仕えた大淀ですら目を丸くしている。
「私は彼女たちが『はじまりの妖精』なのだと気付いたとき、その場で頼み込んだ。
もう一度人類とともに深海棲艦の脅威と戦ってくれ……とな」
「……今現在、その『はじまりの妖精』が一緒に戦ってくれてないところをみると、共闘は断られたのか？」

「結果的には、な。
だが、そこで彼女たちから語られた内容は想像だにしないものだった……」
元帥はゆっくりと、そのときに『はじまりの妖精』に語られたことを話す。
深海棲艦は真の絶望ではない、それよりもなお強大な『真の絶望』は別に存在する。『はじまりの妖精』はおよそ１００年前のその時に『真の絶望』の方を封印、封印が解かれるときに備えて傷を癒し力を蓄えているので今は人類とともに戦うことができない……と、その時に『はじまりの妖精』に語られた内容を話す。
「１００年前に突如として『はじまりの妖精』が姿を消したのはそういう理由か……しかし……深海棲艦よりも強大な『真の絶望』……」
今でも研究者の間で様々な憶測を呼んでいた『はじまりの妖精』が姿を消した理由を、そして『はじまりの妖精』によって示唆された深海棲艦を凌駕する脅威の存在を知って提督は息を呑む。
その場にいたほとんどの人間に、重いものが圧し掛かっていた。その名は『絶望』だ。
深海棲艦の侵攻という現状で、人類はすでに版図の3分の2を失っている。その深海棲艦よりも強大な敵……そんなものが現れたら今度こそ人類は『絶滅』する。
しかし……そんな空気に頷いた元帥は先を続けた。
「若かった私も、あまりの絶望に目の前が真っ暗になったよ。
だが……『はじまりの妖精』が教えてくれたのは絶望だけではなかった。同時に『希望』が存在することも教えてくれたのだ」
『はじまりの妖精』は、『絶望』に対抗するために人類の前に『２つの希望』が現れる。その時には再び『はじまりの妖精』も人類の前に現れて力を貸す、という言葉を残したと伝えた。
「その後、気がつけば私は本土近海の島の浜辺で倒れておった。まるですべてが夢だったようにな。
しかし、あの出来事は本物だ。その証拠に……」
そして元帥は懐から木箱を取りだした。開けてみるとそこには『太

陽をかたどったような円と射線、そしてそれを四分する十字の溝の入った石』が入っている。
「これがポケットに入っていた。これは『はじまりの妖精』の紋章、私にとっての一生のお守りだよ。
私はその言葉を、『２つの希望』が現れるということを信じて今まで戦い続け、この元帥という地位にまで上り詰めた。
そして……」
そこで一度言葉をきると、元帥は轟天と羅號を見ながら言った。
「こうして私は今、『２つの希望』へと巡りあえたというわけだ」
「……俺たちが『はじまりの妖精』が言っていた、『２つの希望』だと？」
「少なくとも、私はそうではないかと思っておるよ」
そう言って元帥は言葉を締めくくる。
元帥の話を聞いて轟天は考えていた。元帥の話で、『何故自分たちを知っているのか？』という疑問は氷解した。自分たちの記憶の答えを知っていたわけではないが、重大な進展である。
その時、轟天と同じく何かを考えていた羅號が声を上げた。
「僕たちがその話の通り、その『２つの希望』だとしたらだけど、『２つの希望』は『真の絶望』に対抗するために現れるんでしょ？
じゃあ、もうその『真の絶望』っていうのは姿を現したの？」
「いや、まだそれらしいものは確認できていない。
しかし……その前兆ではないかという『異常』をここ、トラック泊地から報告を受けた。
大淀くん」
「はい」
元帥が大淀に合図すると、その資料を配っていく。
それはトラック泊地から夜間偵察任務に出て行方不明になった駆逐艦娘の遺体の資料だ。
「この近辺では複数の泊地で協力して、敵泊地攻略戦を予定している。
そのための準備として夜間偵察任務に出た駆逐隊なのだが……ご覧の状態だ。

だがこの遺体の特徴は、どうしても既存の深海棲艦の攻撃とは合致しない」
「……確かに深海棲艦にやられたにしてはおかしな遺体だ」
「杞憂であればいいが……しかしどうしても悪い予感がする。
そこで1つ、日本海軍元帥から君らに依頼したい。
２０日後に予定されている敵泊地攻略戦に君らも参加してほしい。
君らという存在のお披露目と……最悪の場合に現れる、『真の絶望』への対策としてだ。
頼めないかね？」
「……羅號、いいか？」
「兄さんの決定に従うよ」
「……わかった」
唯一艦隊で序列が互角ともいえる羅號に確認をとると、轟天は答える。
「了解した。
俺たちE・D・F艦隊は要請に従い、日本海軍の敵泊地攻略戦を支援する」
こうしてE・D・F艦隊の日本との『同盟』の第一歩、敵泊地攻略戦への参加が決定したのだった。

～～～

今日も今日とて轟天と一緒に眠るためにやってきた村雨だが、さすがに人の基地でコレは知られたらマズいと轟天は渋い顔をする。しかし事情も誰よりも深く知っているため無下にも出来ず、しばらく後には押し切られた轟天はいつものように村雨と一緒にベッドに入っていた。
「しっかし……今日はいろいろあったな」
「ホントよね。　まさかここで『はじまりの妖精』なんて言葉を聞くことになるなんて思わなかったわ」
２人は口々に今日の出来事を語る。
「でも……よかったね、轟くん。記憶の手がかりが見つかって。『はじまりの妖精』に会えれば、きっと轟くんの記憶について何か分かるよ」
『はじまりの妖精』の言葉通り轟天と羅號が『２つの希望』だというのなら、『はじまりの妖精』たちは轟天と羅號のことを何か知っているのだろう。そして、『はじまりの妖精』は『２つの希望』が人類と戦っていれば合流する、という内容の言葉を残している。つまりこのままいれば、いつか『はじまりの妖精』は合流してきて話が聞けるということだ。
しかし、轟天はそれを素直に喜べない。
「あのなぁ……その変わり『真の絶望』とかいう強敵の出現だぞ。そりゃ本気でヤバいだろ？」
「それは……」
ただでさえ深海棲艦相手に追い詰められている人類に、さらに敵が増えるなど悪夢でしかない。それが分かって村雨は口ごもる。
「まぁそういうわけで、俺としては今回の件は元帥のじいさんのただの妄想だって、嘘でもいいから思いたいところだな。それに……だ」
そして轟天は部屋の天井を眺めながら苦笑する。
「この俺が『希望』、ねぇ……正直そんな御大層なもんとは思えないんだがな」
「まぁ確かに。

轟くんってば案外適当でがさつでぐーたらで、戦い以外ではダメ人間の見本市みたいな人だし」
「アハハハハ……少しぐらい手加減して言わねぇと優しい俺でも怒るぞオマエ」
「でもね……」
すると村雨の雰囲気が先ほどまでとはガラリと変わった。驚いて轟天が村雨の顔を見ると、村雨は微笑みながら両手で轟天の頬を挟み、顔を固定して真っ直ぐに轟天を見つめている。
そしてゆっくりと言った。
「あの死を覚悟した瞬間、絶望で目を瞑った私を轟くんは救い上げてくれた。
神様も仏様もいない、祈りなんてどこにも届かない、そんな真っ暗な絶望の海で、私を轟くんは救い上げてくれた。
他の人がどう思うかなんて知らないし関係ないけど……私にとって轟くんは何よりも眩しい『希望』だよ」
そんなことを面と向かって言われては轟天も気恥ずかしい。
「な、なに言ってんだよお前」
「あはは。
轟くんには感謝してるよ自信持って話なんだけど……なんか改めて言うと物凄く恥ずかしいね、これ！」
顔を赤くした轟天が村雨の手を払ってプイッと顔を背けると、村雨もつられるように顔を赤くして、ごまかすように照れ笑いする。
「まったく……ほれ、明日も早いぞ。さっさと寝ろよ。
そうだ、せっかくだし寝るまで『はじまりの妖精』の話でもしてくれよ」
「今日の千一夜物語（アラビアンナイト）のネタは決まりね」
「……くれぐれも変な着色するなよ」
「了解了解、スタンバイＯＫよ。
この村雨にお任せ！」
そしてゆっくりと、絵本で語られる『はじまりの妖精』の物語を語っていく村雨。

トラック泊地の夜はゆっくりとふけていった……。

出現

南方戦線の各艦隊が集結し大海原を駆けていく。その大艦隊の向かう先は敵深海棲艦泊地である。

実はこの敵泊地はかなり規模が大きく、今までに2度の攻略作戦が発令されたものの攻略は失敗に終わっていた。3度目の正直ともいうが、大型艦娘には「今度こそ！」という強い気概と高い士気が見て取れる。だがそれとは逆に一部……駆逐艦娘や軽巡艦娘、そして外国人艦娘の一部からは諦めや達観、さらには恐怖が色濃く感じられ、士気の落差があまりにも大きすぎるのが印象的だ。

そんな艦隊の一部に、見慣れない集団の姿がある。見たこともない艤装を装備する一団、その先頭には旗艦なのだろう、巨大なドリルを装備した『男』の艦娘――『艦息』が2人。そんな姿は嫌でも注目の的だ。

当然、そこかしこで言葉が飛び交った。「あれはなんだ？」「どこの所属だ？」「我が軍は男性用の艤装を開発したのか？」だの艦娘たちはひそひそと口々に語り合う。

そんな艦娘たちに各々の指揮官たる提督は通信で「元帥閣下直属の秘匿艦隊である」とだけ説明した。それ以上に説明のしようがない。何故なら、提督たちですらそれ以上の説明は受けておらず、詳細はこの作戦後とされてしまったからだ。そのため、各々の提督たちですらその秘匿艦隊へと注目している。

そんな中、全艦隊に対してその秘匿艦隊から通信が入った。

『こちらE・D・F艦隊旗艦『轟天』だ。

こちらのレーダーで敵航空隊を補足した。三時方向から距離は450km、敵機数は480機。

警戒されたし』

深海棲艦の正規空母ヲ級であるなら6隻分、空母棲姫級なら4隻分が全力出撃をしたほどの膨大な数である。艦隊の直衛を空にするということは考えられないので、実際にはもっと敵空母は多いだろう。

そんな大編隊が接近中だというのだ。
しかし、その警告に各艦隊は懐疑的だった。そもそも４５０ｋｍという超長距離を探知できる電探など日本海軍どころか世界中を探したって存在するはずがない。それに敵機数が正確に分かるというのも無理な話だ。すぐさま各艦隊から「誤報ではないか？」との問い合わせがＥ・Ｄ・Ｆ艦隊へと入るものの、轟天からの回答は同じだった。
『誤報じゃない、事実だ。
信じる信じないはそっちの勝手だが、対空戦闘の準備を強く勧めるぞ。
それにまだ接敵までは十分な時間があるはずだ。こっちの言葉が信じられないのなら、偵察機でも飛ばして確認してみてくれ』
それもそうだと、首を傾げながらも何隻かの用心深い空母艦娘から偵察のための彩雲が発艦していく。そしてしばしの後、その偵察の彩雲が迫る敵の大航空隊の姿を確認することになった。
敵が確認されると各艦隊は大騒ぎだ。自らの知る知識と常識に照らし合わせ轟天の忠告をただの誤報と決めてかかっていたためである。轟天の忠告通りに対空戦闘の準備を完全に整えていたのはＥ・Ｄ・Ｆ艦隊の異常性をよく知る榛名率いるトラック泊地艦隊と、特に用心深かった少数の艦娘だけだ。
そんな状況の中で、Ｅ・Ｄ・Ｆ艦隊から再び通信が入る。
『こちらＥ・Ｄ・Ｆ艦隊、これより艦隊防空のために隊列を離脱。
敵航空機群の迎撃に向かう』
それだけ通信してくるとＥ・Ｄ・Ｆ艦隊は敵航空機隊がやってくるだろう３時方向へと、艦隊の盾になるように移動した。
すべての艦隊が何をするのかと注意深く見守る中、Ｅ・Ｄ・Ｆ艦隊が動く。Ｅ・Ｄ・Ｆ艦隊の駆逐艦級と思われる艦娘たちから、白煙を上げながら何かが打ち上げられていく。それは噴進弾だ。それを見た艦娘たちは揃って首を傾げる。
確かに噴進弾は対空兵装ではあるものの、敵の姿も見えていないときに打ち上げて何の意味があるのか？
しかしその疑問はすぐに驚愕に塗りつぶされる。発射された噴進

弾が空中で曲がり、大空の彼方へと飛んでいく。そして異変は偵察中の彩雲から知らされた。
敵航空機隊の進行方向……つまり艦隊側から飛来した噴進弾のようなものによって敵航空機隊が次々と撃墜されているという報告だ。その噴進弾はどう考えてもE・D・F艦隊から発せられたものだろう。一体どうしたらそんな遠距離の、しかも小型・高速の航空機に直撃できるのか全く理解できない。しかし衝撃はそれだけでは終わらなかった。
今度はE・D・F艦隊所属の空母――おそらく『アクィラ』と思われる――から次々と艦載機が発艦していく。その艦載機はすべて見たことのない噴式のタイプだ。それが凄まじい速度で発艦していく。そして再び偵察中の彩雲からの驚きの報告。先ほどの噴式艦載機が敵航空機隊と交戦状態に入ったが、敵をどこまでも追いかける噴進弾とその速度を武器に敵航空機隊を圧倒しているというのだ。どれもこれもにわかには信じられない報告である。敵航空機隊の目にはまるで『死神』のように映っただろうことは想像に難くない。
これらの『死神』たちによって敵航空機隊はその数を半数以下にまで減らしていた。しかしそれでも２００機を超える数だ。敵航空機隊はその数を頼みにそのまま艦隊へと突き進む。そして艦隊の視認できる距離にまで迫った時……彼らに最後の、そして最強の『死神』がその鎌を無慈悲に振り下ろした。
『弾種対空榴弾、主砲発射!!』
『各対空メーサー、自由射撃開始!!』
２隻のドリル戦艦たち、その艤装が火を吹いた。
片方……大和型戦艦を容易く超えるような大型４連装砲を３基も積んだ戦艦の主砲が火を吹き、装填された榴弾が空を行く敵機を叩き落としていく。それは三式弾を用いた戦艦の対空戦闘と同じだが、密度と正確性の桁が違う。あれだけの巨砲だというのに砲が『連続』して放たれているのだ。しかも的確に敵の密集地で炸裂している。
そしてもう片方……これはもう、目の前の光景が理解不能の領域だった。ドリル戦艦から放たれた幾条もの光線が、まるでキャンバス

に筆を走らせるかのように大空をなぞる。そしてその光線の通った後には敵機の爆発だけが、まるで大空のキャンバスに描いた大輪の花のように広がっては消えていく。
　明らかに異常すぎる目の前の光景に、それを見ていた艦娘たちが我に返ったのは敵機がすべて叩き落とされ、その轟天から通信が入ってからだった。
『敵航空機隊は全滅させた。
　で、敵艦隊もこっちで潰して構わないかい？』
　その言葉に艦隊の全員がハッと正気に戻る。Ｅ・Ｄ・Ｆ艦隊ばかりにやらせてはおけぬと、各空母艦娘たちから艦載機が発艦していき、他の艦娘たちも針路を変え、敵艦隊の迎撃に向かう。
　航空機のほとんどを消失し、完全に制空権を失ってしまっていた敵大規模艦隊が撃滅されたのはそれからしばらく後のことだった。

～～～

インパクトは十分だろう？」
そう、先ほどの戦闘は他の提督や艦娘たちに侮られないようにこちらの力の一端を見せるためのものだったのだ。村雨は苦笑して、肩を竦めながら言う。
「十分だと思うよ。
むしろちょっとやり過ぎなくらい」
そう言って辺りを見渡すと他の艦隊からの強い視線を感じる。その視線には侮りなどみじんも感じ取れないのだが、その変わりに『恐怖』や『警戒』といったものが感じ取れってしまいあまり気分のいいものではない。そう伝えると「まぁ、確かに」と轟天は苦笑した。
そんな轟天に苦笑を返しながら、村雨は心の中で改めて轟天たちの異常性を思う。
（久しぶりに轟くんたちと一緒に戦闘したけど……相変わらず轟くんと羅號くんは無茶苦茶なんだけど、確かに『おかしい』のよね……）
そして、村雨は彼女との会話を思い出していた。

―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―

「うーん、やっぱりおかしいかも」
ラゴス島秘密基地の工廠施設、村雨の艤装を整備しながらそうポツリと言ったのはこの工廠の主となっている水上機母艦『秋津洲』である。
日本艦娘であり比較的大型艦でかなり珍しいはずの『秋津洲』なのだが、その戦闘能力は低い。そのせいで駆逐艦娘などと同様に囮とされてしまったところをE・D・F艦隊が保護して仲間にしたのだ。そのためE・D・F艦隊の日本艦娘の中で唯一、駆逐・軽巡といった小型艦ではない艦娘となっている。
彼女は確かに直接的な戦闘能力は低かった。しかし偵察能力、そして工作艦を経験したという艤装の経歴のためか機械整備に関して大きな適正があったのである。それ以降、秋津洲はラゴス島秘密基地の工廠で整備を担当することになったのだ。

「えっ、私の艤装どこか問題があるんですか？」
戦場で自分の命を預ける艤装をいじりながら『おかしい』と言われてはたまらない。慌てて尋ねる村雨だが、秋津洲は「違う違い」と首を振った
「村雨の艤装にはどこにも問題はないかも。
ただ……みんなの艤装をいじればいじるほど、司令と副司令の艤装が『おかしい』って思っちゃうかも」
とりあえず自分の艤装には問題ないと言われてホッと胸をなでおろすものの、今度は轟天たちの艤装が『おかしい』と言われれば気にならないはずもない。
「でも轟くんたち、艤装がおかしくなるようなダメージなんて受けたことないはずですけど……」
「そういう機能に問題が出たって意味じゃなくて、うーん……『構成がおかしい』ってことかも」
「『構成がおかしい』、ですか？」
首を傾げて聞き返す村雨に、秋津洲は整備の作業を終え、お茶を一杯入れながら話を続ける。
「例えば村雨の場合……対艦に対艦誘導噴進弾（ミサイル）、対空に自動迎撃機銃に対空誘導噴進弾（ミサイル）、対潜には誘導魚雷やアスロック。それに対艦・対空に使えるオート・メラーラ１２７ｍｍ単装速射砲、どれもこれも用途がはっきりしてるかも。
でも例えば司令の場合、対空・対艦・対潜すべてに対して使える全環境対応型徹甲誘導噴進弾（フルメタルミサイル）なんだけど……戦艦を一撃で沈めるような火力、対空で戦闘機に叩きつけて意味がある？　潜水艦に叩き込んで意味がある？　過剰すぎて無駄なだけかも。
だったら村雨たちみたいに用途別の装備を積んだ方が無駄が無くていいかも。
司令と副司令の艤装はそんな風に、『すごいんだけど無駄が多すぎ』な艤装なの」
言われて見れば確かに、と思う。

以前村雨は轟天と一緒に出撃したときに敵の艦載機の襲撃を受けたことがあった。そのとき轟天はメーサービームで敵機を全機撃墜していた。敵航空機隊全機撃墜の挙句相手の撃った砲弾すら完全に迎撃し、敵戦艦の装甲をバターのように溶かして爆沈させるメーサービームは確かにすごいのだが、村雨と同じように対空ミサイルがあればもっと早期に、もっと言えば敵機を視認する前に迎撃できたはずなのだ。それらを装備していない理由が分からない。

「兵器開発って基本、『無駄のない必要最小限』を追及するかも。持ち運べる量には限界があるから、できるだけ無駄なくコンパクトにって考えが当然あるの。

あの有名な４６ｃｍ砲だって、パナマ運河を使える最大の大きさの艦とそれに積める最大砲口径を計算して、それに勝る長射程を割り出した『無駄のない必要最小限』の産物。別に何の目的もなくあんな大きくなったんじゃなくて、『必要最小限』があれだったって話なんだよ。

でも司令と副司令の兵装はもう何もかもが威力過剰すぎて、何の必要最小限を狙ったのかわからない。だからまとめると『構成がおかしい』って言葉になるかも」

「なるほど……」

淹れてもらったお茶に口を付け、村雨が頷く。そして、しばらくしてから秋津洲がポツリと言った。

「ただ、もしかしたら……もしかしたらだけど……」

―・―・―・―・―・―・―・―・―・―

「あれが何か、『自分たちの知らない何かのための必要最小限』なのかも……か……」

「ん？　なんか言ったか？」

「ううん、何でもない」

村雨は不吉な予感を首を振って切り捨てると、残弾の確認作業に入る。

しかしその時すでに、轟天と羅號の立ち向かうべき『何か』との邂逅は間近に迫っていた。

～～～

深海棲艦の数は多い。だから絶対に艦娘にも戦ってもらわないとならない。
でも俺たちがあんまりでしゃばり過ぎてたら、「もうあいつらだけでいいんじゃないか？」なんて考え始めて、しまいには全部俺たちに丸投げだ。それじゃ日本に接触した意味が無くなっちまうよ。
それに突然現れた傭兵みたいな連中に手柄を全部掻っ攫われたら、今まで必死で戦ってきた艦娘や提督たちとしては面白いわけがない。そう考えて元帥は俺たちに下がってくれって言ってきたんだろう」
轟天の考えはまさに正鵠を射ていた。轟天は羅號の肩をポンと叩きながら言う。
「『過ぎたるは猶及ばざるが如し』、ってな。
俺たちを侮らせないように力は見せた。敵の精鋭部隊も叩き潰して泊地攻略戦にも十分に貢献した。
俺たちはやるべきことは十分に果たしたよ。
ここは日本海軍（あちらさん）の言う通りにしろ」
「それは分かってるけど……目の前で味方が命がけで戦ってるんだよ。沈む艦娘だっている。
それが助けられるかもしれないのにここでジッとしてるなんて……」
ここに来るまでに見てきた、あまりに士気の低かった駆逐艦娘たち。あの『恐怖』や『諦め』の見える感じだと、『弾除け』として連れてこられたのかもしれない。それを何となく察したからこそ、羅號は彼女たちを見捨てられないと前線行きを希望する。その後ろでは、自分と同じような境遇で同情もあるだろうが何より羅號の意見だということか、『ラヴァーズ』の面々も同意するように頷いている。しかし轟天はにべもない。
「抑えろ。　それで祈れ。
その娘らの提督が、ヤバくなったらその娘らを弾除けに使う前に俺たちに救援要請してくるまともな提督だってな。
今の俺たちにできるのはそれぐらいだよ」
「……わかったよ」

言って羅號は轟天から離れ『ラヴァーズ』の元へと行くが、納得していないのはその様子から明白だ。
轟天はフゥっと息をつくと、隣の村雨に話しかける。
「やれやれ、羅號には恨まれちまったかね。
……なぁ、俺は冷たいやつかね？」
その問いかけに村雨は首を振る。
「私だって轟くんに助けられた身の上だし、同じような境遇の娘を助けられるなら助けてあげたいけど……それをやり始めたら際限が無くなっちゃうわ。
それにそれが出来たとしても、今後の私たちのことを考えればデメリットが大きい……」
「だよなぁ……」
轟天は大きくため息をついた。
轟天としても助けられるものは助けたいが、それで日本側からでしゃばり過ぎだと反感を買ってしまえばE・D・F艦隊全体に危険が及ぶかもしれない。そう考えれば一応なりとE・D・F艦隊のリーダーである轟天は軽率な行動はとれなかった。
それも仕方ない。人は物事に優先順位を付けて生きている。轟天にとって顔も知らない他人の命は、仲間の安全より上にはならなかったというだけである。そのあたりの轟天の苦い心情は、村雨にはよく理解できた。
「大丈夫、私は轟くんの気持ちは分かってるから」
「そう言ってもらえりゃ、嬉しいもんだ」
村雨が慰めるように轟天の手を取ると、轟天は照れたように苦笑する。
その時だ。
ドクン！　ドクン!!　ドクン!!!
「ぐぅっ!?」
!?　轟くん!?」

突如として轟天が胸を押さえながらうずくまる。何事かと村雨が近付くが、その時悲鳴のような声が聞こえた。
「らーくん！　らーくん!?」
「羅號、どうしたんですか!?　羅號!!」
村雨が視線を巡らせてみれば、轟天と同じように羅號も胸を押さえながらうずくまっており、異変に気付いた『ラヴァーズ』の面々から悲鳴のような声が聞こえる。
「轟くん、どうしたの轟くん!?」
「だい……じょうぶ……だ」
どうしていいのか分からず船酔いの対処のように背中をさする村雨に答え、轟天は立ち上がった。
「轟く……ん……!?」
心配そうに轟天の顔を覗き込んだ村雨は、もう少しで悲鳴を上げるところだった。覗き込んだそこには、触れたら倒れそうなレベルの濃厚な殺気を漂わせた轟天がいたからだ。
「……どうした？」
「あの……大丈夫、なの？」
いろいろな意味を込めた言葉を何とか村雨が絞り出すと、轟天は何でもないように答える。
「ああ、別に胸が痛いわけじゃない。
ただ……どうしようもなく血がたぎってるだけだ」
「それってどういう……」
「兄さん……」
轟天の言葉を聞き返そうとした村雨だが、その言葉は途中で遮られた。そしてその声の方を見れば……日頃の温厚な面影など微塵も残っていない、轟天と同じく殺気を漂わせる羅號の姿があったのだ。見れば『ラヴァーズ』の面々も羅號の変化に驚きが隠せないらしく、村雨と同じような顔をしている。
「分かってる……。
何にも思いださねぇが、艤装が、血が、魂が！　絶対にブチ殺さなきゃならない連中がいるって叫んでる!!

行くぞ、羅號!!」
「うん!!」
言うが早いか、2人の機関が唸りを上げ始めた。それを見て、慌てて村雨は声を上げる。
「ちょ、ちょっと！　元帥からの待機してくれって話は!?」
「そんなもん無視だ無視!!
海底軍艦『轟天』、出撃する!!」
「海底軍艦『羅號』、出撃するよ!!」
そして2人は機関を全開にすると海域へと突入していく。
残されたE・D・F艦隊、そして村雨は混乱の極みだ。つい直前まで轟天と村雨は、日本海軍の要望通りに待機することについて話をしていて、それが最善だと結論を出していた。だというのに突然、凶悪な殺気をまき散らしながら日本海軍の要望を無視して戦闘海域に突入していったのだ。はたから見ていたら乱心したと思われても仕方ない急変である。
「村雨秘書艦！」
「村雨、どうすればいい!?」
不知火と叢雲が自分を呼ぶ声にはたと周囲を見ると、全員の視線が村雨に集中していた。あの『ラヴァーズ』の面々ですら羅號の急変に混乱しているらしく、指示が欲しいと目で訴えている。
村雨だって本音を言えば混乱の極みだ。しかし司令と副司令がいない今、秘書艦として決断を迫られた村雨はその指示を出す。
「E・D・F艦隊、全艦前進！
速度、最大戦速！　全武装、使用自由！
司令と副司令を追うわ!!」
「「了解!!」」
村雨率いるE・D・F艦隊も轟天と羅號に続いて戦闘海域に突入していった。途端に、無線がにわかに騒がしくなり始める。
『どうし……あれ……!』
『潜水……ちが……!』

『はさ……で……がちぎれ……！』
『砲が……きかな……!!』
『化け……逃げ……！』

「……何なの、これ？」
無線からはノイズでしっかりと聞きとれないが、ひどく混乱しているのは分かる。間違いなく、この先では普通ではない『何か』が起こっている。
そして……ついにその場所へとたどり着く。
「あれは……何？」
そこはまさに地獄絵図だった。そこかしこで『艦娘だったもの』が海面に漂う血の海だ。その遺体も鋭利な刃物で切り裂かれたような傷を負っている。
そして……今、現在進行形でその地獄の光景を作り出している元凶がそこにはいた。
それは巨大なエビだった。両手は巨大なハサミになっており、ロブスターかザリガニかといった姿である。その巨大エビのハサミに戦艦の艦娘が1人捕まっている。
そして……。

バチンっ!!

そのハサミによってまた地獄絵図に遺体が数を増やす。強固なはずの戦艦の装甲すら両断する、凄まじい切れ味のハサミだ。
「この化け物め!!」
艦娘たちは必死に手にした砲を放つが、甲殻類特有の甲羅を貫くことができない。生物の常識ではありえない、まったく未知なる存在だ。
その脅威に村雨たちが固まっていると、先に到着していた轟天と羅號の声が海域に響いた。
「あ、あはははははは!!

出たな、出やがったな……『怪獣』!!!」
「何も思いだせないけど……でもこの艤装が、魂がお前たち『怪獣』を倒せと叫んでいる!!」
「対怪獣戦、全システムフル稼働!!」
「飛行システム起動！　離水開始!!」
すると全員の目の前で、またも驚きの出来事が起こる。なんと轟天と羅號の身体が海面を離れて浮き上がり、完全に空中へと浮かび上がったのだ。
戦艦が飛行するという驚天動地の光景に誰もが呆気にとられるが、とうの轟天と羅號はそんな周囲の状況など気にもせず、目の前の未知の脅威……『怪獣』だけを捉えている。
「敵怪獣確認!!」
「目標怪獣、『エビラ』!!」
「「殲滅を開始する!!」」
轟天と羅號が、エビラへと襲い掛かった。

怪獣

重力制御による飛行システムを起動させた轟天と羅號。その巨体が宙を浮き、巨大なエビ型怪獣『エビラ』へと飛び掛かっていく。

周りの人間には、何が何だかわからない。

あの未知の化け物は何なのか？

轟天と羅號のような巨大戦艦が何故空を飛べるのか？

それはもう混乱の極みだ。

しかし、実を言うなら同じくらい轟天と羅號も心の奥底では混乱していたのだ。何故なら本人たちですら『飛行・潜水能力』という機能の存在を、今この瞬間まで知らなかったのだ。しかしこの敵……『怪獣』の存在を感じ取った瞬間から、まるでそれが当然のことであったかのように身体が動いたのである。

考えるべきことはいくらでもある。しかしそれ以上に目の前の『怪獣』の存在を許してはならぬという、使命感と焦燥感の入り混じったものに熱狂を混ぜ込んだような奇妙な感情が湧き上がる。

その感情のままに、轟天と羅號は『エビラ』との戦闘に突入した。

「各メーサー砲座、集中砲火!!」

「弾種Ａ対怪獣Ｋ弾！　全砲門、攻撃開始!!」

轟天から高出力メーサービームが飛び出し、羅號の砲から轟音とともに砲弾が発射される。巨大な怪獣が目標だ、それぞれが直撃し爆発が巻き起こる。

しかし……戦艦水鬼級の装甲ですら飴細工のように溶断する轟天のメーサービームが、同じく戦艦水鬼級の装甲を容易く貫徹する羅號の砲が直撃したというのに目標は健在、それどころか目立った損傷すら皆無だったのである。

キュイイイン!!

だが完全に無傷というわけでもないようだ。苦悶の声なのか怒りの声なのか分からないが、雄たけびをあげながらハサミを振り上げ、

海面から飛びあがるようにしてジャンプで空中の轟天と羅號に迫る。
しかしその攻撃をヒラリとかわした轟天と羅號は、再びエビラに攻撃をかける。

キュイイイ！

遠距離攻撃のすべを持たないエビラは苦悶の声を上げるばかりだ。
「よし、野郎をこのままエビフライにしてやれ！」
「あんまりエビは好きじゃないんだけど、ね！」
軽口を叩きながらも火力を集中させる轟天と羅號。するとエビラは潜航の体勢に入る。ここで逃せば、これからも艦娘や人類に甚大な被害が出ることは確実だ。
「逃がすか！　羅號、潜航モードで追うぞ!!
確実に、やつを仕留める！」
「わかってる！」
その言葉とともに轟天と羅號が海面へ向けて降下を始めた、その時。
「ッ!!?」
何かに気付いた轟天が、慌てたように自らの装甲を盾にする。

ギィン!!

金属同士がかち合うような甲高い音が響いた。見れば、戦艦級深海棲艦の砲の直撃を受けても傷一つつかなかった轟天の装甲に真一文字に傷が入っている。
視線を巡らせればその下手人はすぐにわかった。何故なら……あまりにも巨大だったからだ。
それは巨大なカマキリとしか言いようのない代物だった。背中の羽根で飛行しながら、その両手の鎌を研ぐかのようにこすり合わせている。間違いなく常識では考えられない巨大生命体……『怪獣』だ。
その怪獣を見つめながら轟天が言った。

「怪獣『カマキラス』を確認……どおりでエビラだけにしちゃ死体の数が多いはずだぜ。
しっかし……直前までレーダーにも確認できなかったのは何でだ？」
その答えはすぐに判明する。空を舞っていたカマキラスは轟天たちの目の前で姿がぼやけていくと、やがて空の青に溶けるように姿が消えるとレーダーからも反応が消える。
「光学迷彩かよ……しかもレーダーからも完全に消えてやがる……」
「兄さん、どうする!?」
羅號の言葉に轟天は一瞬だけ思考を巡らせるが、即座に決断を下す。
「羅號はそのままエビラを追え！
カマキラスは俺がやる！」
「了解！」
そう答えると、羅號はエビラを追って空中からそのまま海中へと飛び込み姿を消した。残ったのは辺りへと最大級の警戒を行う轟天と、混乱しきった艦隊だけだ。
そんな艦隊へと、轟天は怒鳴るように指示をとばす。
「全員今すぐこの海域から離脱しろ！　理由は言わなくても分かるな！
E・D・F艦隊は離脱後、各海域を偵察。もしも同様の怪獣が確認されたらその海域の艦娘たちに退避を呼びかけて俺に報告しろ。
怪獣との交戦は厳禁、全力で逃げろ！
早く行け!!」
轟天のその言葉に、弾かれたように艦娘たちが動き出す。中には戦友たちの仇を後からやってきた轟天たちだけに任せて退避することに抗議し渋る艦娘もいたが、もはやそういう次元の話ではない。そんな艦娘も周りの艦娘やE・D・F艦隊の艦娘に引きずられながら海域を後退していく。
そんな中、轟天に秘匿回線で村雨から通信が入った。
『轟くん……』

「なんだ？　片手間で戦える相手じゃないから手短に頼む」
『待ってるから……そんな化け物倒して早く帰ってきてね』
　手短に、それでいながら絶対の信頼を込めた言葉だけ残して村雨からの通信は切れた。
　その言葉に、轟天は苦笑する。
「当たり前だ。
　それに……こんなところで躓いてたらこの先お話しにならないだろうからな」
　それは確信めいた予感。しかし今はそれを心の棚に押し上げ、戦いに意識を集中させる。
「!?　メーサー発射!!」
　殺気と鋭い鎌のきらめきを察知した轟天は、それに向かってメーサーを放った。

～～～

身体を突き動かす。一種の狂乱状態(バーサク)だ。そこにはいつもの物静かで心優しい少年の面影は見て取れない。
「だぁぁぁぁ!!」
羅號がドリルをうならせながらエビラを狙うが、素早い動きでこれを避けるとすれ違いざまにエビラがそのハサミを振るう。
「くぅ?!」
それをギリギリのところでかわした羅號は振り向きざまに誘導魚雷を放った。けん制のための魚雷だったが、それが思わぬ事態を招く。
「魚雷をハサミで!?」
なんとエビラは魚雷を器用にもそのハサミで掴むとそれを投げ捨てる。そして魚雷は海底に接触して爆発した。
「視界が?!」
魚雷の爆発によって巻き上げられた海底の泥によって視界が遮られ、エビラの姿を見失う羅號。そして、その隙をエビラは見逃さなかった。
「がぁぁぁ?!!」
視界ゼロの中で羅號の下に潜り込んだエビラのハサミが、羅號を挟み込んだ。戦艦の艦娘の装甲すら容易く両断するハサミの切断力に、轟天と同じ強固な特殊複合装甲がミチミチと悲鳴のような不快な音を立て、衝撃に羅號が赤いものが混じった息を漏らす。しかし、羅號は口からうっすらと赤いものを吐きながらも表情をニヤリとした笑みに変えた。
「どうもありがとう。
捕まえる手間が省けたよ!!」
その瞬間、羅號の機関が最大出力で動き出す。とてつもない重量を誇るであろうエビラを引きずりながら、羅號の向かう先は海上だ。
ザバァァァン!!
巨大な水しぶきを上げながら、エビラのハサミに挟まれたままの羅

號が海上へと飛び出した。同時に羅號は使用可能になった主砲をすべてエビラに向ける。
「主砲全門、連続斉射!!」
ほぼゼロ距離、羅號の誇る大口径主砲から対怪獣用の特殊爆裂徹甲弾が放たれる。それも一撃ではない。自動装填装置を使った高速装填による連射である。その猛攻にエビラの甲殻が悲鳴を上げた。

キュイイイン!!?

そこらじゅうで甲殻が砕かれ毒々しい色の体液が噴き出し、エビラが苦悶の声を上げる。そして羅號を掴んでいたハサミも粉々に砕け散っていた。自由になった羅號はそのままドリルを構えて突進する。
「だぁぁぁ!!」
羅號渾身のドリルチャージを、甲殻を無残に砕かれたエビラに防ぐ手立てはない。ドリルがエビラの真芯を貫く。そして同時に吠え猛る羅號の主砲。

キュイイン……

身体の中心にいくつもの大穴を開けたエビラは、断末魔の声とともに毒々しい色の体液を噴き出しながら沈んでいく。それを見ながら羅號はポツリといった。
「悪いね。　僕はエビは嫌いなんだ」
羅號はそれだけ呟くと息をついて空を仰いだ。

〜〜〜

甲に傷が入り、運悪く稼働状態だったメーサー砲座が一緒に切り裂かれる。メーサー砲座の起こした小爆発にあおられながらも轟天はカマキラスに向けて反撃するが、タイミングを外したメーサー砲はことごとく避けられ、カマキラスは光学迷彩で姿を消した。
「ちぃっ！　ちょこまかと動きやがって!!」
先ほどから何度も繰り返される一連の攻防にイラつきながら吐き捨てる。
カマキラスは完全に光学迷彩を用いたヒットアンドアウェイに徹していた。その姿は轟天のレーダーでも捉えることができず、察知できるのはカマキラスが攻撃してくる瞬間だけである。そのため轟天はカマキラスの攻撃をしのぐことで精一杯で満足な攻撃をできないでいた。
轟天の中にイライラが積もっていくが、実をいうとそれはカマキラスも同じであった。
カマキラスの攻撃能力のほとんどはその鋭い鎌だ。しかしその鎌は轟天の特殊複合装甲の前に大きな損傷を与えられていない。しかもこの間に轟天からの反撃でカマキラスが受けていたダメージは決して軽視できるものではなかった。昆虫型怪獣であるカマキラスの防御力はそれほど高くはないのである。
そのため、カマキラスは状況を変えるべく行動に出た。
「ッ!!?」
幾度目かになる殺気に轟天は咄嗟に装甲を構えるが、鎌の一撃の衝撃はない。そのかわりに、カマキラスの足ががっしりと轟天の身体を背後から捕まえていた。
「しまった!?」
そしてカマキラスの両手の鎌が連続して振り下ろされる。カマキラスはヒットアンドアウェイ戦法を捨て、組みついての連続攻撃で勝負を決めようというのだ。
その鋭い鎌の連続攻撃で、轟天の特殊複合装甲がゆっくりとだが確実に削られていく。轟天のメーサー砲も巧みに射線上から逃れられ当たらず、ドリルでは背後には攻撃できない。

防戦一方の態勢、どうみても轟天の不利だ。しかし、轟天は獰猛に笑う。
「フルメタルミサイル、発射!!」
轟天のミサイルハッチが開き、フルメタルミサイルが放たれる。フルメタルミサイルはそのまま大空をしばらく泳ぐと急旋回、反転して打ち下ろすように背中からカマキラスに襲い掛かった。恐るべき誘導性能である。

キシュウウン!?

計8発もの対怪獣用に貫通力を極限まで高めたフルメタルミサイルの直撃にカマキラスが苦悶の声を上げ、轟天を捕まえていた足の拘束が弱まった。
「いまだ!!」
ここが勝機と見た轟天はカマキラスを振り払い、反転してカマキラスを正面に捉える。
「メーサー全砲座、総攻撃開始!!」
放たれた大量の高出力メーサービーム、それがカマキラスを焼く。カマキラスはたまらず逃げ出そうとするが、そんなカマキラスの翅をメーサービームが直撃しそれを焼き払った。
飛行能力を失ったカマキラスはきりもみ回転をしながら落ちていく。そんな隙を黙って見ている轟天ではない。
「オラァァァ!!」
唸りを上げるドリルを構え、轟天が突撃する。そしてドリルがカマキラスの腹へと突き刺さった。

キシュウウン!?

体液をまき散らしながら苦悶の声を上げるカマキラス。だが、轟天の攻撃は終わりではない。
「トドメだ！　消し飛びやがれ虫野郎!!」

カマキラスに突き刺さったドリルが光を放ち始める。
「ドリルスパイラルメーサーキャノン、最大出力!!
発射ぁぁぁ!!」
ドリルから放たれた光の奔流がカマキラスを内側から焼き尽くし、貫通する。上半身と下半身が千切れ飛び、絶命したカマキラスが海上へと墜落した。
「ふぅ……殲滅完了だ」
カマキラスの死体が波間に消えていくのを確認し、険しい顔でほかにも怪獣がいないか索敵していた轟天はそこでやっと息をつく。
そこへ羅號がやってきた。
「兄さん」
「羅號か。　こっちはちょうど虫退治を終えたところだ。
そっちは?」
「ああ、焼きエビ料理も調理しおえたよ」
轟天の軽口に、同じくジョークを交えながら羅號も返す。その時、通信機から泊地中枢部の制圧完了という報告が入った。この泊地攻略戦に勝利した瞬間である。
しかし轟天と羅號はとても喜べるような気分ではなかった。何故ならそれは艤装からの知識か、それともそれとは違う本能の部分か……怪獣との戦いがこれっきりではないことを確信していたからだ。
自分たちの記憶を含め、いろいろと考えなければならないことは多い。
「さっさと帰ろう。　やること山積みだぞ」
轟天のその言葉に、羅號は同意するように頷いたのだった。

波紋

ここは日本海軍の総本山である横須賀鎮守府。その大会議室には今日、中條元帥の命令で特別に任地から離れることのできない提督以外の、すべての提督が集められていた。

南方戦線の悲願ともいうべき敵泊地攻略戦の成功は、本来であれば諸手をあげて歓迎されるべき内容である。しかし、作戦後の提督たちが集まっての会議だというのにそんな勝利のムードなどどこにもなかった。その理由は当然、攻略戦終盤に姿を現し、艦隊に甚大な被害を出した未知なる存在……戦艦級艦娘の至近距離からの砲撃にも耐え、その分厚い装甲をたやすく引きちぎる驚異の巨大生命体……『怪獣』である。

会議はまずは中條元帥からの状況説明から始まった。南方敵泊地攻略戦における『怪獣』による被害とその戦闘能力について。そして自らが過去に『はじまりの妖精』たちと出会ったときにその出現を予言されていたということも告白した。

これらの話を聞いた提督たちの反応は様々だ。分かりやすくいえば温度差が激しい。敵泊地攻略戦に参加していた提督たちはある程度正確にその驚異度を認識できているがそれ以外の提督たちにはその驚異度が正しく認識できていないらしく、「艦隊で包囲すれば何とかなる」「数で押せばいい」といった声がちらほらと聞こえる。

『怪獣』の脅威を伝えれば当然、次はその『怪獣』を単艦で制した轟天や羅號、そしてE・D・F艦隊について話をしなければならない。そして中條元帥はここでついにE・D・F艦隊の存在を公表したのである。そして、予想通りの混乱が巻き起こった。

明らかに日本どころか、世界のどの国と比べても圧倒するような技術力を持つ集団が、どの国家にも所属せずに存在しているというのだ。それも当然の反応だろう。

「今すぐに我が軍に接収すべきだ！」

「バカな、彼らの保有戦力を聞いていなかったのか！

そんなことをすればこちらが全滅するぞ!!」
「ふん、そんなものは数で押せばいい。
先に囮となる駆逐を大量投入し、それで弾薬が欠乏したところを主力艦隊で叩けば……」
「弾薬が欠乏していようと、空を飛ぶ戦艦などどうやって補足すればいいんだ?」
「そもそも、彼らの技術を手に入れられなければ攻める意味などない。ここはスパイを使い、慎重に情報を手に入れるべきだ。
なに、元は我が軍の艦娘、そのあたりから切り崩し工作をすれば……」
融和浸透から武力接収という物騒なものまで、さまざまな意見が飛び交う。しばしの間、提督たちの思うままに発言を許していた中條元帥がゆっくりと発言した。
「静かに」
中條元帥からの声に、思い思いのことを語っていた提督たちも口を閉じた。そしてそれを待ってから中條元帥は話を切り出す。
「彼ら……E・D・F艦隊と我々(日本海軍)は『同盟』を結ぶことにする」
その言葉に同意するように頷く提督は約半数といったところだ。それ以外は納得できないという顔をしている。そのうちの1人が即座に手を挙げ発言した。
「しかしそれだけの戦力と技術力を持つ集団が国家に所属することもなく存在しているというのは、我が国の安全保障上大きな問題です」
「……彼らにはこちらから連絡員の名目で人員を派遣し、監視にあたることとする」
「それでは不十分です!
ここは武力を用いてでも、我が軍に組み込むべきです!」
「……そうなれば当然、彼らも抵抗するだろう。
彼らに勝てると思っているのかね?」
「内部の離間工作、駆逐などを囮として相手の弾薬を無駄に大量消費させていけば必ずや勝利できます」
そう言い切る提督に、中條元帥は心の中でため息をつきながら返し

た。
「では君の言う通り武力接収に出たとしよう。
正直、私では彼らに勝利できるヴィジョンが全く浮かばないのだが……君の言う通り、勝てるものと仮定する。
だが、勝てたとしてもこちらの被害も甚大であることは間違いはないだろう。
では彼らの技術力を解析した我々が、それらを兵装に組み込み量産化するまでには一体、どれだけの時間がいるのかね？
五年か十年か……その間、君は甚大な被害を出した我が軍が、深海棲艦や怪獣たちの侵攻をしのぎ切れると？」
今でさえ深海棲艦相手にギリギリの状況で戦っているのだ。ここで余計な戦力損失が起これば立て直す間もなく深海棲艦に呑み込まれる。それがわかってその提督は押し黙った。
その変わりのように、今度は別の提督が発言する。
「その艦隊に所属している艦娘はもともと我が軍の艦娘です。
彼女らの引き渡しを要求すべきでしょう」
「そして彼女たちから彼らの技術情報を引き出せ、と？」
肯定するように頷く提督に、中條元帥は再び心の中でため息をつきながら背後に控えていた秘書である『香取』を呼び発言を促す。
『香取』は手元の資料をめくりながら答えた。
「こちらで確認したところ、かの艦隊に所属している艦娘は全員、すでに戦死として処理されています。
つまり彼女たちはもう我が軍の艦娘ではなく、書類上では死人ということですね。
これでは返還の要求しようもありません」
「そういうことだ。別に彼らは我が軍から艦娘を攫っているわけではない、我が軍が『捨て艦戦法』で文字通り捨てた命を拾っているだけだ。
彼らの戦力が大きくなっているのも、『捨て艦戦法』の多用が根本の原因である」
中條元帥が『捨て艦戦法』を快く思っていないというのは有名な話

だ。中條元帥がジロリとにらみをきかせると、ほとんどの提督は押し黙る。それは同時に、どれだけ軍内に『捨て艦戦法』が蔓延しているかを物語っていた。
　すると、今度は他の提督が言いだす。
「しかしその……『怪獣』ですか？
　それはそれほどの、その胡散臭い彼らと『同盟』など組まねばならないほどの脅威なのですか？
　しょせんはただの巨大な動物でしょう？
　そんなもの、十分に距離をとった上で包囲してアウトレンジに徹すれば誰でも倒せるのでは？」
　『怪獣』の脅威について懐疑的な提督が言うと、その言葉に別の提督が反応した。
「……それは怪獣によって死んだ私の部下たちが無能だったとでも言いたのか！」
　そう激昂するのは、先の敵泊地攻略戦にて怪獣によって甚大な被害を受けた艦隊の提督だ。
「そこまでは言いませんが、ミスは犯していたのでしょう。
　でなければ動物相手にそこまでの被害がでるはずがない」
「貴様、あの場にいなかった分際で偉そうなことを!!」
「やめたまえ!!」
　激昂して掴みかかろうとする提督を、中條元帥の鋭い声が止める。
「……『怪獣』の脅威度に関しての認識の違いについては、今は仕方ない。あの脅威は実際に見なければ信じられぬものもある。現段階では資料を熟読し、最大限の注意をするように。
　だがこれだけは肝に銘じておいてほしい。『怪獣』はあの『はじまりの妖精』が『真の絶望』だと称したほどの存在だ。決して油断していいものではない。
　それがどういうわけか深海棲艦と協同しながら行動しているのだ。これは深海棲艦に新たな援軍が来たに等しい。それに合わせてこちらも戦術・戦略に転換が求められるだろう。
　だからこそ、我々はE・D・F（彼ら）艦隊とは友好関係を築く。

今のような国難の時に敵を増やすような愚は避けねばならんのだ。
……皆、理解してくれるな？」
「閣下のお考えに賛同します」
紆余曲折あったものの、ようやく中條元帥の思ったように会議がまとまりそうになりホッと胸をなでおろすその時だ。
「会議中、失礼します。
閣下、緊急事態です！」
「何かね、鳳翔くん？」
そう言って、ノックもなしに会議室に入ってきたのは中條元帥の信頼も厚い軽空母の『鳳翔』だ。艦娘としても最古参であり、海軍中の艦娘たちから母のごとく慕われる彼女が、ここまで慌てた様子なのは珍しいどころか初めてだ。
そして彼女の口から衝撃的な言葉が語られる。
「カレー洋方面から敵大艦隊が接近。そして……その中に巨大生物、『怪獣』の姿が確認できました!!」
「「「ッ!!!?」」」
会議室に衝撃が走る。
「り、リンガはどうした!?」
提督の誰かが叫ぶように言う。リンガ泊地はカレー洋方面からの敵への備えであり、東南アジア地域防衛の最前線である。そのためかなりの数の戦力と、そして中條元帥の信頼も厚い優秀な提督が率いていたはずだ。
しかしその言葉に鳳翔は首を振る。
「防衛のために展開したリンガ泊地艦隊は、巨大生物『怪獣』の攻撃によってほぼ壊滅状態に陥りました。
これによって東南アジア各島への深海棲艦上陸阻止は不可能と判断、非常事態措置に基づきリンガ泊地艦隊は残存兵力をもって島民の保護と脱出のために作業中とのこと。
至急援軍を求めています」
「分かった、すぐに援軍の編成に取り掛かる。
E・D・F艦隊にも出撃要請を！

どのような対価を支払ってでも轟天と羅號、彼ら2人の出撃を取り付けろ！」
中條元帥の鋭い指示が飛び、全員が動き出す。
「やれやれ、さっそくのおかわりか……もう人類はお腹いっぱいなのだがな」
呟いて中條元帥は無意識に、祈るようにポケットの中の『はじまりの妖精の紋章』を握る。
人類の戦いは今、新たな局面を迎えようとしていた。

～～～

「他にもたくさん面白いものが見れそうで、今から楽しみです」
「……お手柔らかにお願いしますね」
大淀は中條元帥からE・D・F艦隊の技術をもっとも間近で見て、技術提供の交渉のためにどれが優先順位が高いかを判断することを求められていた。すでにどんな技術の提供を交渉しようかと考えを巡らせて始めている。
E・D・F艦隊側としては何でもかんでも技術を渡すわけにはいかないので慎重にと思っている羅號なのだが、大淀の熱気というかパワーに押され気味で内心でため息をつく。年齢的にも適正的にも、羅號はこの手の交渉事は得意ではない。
大淀も感触から、このままグイグイいけば有利な交渉ができそうだという感触は掴んでいるものの、羅號の後ろでは『ラヴァーズ』の面々が目を光らせている。特に冷静そうな朝潮とマックスの2人は、こちらの言葉1つ1つまで注意深く聞き入っているようだ。羅號の言葉に不都合がありそうなら、即座に割って入る気配である。
自分たちがE・D・F艦隊の監視役であるように、『ラヴァーズ』の面々が自分たちの監視役なのだろう。ならばあまり突っ込みすぎるのは危険だ。大淀にも地雷原でタップダンスを踊るような趣味はない。
時間はあるのだ、ゆっくりと交渉していけばいいと思い直した大淀は話を変えた。
「ところで……今日は轟天司令はいらっしゃらないんですか？」
秘書艦の村雨さんの姿も見えませんが……」
「ええ、まぁ……2人ともちょっと……」
「まぁ、デートですか？」
いつぞやのトラック泊地での時にも同じ部屋で就寝されていたようですし、相変わらず仲がいいのですね。うらやましいです」
色々とばれていることを暴露する大淀に、事情もあって羅號はあいまいな返事をするしかない。
羅號は心の中で、2人の帰りを心待ちにするのだった。

～～～

多分、現状で喜ばれてなおかつ後腐れしない支援は食料だろうからな」
「確かに、下手に技術を探られるような武器提供よりはいいわね。
了解よ、妖精さんたちにはそう指示しておくわ」
「それで……『秘密兵器』の方はどうだ？」
言われて村雨は手元の紙をめくる。
「ええと……やっぱりまだまだ時間がかかるみたい」
「そうか……」
何も轟天たちは今までこの『緯度０秘密基地』を遊ばせていたわけではない。妖精さんたちに指示をして武器弾薬・燃料の生成、鉱物採掘、食糧生産などを続けてきたわけだが、それと同時にある『秘密兵器』の生産も指示していた。しかしその完成にはまだ時間がかかるようだ。少なくとも『次の怪獣』との戦いに投入できるということはないだろう。
そう、次の怪獣だ。
轟天も羅號も、エビラとカマキラスが最初で最後の怪獣だとはみじんも思っていない。間違いなく、『次』がある。
そのための戦力アップを見越していたのだが……まだまだ時間はかかるようだ。
「前途多難だな、こりゃ」
「そうね」
轟天と村雨は揃ってため息をついたのだった……。

～～～

いつ死ぬとも分からぬ戦場で戦い続けた村雨は、誰かと一緒でないとまともに眠れないという心的外傷（トラウマ）を負っている。そんな村雨は助けられたあの日からずっと轟天と同じ布団で眠っていた。だからこそ、轟天のその変化に気付いているのは村雨だけだ。

最初のころは、村雨が轟天の腕を枕に眠っていた。それはまるで大樹を抱くような、ゆるぎない大きなものに縋り付いて安心感を得るための無意識からくる寝姿だったし、事情を知る轟天もそれを受け入れてくれていた。

しかし最近、こうして轟天の方から村雨に縋り付くようにしてくる割合が増えてきている。そしてその原因は分かっていた。

「『怪獣』……」

轟天がこうなったのは、あの怪獣との初遭遇の日からだ。

あの戦いの後、村雨は轟天に記憶が戻ったか聞いてみたが、その答えは「全く戻っていない」というものだった。記憶は何も思いださないが怪獣という存在に相対した瞬間、『奴らは一匹残らず倒さなければならない』という気持ちが湧き上がってきた、らしい。羅號も同じだそうだ。

とにかく、轟天も羅號も記憶は戻っていないのだが……状況からいくつかの推測ができるようになった。

村雨はＥ・Ｄ・Ｆ艦隊の秘書艦という、かなり高い地位にいる。何度考えても自分のようなただの小娘がそんな地位にいるのは何かの間違いだと思っているのだが、今回の件ではそれが大いに役に立った。

『怪獣』……その存在そのものが轟天たちの記憶のヒントになる、そう思った村雨はその地位を利用して日本海軍にも連絡を取り『怪獣』という存在について探ったのだ。

中條元帥に聞いた話を鵜呑みにするなら、あの『はじまりの妖精』が脅威だとして１００年ほど前に封印した存在が『怪獣』だ。ならば当時の資料などにその鱗片くらいないものかと資料を探ったのだが……いくら探してもまったく手がかりがない。もっとも当時は深海棲艦の登場によって世界的な大混乱期、資料の紛失という可能性はあ

る。だが、同時に現代に至るまでに『怪獣』の存在を臭わすような資料の一つでも出てきても良さそうなものだが、それもない。
つまり『怪獣』は１００年前に人類のあずかり知らぬところでポッと現れ封印され、現代で突然ポッと蘇っているのである。丸々１００年が空白なのだ。
ならば……何故轟天と羅號は『怪獣』を、しかもその名称まで知っているのだろうか？
これらの疑問を総合した村雨は、ある仮説を立てた。
轟天と羅號は……『現代の人間ではない』のではないだろうか？
およそ１００年前、『はじまりの妖精』とともに『怪獣』と戦い封印した艦息であり、そして封印が解ける未来のためにコールドスリープなどの手段で眠り続けた存在なのではないか……これが村雨の立てた仮説である。
記憶喪失というのも長期のコールドスリープの副作用か何かだと考えれば納得できるし、これなら『はじまりの妖精』が１００年先の存在である２人のことを言い当てたのも、『予言』というあいまいなものではなく、納得できる説明ができる。
だがこの仮説が正しかった場合……轟天の望んでいるものは、もう見つからない。
村雨は、村雨だけは轟天の苦悩を知っている。望んでいるものを知っている。
初めての夜、轟天の語った言葉を村雨は忘れていない。
両親、友人、故郷……それらの誰もが当たり前のように持っているものがない。だからそれが欲しくて記憶を探している、と轟天は話していた。しかしもし村雨のこの仮説が正しいのならそれらすべては、遠い１００年の過去の彼方に置き去りにしてしまっているのだ。それが手に入ることはもう、ない。
そしてこれは村雨の勘なのだが……おそらく村雨と同じような仮説に、轟天自身もたどり着いているのではないだろうか？
だから不安を感じて、無意識のうちに自分に縋り付くように眠るようになったのではないか？

そんな風に村雨は思う。しかし、それを不快には感じない。
一方的に村雨が轟天に依存する関係が、互いに依存し合う関係になった……ただの傷の舐め合いかもしれないけれど、それが村雨には嬉しかったのだ。
「何だかちょっと変わっちゃったね、私たちの関係」
そう嬉しそうに小声で呟く。
自分は轟天に運良く助けられただけの、ただの小娘にすぎない。そんなことは百も承知だ。
だが、それでも……。
「何があっても……私は轟くんのそばにいるからね」
その心に寄り添い続けることぐらいはしてみせる。
その思いに突き動かされ、村雨は轟天の頭を引き寄せると、その胸に優しくかき抱いた。
するとほんの少しだけ轟天の顔色が良くなったような気がして、村雨は嬉しくなった。自分がそうさせたと思うと、誇らしい気持ちになる。
そんな満ち足りた思いのまま、村雨も目を瞑る。
朝はまだ遠い。
２人の安らかな寝息だけが、寝室に響いていた。

夢　その2

そこは巨大なドッグだった。
多くの人々がせわしなく作業を続けるそこには、巨大な艦艇の姿がある。その数は12隻。
これこそ『地球防衛軍艦隊(E.D.F)』、この『緯度0秘密基地』を拠点とする、人類に残された希望の艦隊である。
そしてその全景を見渡せる展望ブロックに、2人の男の姿があった。
「壮観ですね、神宮寺司令」
「ああそうだな、日向副司令」
しばしその光景を眺めた2人は向かい合ってソファーへと腰を下ろす。
「あの日……人類が初めて怪獣の脅威に晒されてから今日まで、本当に長い長い道のりだったな……」
「ですが、こうして人類のすべてを賭けた艦隊の完成にまでこぎ着けたのです。
これからですよ」
「そう思いたいところだが……相手は怪獣だ。
欲を言うなら轟天型があと4～5隻、いや10隻は欲しいところだ」
「それこそ無茶ですよ」
言って、日向副司令は壁に掛けられた世界地図を眺める。そのところどころには赤いペンでバツがつけられていた。
「長きに渡る怪獣との戦いでそんな力は人類には残っていませんよ。
正直、この艦隊が完成したこともかなりの無茶をやってのことです」
「わかっている、言ってみただけだ。
無茶であろうが何だろうが、手持ちで何とかせねばならんのが我々軍人の仕事だからな。

それに今まで十分、無茶はやり尽している」
そう言って目を瞑る神宮寺司令の脳裏には今までの戦いの記憶が蘇る。
「思えば、轟天の初陣からして無茶だった。
完成度８０％の段階での出撃命令、おまけに戦闘中にオーバーヒートにより全火器システムダウンときた。
あれはさすがに死を覚悟したよ……」
「轟天はミサイル以外の武装のほとんどは高出力光学兵装、その圧倒的な火力とドリルで敵怪獣を叩き潰すことをコンセプトとしていましたからね。
まさか発熱を処理しきれずにオーバーヒートするとは思いませんでした……」
「おいおい、笑い事ではないよ。
その後の騒ぎはお前も分かっているだろう？」
「ええ、完成度５０％を超えていた轟天型２番艦『羅號』はその反省を踏まえて光学兵器は必要最小限を残してほとんど降ろし、かわりに大口径実弾主砲を主兵装にするように突然の仕様変更。
そのせいで完成が遅れましたからね」
「轟天は大型ラジエーターを複数増設することで何とかなったが……おかげで航空機格納庫は羅號の３分の１以下にまで削られた。
だが轟天はまだいい。問題は……」
「火龍、ランブリング、エクレールの『空中戦艦』シリーズですね」
日向副司令の言葉に、神宮寺司令が頷く。
「あの３隻は轟天から潜航能力をはじめとした機能を削減した、轟天の量産型コストダウンモデルだ。轟天ほどに内部に構造的な余裕はない。
航空機格納庫を完全に潰してラジエーターを増設したものの焼け石に水、結局根本的な解決には至らなかった」
「ですが、轟天に準じた高出力光学兵器の火力は強力ですよ」
「分かっている。
それに弱点があろうがなんだろうが、選り好みをしていられるよう

な状況ではないからな」
　そして「コストダウンといえば……」と、苦虫を噛み潰したような顔で神宮寺司令は続けた。
「潜航能力を削ったことはかなり響いたな。
　怪獣の多くは海を渡ってくるというのに、水中での防衛も追撃もできない。結局、水中戦ができるのが轟天だけということすらあったからな。
　しかしその必要性に駆られて開発された『万能潜水艦』だが……」
「アルファ号と黒鮫号ですね」
「轟天を参考に空中戦能力と水中戦能力を両立させつつコストダウンを図るというコンセプトだったが……確かに空中戦もでき水中での機動性も随一だったが、肝心の火力が低くなってしまったのはなぁ」
「それでもミサイルにメーサー砲、冷凍砲がついているので通常兵器の何倍も強力ですよ」
「それもわかっているんだがな……」
　そう言って仰ぐように天井を見上げる神宮寺司令。
「最終的には、羅號をベースに空中戦能力と水中戦能力を残しつつ光学兵器を完全に廃止、すべて実弾兵器化してコストダウンを図った『ラ級万能戦艦』シリーズが一番量産された結果になったな」
「光学兵装は高い火力を誇りますがどうしてもコストが高くなりますからね。その点、実弾兵装は今までのノウハウもありますし、羅號の実戦データもあったので低コストでの量産がしやすかったのも事実です。
　まぁ、やはり実弾兵装だけのため一撃のパンチ力に欠けるところは玉に傷ですが」
「……なんだ、こうしてみると人類の希望たる我が艦隊（E・D・F艦隊）は欠陥のある艦しかいない欠陥艦隊ではないか」
「司令、それは言わない約束ですよ」
　そして2人はどちらからともなく苦笑した。
「しかし欠陥艦隊だろうがなんだろうが、この艦隊で我々はすべての怪獣に勝利しなければならない」

「怪獣といえば……司令はあの話は聞きましたか？」
「ああ、インファント島からのお客人の話か？」
神宮寺司令のその言葉に、日向副司令が頷く。
「あの話……どう思います？」
問われ、神宮寺司令は腕を組んでしばし思案する。
「にわかには信じられん話のはずなのだが……ここだけの話だが、何と言うか、こう……胸にストンと落ちてくるような、奇妙な納得があった。
お前はどうだ？」
「……」
その言葉に、日向副司令は肯定するように頷くと続ける。
「しかし……もしあれが真実なのだとしたら、我々のこの戦いは……」
明らかに迷いの見える日向副司令に、神宮寺司令が言った。
「……昨日ウチの、轟天の機関長なんだがな、初孫が産まれたそうだ。
元気な女の子だそうでな、頼んでもいないというのにその写真を私に見せに来たよ」
その時の光景を思い出したのか神宮寺司令が苦笑を漏らすが、すぐに顔を真剣なものへと変える。
「そんな産まれたての赤子の未来は、このままでは怪獣によって世界ごと潰える。その子には何一つ落ち度など存在しないのに、だ。
私は、それが許せない」
すると神宮寺司令はソファから立ち上がるとドッグの方を眺めた。
「……私は『人』の役目は、次代に繋ぐことだと思っている。
今は駄目でも次こそはきっと……そう願いながら命のバトンを繋ぎ続けることこそ、人の生きる役目だ。
私は誰に何を言われようとそのために今の世を、世界を護り次代へと繋ごう」
そう言って、神宮寺司令は苦笑しながら振り返った。
「私はな日向、『人』という存在を信じているんだ。
人は多くの間違いを犯す存在だ。だが同時に、その間違いを正すことのできる存在でもある。

我々でダメなら子供たちが、子供たちでダメなら孫たちが……そうやっていつかきっと、どこかにある『正しさ』にたどり着ける存在だと信じている。
今の我々の行いが正しいのか間違いなのかを決めるのは未来の子らの仕事だ。我々のものではない。
未来で我々の行いを愚かなことだと笑うならそれもいい。だが、今この瞬間に何もしなければその未来すら砕け散る。だからこそ我々地球防衛軍（E.D.F）は命の限り戦うのだ。今の世界に生きる、どこかの誰かを次代に繋ぐためにな。
あのインファント島からのお客人も、恐らくは同じ気持ちだろう。だからこそ、我々の元を訪れてくれたのだろうと私は思っている。
……軍人らしくもない甘っちょろい、夢見がちな話だ。笑ってくれて構わんよ。
だが……私はそう思っている」
「……」
『人』という存在を信じ、その未来を信じる……そんな神宮寺司令を夢見がちだとは日向副司令はとても思えなかった。
何の言葉も見つからず、結果無言になってしまった日向副司令・しかしそんな時、その部屋の扉が開く。
「失礼します。　司令、副司令……怪獣が、怪獣が現れました!!」
慌てた様子の男から手早く資料を受け取り目を通す神宮寺司令。その目は真剣な、戦う漢のものへとすり替わっている。
「よし、地球防衛軍（E.D.F）艦隊、全艦出撃準備だ!!」
「了解!」
答えた男は敬礼をしてから、足早に部屋を出ていく。
残された神宮寺司令と日向副司令はゆっくりと軍帽を被った。
「さて……では行こうか。
我々人類の意地と執念を、そして諦めの悪さをすべてに見せつけてやるとしよう」
「了解です、兄さん」
２人は連れだって部屋を出ていく。

向かう先は自らの乗艦である地球防衛軍艦隊旗艦である轟天型1番艦『轟天』と、2番艦『羅號』であった……。

ピピピピピッ……

「あん……」

目覚ましではない、電子音で轟天は目を覚ます。

何だろうか……何か懐かしく、そして大切な何かを夢で見ていたような気がするが、内容がまったく思い出せない。

はっきりしない頭を振り意識を覚醒させる轟天の横では、隣で寝ていた村雨もゆっくりと目を覚ましていた。

電子音の正体は通信機の呼び出し音だ。

それに気付いた轟天は即座にそのスイッチを入れる。

「俺だ。

ああ……ああ……分かった、すぐに出る」

ほんの二、三言だけ言葉を交わしただけで轟天はすぐに通信機を切る。たったそれだけの間で轟天の雰囲気がガラリと変わったのに気付いた村雨は、確認のために聞いた。

「どうしたの、轟くん？」

「羅號からだ。東南アジア方面で敵の侵攻があったそうだ。

だがその敵の中に怪獣がいることが確認された。それでE・D・F艦隊に日本海軍から援軍の要請があったらしい。

緯度0秘密基地での作業はいったんここまでだ」

村雨も長い間戦場に身を置いている艦娘だ。即座にベッドから飛び起きる。

「途中で羅號たちと合流後、そのまま東南アジア方面へ救援に向かうぞ」

「分かったわ。　５分後にドッグで」
「ああ」
それだけ言うと村雨は足早に身支度に向かう。
残された轟天も手早く準備に入るのだった……。

外伝　ラヴァーズ結成
駆逐艦　暁の出会い

……私は早く大人になりたかった。

私の家はお父さんにお母さん、それにお姉ちゃんにお兄ちゃん2人、そして私の6人家族だった。

年の離れた末っ子の私をお父さんやお母さんはもちろん、お姉ちゃんもお兄ちゃんたちもみんな可愛がってくれたわ。

特にお姉ちゃん。ずっと妹が欲しかったんだって言って、いつも笑顔で私の髪を梳かしてくれたわ。

長い黒髪がとっても綺麗で優雅でお淑やか、みんながお姉ちゃんのような人を『淑女（レディ）』だって褒めていた。私もお姉ちゃんが大好きで、いっつも「早く大人になってお姉ちゃんみたいな立派なレディになる」って思ってた。

早くお姉ちゃんみたいな立派なレディになって、無限大の愛をくれた家族にほんの少しだっていいから恩を返したかった。

でもそれを言うと、お姉ちゃんは困ったみたいに笑って言ったわ。

「そんなに急いで大きくなんかならなくたっていいの。

あなたがどんどん健やかに育ってくれる……それだけであなたは私たちにたくさんのものをくれているのよ。

それに……女の子が素敵なレディになるのは家族のためじゃなくて、いつか出会うあなただけの『王子様』と一緒に未来を歩むためなの」

だから私は「それじゃお姉ちゃんは王子様に会ったの？」って聞いたら、お姉ちゃんはちょっと顔を赤くしながら私の唇に指を置いて、「まだナイショ。

でも、もうちょっとしたらあなたにも会わせてあげるね。

私の『王子様』に」

……後で知ったことだけど、あの時お姉ちゃんは結婚をしようとしていた人がいたらしい。そう言って私にウインクしたお姉ちゃんは

とっても可愛くて、そして綺麗だった。
家は別に裕福というわけじゃなかったけど、いつだって笑顔に囲まれていた。
お父さんがいてお母さんがいて、お姉ちゃんがいてお兄ちゃんたちがいる……あの日々のどの瞬間を切り取ったとしても、幸せが溢れていたって今でも断言できる。
まるで夢みたいな日々だった。
だから……終わりもまるで夢みたいに突然で、儚かった。
その日、いつものように家族と猫のみーちゃんにおやすみのキスをして眠った私は、目が覚めると病院のベッドの上だった。
隣には泣き腫らした叔父さんと叔母さんの姿。私が目を覚ましたと知ると大喜びで抱きしめてくれたけど、何が起こったのか分からない私は混乱するばかり。叔父さんたちにお父さんたちがどこにいるのか聞くと、叔父さんたちは悲しそうに目を伏せる。
運悪く未発見のまま警戒線を突破していた、たった1隻のはぐれ深海棲艦。そいつによる沿岸への砲撃……それが私の夢の日々を粉々に砕いた。
私は奇跡的に無傷だったけど他の家族はすべて、炎の中に永遠に消えてしまったのだ。
そのあと、私は叔父さん夫婦に引き取られた。
叔父さんたちはとっても優しかったけど……私の心にポッカリと空いてしまった穴は塞ぐことは出来なかった。
だって、私は家族にほんの少しでもいいから愛してくれた分の恩を返したい、楽にしたいって思いながら生きてきたんだもの。なのにその家族がいなくなったら……心をどこに向けていいのか、どうしていいのか分からない。
どうして私だけが助かったのか……何にもできない私なんかより、お父さんやお母さん、それにお姉ちゃんやお兄ちゃんたちが生きるべきじゃなかったのか……そればっかりを考えてたわ。
私に艦娘の適正があるって分かったのはそんな時よ。
艦娘……妖精たちの造る『艤装』と心を通わせることで戦う力を得

る、深海棲艦と戦うことのできる唯一の存在。私にはその艦娘の中で、『駆逐艦　暁』の適性があることが分かったのだ。
私は「これだっ！」って、そう思ったわ。
艦娘になって人を守る。私みたいな人を増やさないために、深海棲艦と戦う。家族を亡くしてから行き場を無くしていた心を向ける場所がやっと見つかったの。
そうと決まれば早かったわ。
優しい叔父さん夫婦は当然のように反対した。まだ１０にもなっていない娘を戦争に送るなんて……そう言って私の入隊に難色を示してくれていた。
正直に、叔父さんたちが私を思ってくれていることはとっても嬉しい。でも周りの状況がそれを許さなかった。
今は１００年も前から続く、謎の深海棲艦の襲撃と戦い続ける戦争の真っ最中、１人でも多くの艦娘を必要としていた。
艦娘で特に小型艦である駆逐艦や海防艦は、その特性上なのか幼い女の子が適正者であることが多い。そのため、軍内には私くらいの歳の女の子は当たり前のようにたくさんいて、幼いからという言い訳も通用しない。
……最悪、このままでは叔父さんたちが世間から攻撃を受ける可能性もある。
そんな空気に便乗するのは嫌な気分だったけど、私はそれを後押しに叔父さんたちを説得、晴れて艦娘として軍に志願した。
そして艦娘になった私は南方戦線に配属になった。
激戦区だってことは分かっていたけど意気込みは十分、「きっとたくさんの人を救ってみせる！」って思いながら私は艦娘として海に乗りだしたわ。
でも……そこに広がっていた『地獄』は、私の願いも理想も、何もかもを塗りつぶした。
戦いの主役はいつでも戦艦・空母・重巡といった大型艦娘、お前たちのようないくらでも替えの利く駆逐艦娘などただの弾除けだと心得よ……着任したその日に、私たち駆逐艦娘全員を前に提督の言った

言葉だ。
そして提督は、その言葉に嘘偽りなく私たち駆逐艦娘を容赦なく使い潰していった。
敵の弾を減らすためだと、敵陣に特攻を命じられた娘がいた。
撤退のための囮として、死地に置き去りにされた娘がいた。
わずかばかりの物資の節約のために、片道の燃料だけで出撃させられた娘がいた。
明日は我が身と、駆逐艦娘（みんな）の顔には怯えと諦めだけが漂っていた。
そして……ついにその時が来た。
敵機動部隊の奇襲を受けた私たちの艦隊は中核だった空母艦娘が中・大破。満足に動けるものは護衛に、速力に問題の出た駆逐艦娘はその場で艦隊の撤退を援護せよという、事実上の『死』の命令が下される。
「やっ……置いて……かないで……！」
涙声の哀願が聞こえる。確か……山風だったかしら？
話したことはほとんどない。というか、山風はいつもおどおどと怯えたような様子で誰とも距離をとっていたので、仲の良い娘など基地にはいなかったのではないだろうか。
損傷のせいで速力が半減していた山風を残し、艦隊は離脱しようとする。誰もがみんな、仲間を見捨てる罪悪感で目と耳を塞いでいた。
私はこの時、損傷を受けてはいたものの速力には問題なかった。でも……こうして誰か仲間を見捨てて生き残ることに、もう疲れてしまっていたのかもしれない。
「損傷により速力減少のためこの場にて艦隊を離脱、貴艦隊の撤退を援護します。
幸運を」
気がつけばそれだけ一方的な信号を艦隊に送りつけると、私は艦隊を離脱し山風のところに戻る。
「ど、どうして……？」
「私もわかんない。
でも……こっちの方が一人前のレディらしいと思ったからよ！」

戻ってきてくれるとは思っていなかったのだろう。困惑する山風に、私はどういうテンションなのか胸を張って答え、その答えに山風がさらに困惑する。
これが自分の最後だと自棄になっていたのかもしれない。でも、そうやって宣言したらすがすがしい気持ちになった。
それは私の始まりの夢。『立派なレディになりたい』……この地獄の戦場でついぞ忘れていた想いだ。
私の目指した理想のレディなら、人だって仲間だって、全部まとめて守るだろう。だから最後くらい格好つけたっていいでしょ？
「ほら、行くわよ」
「行くって……どこに？」
「どこか他の基地でも無人島でも、ここじゃないどこかよ。
……生きる努力も何もせずにここで沈むよりはいいじゃない」
「……うん！」
私は山風に肩を貸すと航行を始める。運良く夜まで粘れれば逃げ切れるという可能性もあるだろう。
でも、そんな都合のいい話なんてなかった。
「あぅっ!?」
「痛！」
近距離での爆風に嬲られ、私も山風も悲鳴を上げる。
私たちは敵艦隊に完全に捕捉されていた。制空権なんてもののない私たちの頭の上には自由に敵航空機が飛び交い、好き勝手に爆弾を落としていく。敵の重巡リ級をはじめとした主砲の砲撃も続いていた。
ありていに言うと、私たちの命運は尽きていたのだ。
「もう、いいから……。
暁だけでも……」
「今さら何言ってるのよ。
レディは……こんなことじゃへこたれないわ！」
怖くて震えて泣きじゃくりながらも、山風が自分を捨てて私だけでも逃げてと言ってくる。

……いい娘じゃない。こんなことならもっと早くに話しかけて友達になっておけばよかったと後悔。
でも残念、私だって怖くて震えと涙が止まらない。山風に肩を貸して支え合ってるからいいけど、山風から離れた途端、間違いなく腰が抜けて起き上がれなくなると思う。この二人三脚みたいな体勢でもう私と山風は運命共同体なんだ。だから私は震える声で最大限に虚勢を張る。でも、こんな虚勢だっていつまで言えるか……。
深海棲艦の攻撃は時間がたつごとにどんどん正確になっていく。脱出の目もない。
そして……。
「あっ……」
まるでスローモーションのように投弾された爆弾が見える。あれは直撃コースだ。
直前に迫った『死』に動けない私たち。
その時だ。

ボンッ！

どこからか飛来した噴式航空機の機銃が、私たちに迫っていた爆弾を空中で叩き落とす。
味方？　どこから？
視線を巡らすと、同じように辺りを探る深海棲艦の重巡リ級の姿が見えた。だが次の瞬間……そのリ級が潰れた。
……最初は何が起こったのか分からなかった。でもしばらくして……柄のついた巨大なメイスのようなドリルによって叩き潰されたのだということが分かった。そして、その巨大ドリルメイスを持った人の姿が見える。
それは私たちと同じくらいの歳の、男の子だった。
……そこからはまさに『蹂躙』だった。男の子のドリルが、大口径砲が、光線が唸るたびに深海棲艦たちが千切れ飛んでいく。そしてものの数分で、深海棲艦は一隻残らず沈んでいた。

「私たち……」
「助かった……？」
緊張の糸が切れて揃ってへたり込んだ私たち。そんな私たちに影がかかる。今、深海棲艦を叩き潰した男の子だ。
よく考えれば、まだ味方って決まったわけじゃない。
深海棲艦を倒して、今度は私たちの番かも……そんなことを考えてしまう。横を見ると、山風も私と同じような青い顔をしていた。
でもこのままってわけにもいかない。私と山風は意を決してゆっくりと顔を上げていく。
そして……私たちは運命の出会いをした。
「もう大丈夫だよ」
まっすぐで奇麗な瞳の男の子だった。その男の子のたったその一言だけで、今まであった不安がまるで太陽の前の雪のように、綺麗さっぱりと溶けていく。
そしてやっと自分たちは助かったんだと分かった途端、涙が溢れて止まらない。
「うわぁぁぁぁん!!」
「わっ!?」
私と山風は思わずその男の子に抱き着くと、今までの緊張が解けて声をあげて泣いた。男の子は驚いてたみたいだけど、そのまま何も言わずに私と山風の頭を優しく撫でててれる。
しばらくしてやっと落ち着いた私たちに男の子が話し始める。
男の子の名前は『羅號』というらしい。男の子の艦息（？）で、どこの国家にも所属せずに秘密裡に活動しているそうだ。
そこで私と山風に、今日のことは全部忘れて元の基地に戻るか、自分の仲間になって一緒に来るか選んでほしいって言ってきたの。
……どうせ私たちは死んだことになってるだろうし、何より基地に戻って追及されたら、羅號のことをうまく隠し通せる自信がない。どっちを選ぶかなんて考えるまでもないことだった。
そして私たちは羅號と一緒にあの場所へ……『緯度０秘密基地』へやってきたの。

そこからはもう驚きの連続。
見たこともないような施設の数々に、物凄い威力の新兵器。
普通では到底食べられないような美味しいごはん、そして快適な環境。
「天国ってお空の向こうじゃなくてこんなところにあったんだ……」って思っちゃった。
山風とはあの後すぐに友達になった。思った通り、ちょっと口下手なだけですごくいい娘だった。
私はこの『緯度０秘密基地』に来て、かつて家族と過ごしていた時のように満ち足りた日々を過ごしている。
衣食住の環境は抜群、山風っていう友達も出来た。
そして……。

「ああ、暁に山風。　どうしたの？」
風通りのいい木陰で微睡んでいた羅號。いつもそばにいるあの３人組は今はいないみたい。それを見つけた私と山風はすぐに羅號のそばによる。
「べ、別に用事はないけど……」
「ら、羅號が気持ちよさそうだったから……」
２人揃ってちょっとどっもりながら言うと、羅號は納得したように頷くと「気持ちいいよ。　一緒に昼寝する？」って言って少しだけスペースを空けてくれる。私と山風は顔を赤くしながら、羅號を左右から挟むみたいに寝転んだ。
気付けば羅號を目で追い、羅號のことを考えると胸の奥がポカポカ温かくなる。お姉ちゃんが言っていたから、この感情が何なのかすぐにわかった。
『恋』だ。私は羅號に『恋』してる。　そして恐らく山風も……。
お姉ちゃんはいつか言っていた。女の子が素敵なレディになるのはいつか出会う『王子様』のためなんだって。
私は……『王子様』に出会ったんだ。

だから……。
羅號が隣に寝た私の頭を撫でてくれる。
羅號に撫でられるのは暖かくて優しくて大好きだけど、ちょっとだけ小さい子を相手にするような雰囲気がある。だから私は嬉しさを感じながらも、ちょっと口を尖らせて言った。
「もう、子供扱いしないで。
一人前のレディとして扱ってよね」
きっと、羅號と一緒に歩めるような一人前のレディになって見せるからね……すべてを失ったと思っていた私の、新しく人生を賭けて目指すものはこうして見つかった。

駆逐艦　山風の出会い

……私はずっと誰かに甘えたかった。
私の家は貧しかった。父は粗暴でいつも酒を飲み、母は常にイライラしていた。そしていつも……まるで気晴らしのように私のことをぶった。
「痛い、痛いよぉ。
ごめんなさい。ごめんなさい。　いい子にするから……だからぶたないでぇ」
亀のように丸くなって頭を守りながら、どれだけ泣いて謝っても父と母は私をぶつのをやめてくれなかった。
その時チラリと見た両親の顔を、私は生涯絶対に忘れることはできないだろう。
……笑っていた。
あのいつもイライラと不機嫌そうにしていた両親が、まるでおもちゃではしゃぐ子供のような顔で笑っていたのだ。
……それが私の知っている、たった一つの両親の笑顔だった。
私のただ一つの楽しみは両親のいない間、窓の外を眺めることだった。
すぐ近くの児童公園、そこには私と同い年くらいの子が家族と一緒に遊びに来ていた。幸せそうに笑いながらお母さんに抱き着くその子と、同じように幸せそうな笑顔でその子の頭を撫でるお母さん……その光景を見ながら、私は涙が止まらなかった。
どうして私はあの子のように笑えないの？
どうして私はあの子みたいに撫でてもらえないの？
どうして私を……両親は愛してくれないの？
それでも、それでもバカな私はどこかで信じていた。
毎日痛いのを我慢していい子にしていれば、いつか両親も私を優しく撫でてくれる、甘えさせてくれる……そんな風に思っていた。
でも……そんなこと、あるわけがなかった。

私は検査で『駆逐艦　山風』の艦娘の適性があることが分かった。すると、両親は有無を言わさず私を軍へと入隊させたのだ。
深海棲艦との危険な戦いの最前線に艦娘は送られる。そのため、その家族には幾ばくかのお金が政府から支払われることになっている。両親の目的がそのお金だということは明らかだ。
私は……両親に売られたのだ。
そして私は艦娘として、激戦区である南方戦線へと送られることになる。
そこは『地獄』という言葉も生ぬるい、絶望の世界だった。
私のような小さな駆逐艦級は適性者も多く補給が容易な、いくらでも替えの利く存在。だから犠牲にするのならまずは駆逐艦から。そして毎日のように、誰かが二度と戻らぬ水底へと沈んでいく……そんな世界だ。
当然のように駆逐艦隊には怯えと諦めと絶望が蔓延している。
でもそんな状況でも……ううん、そんな状況だからこそ駆逐艦娘たちは一時の安心を求めてお互いに仲間を、友達をつくりグループが形成されていく。でも私は、そのどんなグループにも入ることはできなかった。
物心ついたころから日常的に両親に虐待を受け続けたせいだろう、『この人も私のことを虐めるんじゃないか？』という怯えがまず最初によぎってしまい、人の顔をまともに見ることができず、とても自分から誰かに話しかけることができない。たまに誰かが話しかけてくれても、どうしてもおどおどとうつむきながら小さな声で受け答えをしてしまい、話しかけてくれた娘もすぐにどこかに行ってしまう。せっかく話しかけてもらえたのに不快な思いをさせてしまったと落ち込んで涙ぐみ、さらに気落ちしてしまって全く同じことを繰り返してしまうという負のスパイラル。気がつけば私は家にいたころと同じく、この戦場ですら孤立していた。
だから、あれは当然のことだったんだろう。
「やっ……置いて……かないで……！」
いくら泣いて縋っても誰も助けてくれない……そんなことは今ま

での人生で分かり切ってたはずなのに……それでもそう言わずにはいられなかった。
本当にずっとひとりぼっちのままで終わるなんて……イヤッ!?
……その想いが届いたんだろうか、艦隊から1人の艦娘が私のところに戻ってきてくれる。それは『駆逐艦　暁』だった。
「ど、どうして……？」
「私もわかんない。
でも……こっちの方が一人前のレディらしいと思ったからよ！」
私の困惑に、暁はなぜか胸を張りながらよく分からないことを言うと私に肩を貸してくれたのだ。
……この時私は、浅ましくも内心で喜んでいた。それはこれで助かると思ったことではない。この状況では逃げ切るなんてできそうにない。でも死ぬのは私一人じゃない、道連れが、暁が一緒にいる……そう、思ってしまったのだ。そのことを、私はすぐに後悔することになる。
私と暁は敵に捕捉され、好き勝手に攻撃を受ける。私は恐怖で震えと涙が止まらなかった。その時ふと隣を見ると、暁も私と同じように恐怖で震えながら泣いている。
その時わかったのだ。暁だって怖くて怖くて仕方ないのに、私のためにやってきてくれた。それなのに、少しでも暁のことを道連れだと思うなんて、私はどうしようもないバカだった。
「もう、いいから……。
暁だけでも……」
「今さら何言ってるのよ。
レディは……こんなことじゃへこたれないわ！」
暁だけでも逃げてといっても、暁は決して私を離さず、見捨てない。
そんな彼女を私は死に巻き込んでしまった……そんな後悔が胸を締め付ける。
（神様……お願い、します。　暁だけでいいから、助けて！）
……神様なんていないのは知ってる。もしいるのなら、ずっと助けを願っていた、私への両親の虐待はずっと前に無くなっていただろ

う。それでも……神様なんかいないって知っていても、無力な私にはそう願うしかなかった。
そう、神様なんていない。でも……救いの手を差し伸べてくれる『誰か』はいたのだ。
私たちに『死』を届けるはずだった爆弾が、見たことのない噴式航空機の機銃で空中で爆発した。
そして……辺りを索敵する重巡リ級が、私たちと同じくらいの歳の男の子の持つ巨大なドリルメイスで叩き潰されるのを皮切りに、あっという間に敵深海棲艦はすべて男の子のてによって沈められていた。
「私たち……」
「助かった……？」
力が抜けてへたり込んでしまった私たちに影がかかる。あの深海棲艦を蹂躙した男の子だろう。だが男の子の艦娘なんて聞いたことがない。深海棲艦と同じくらい正体不明だ。もしかしたら今度は私たちを……。
あの巨大なドリルメイスで叩き潰される瞬間を想像してしまい、私は血の気が引いてしまった。隣では暁が私と同じような顔をしている。でも、このままにはできない。もう私も暁も力が抜けてしまって、逃げるような力は残されていない。
私たちは祈るように勇気を振り絞って、顔を上げる。
そして……私たちは運命に出会った。
「もう大丈夫だよ」
いつも他人を見ると『この人も私を虐めるんじゃないか？』と反射的に怯えが湧き上がるはずなのに、そんなものはまったく湧き上がってこない。
背中に背負った凶悪な艤装とは程遠い、優しい顔。そして心から私たちの身を心配しているのだとはっきりわかる不思議な優しい声。
その瞬間、私たちは助かったんだと決定的に理解した。
「「うわぁぁぁぁん!!」」
「わっ!?」
私たちはその男の子に抱きつくと、今までの緊張から解放されて声

を上げて泣いた。
男の子は突然抱きつかれて驚いたような声を上げるが、私たち2人を受け止めるとそのまま安心させるように頭を撫でてくれる。その温かさが、また私の心の奥底の何かを刺激して涙が止まらない。
……しばらくしてやっと落ち着いた私たちに男の子は『羅號』と名乗り、元の基地に帰るかこのまま自分と一緒に来るかを選んでほしいと言ってきた。
私と暁は迷うことなく後者……羅號に着いて行くことを選んだ。
もう死んだことになっているだろう私たちが元の基地に帰るわけにはいかない。どうせ生きて帰っても、次の戦いで同じように『死』を命じられるだけだし、基地に未練はない。
それにもし基地に帰ったのなら確実になぜ生き残ったのか追及される。私も暁も嘘は苦手だから、きっと羅號の存在がバレてしまうだろう。
そんなことになれば私たちを救ってくれた羅號に迷惑がかかってしまう……それが他のどんなことより嫌だった。
そして私たちは羅號に連れられてあの場所へ……『緯度0秘密基地』へとやってきた。
『緯度0秘密基地』に来てから、私は今までの人生が嘘だったような幸運に恵まれ続けている。
今まで食べたこともないようなおいしいご飯を当たり前のように出す食堂。そのための食料を生産する農場プラント。
各種資源を生産するプラントに、見たこともないようなすごい新兵器の数々とその技術で改修された私の艤装。
大切な友達もこの『緯度0秘密基地』で出来た。
助かった後、暁が「私の友達になってください」って言ってくれた時には嬉しくて少し泣いちゃったのはちょっとだけ恥ずかしい。
そして最後に彼……羅號に出会えた。
私の人生で初めて出会えた、強くて優しくてあったかい男の子。
彼のことを考えると胸がポカポカしてあったかい気持ちになる。
暁に話したら、暁も同じらしく「これは『恋』よ。私たち羅號に『恋』

しちゃってるの」とちょっと得意そうに教えてくれた。
これが噂に聞く『恋』なんだ……そう考えると、気持ちがストンと自然に胸に落ちた。そう、私は羅號に『恋』してる。そう自覚できた。
私は今、これ以上ないくらい幸福な日々を送っている。
……今でも自分に降りかかった幸運が信じられない時がある。この日々は、あの日あの海で死ぬ間際の一瞬に見ている夢なんじゃないかって思う時がある。
そんな怖い考えが浮かんでしまったときには、暁や羅號に会いに行くことにしている。
暁はいつも通りの明るさで接してくれるし、羅號はそういう時何かを察するのか温かい手で私を撫でてくれる。すると、私の中の不安は2人の温かさで溶けていくのだ。
……ああ、これだ。私は産まれてから今までずっと、このあたたかさを求めていたんだ。
今日は木漏れ日の気持ちいい庭でうたた寝をしてる羅號を見つけた。運がいいのか、あの3人はいない。
私は、暁と一緒に羅號の隣で同じように微睡みながら決意する。
（私、何でもするよ。
暁や羅號と一緒にいるためだったら、どんなことでも……）
例えどんな敵が現れようと、世界のすべてが敵になっても、私は戦い抜けるだろう。
私はこの時、誰かの命令ではなく、初めて自分で戦う意思を持てたのだった……。

駆逐艦　Ｚ３マックス・シュルツの出会い

……私は自分の運命は自分の力で切り開きたかった。
人はみな平等だというけれど、それは大嘘だ。
人間は産まれ落ちる時、すでに差がついて産まれる。それは家柄であったり才能であったり容姿であったり様々だ。
でも……それを自分の力で選び取った人はいるの？
産まれる前に神様の試練でも乗り越えてそれを手に入れたの？
答えは否、どこでどう産まれ落ちるかは完全に運だ。そして産まれてしまえば、人は持っている手札（カード）で生きていくしかない。
そんな私が産まれる瞬間に握っていたのは……『亡命外国人』という手札（カード）だった。
深海棲艦という謎だらけの人類の敵が現れてすでに１００余年がたっている。人類抹殺の意思を持って襲い掛かってくる深海棲艦の猛攻によって、人類はその版図を大きく削られていた。
私の産まれるずっと昔、今から約３０年ほど前に人類の一大拠点である欧州は深海棲艦の攻撃によって陥落した。深海棲艦は捕虜など捕りはしないし、人を支配するわけでもない。深海棲艦は占領した地域の人間を例外なく皆殺しにする。だから当然、その地に住む人々はそのまま徹底抗戦し深海棲艦に殺されるか、生まれ育った故郷を捨て逃げ延びるかの選択を迫られた。
そして私の祖父たちは生まれ故郷のドイツを捨て、逃げ延びる道を選んだ。逃げる場所は……日本。
日本はアメリカ・イギリスに並ぶほどの海軍大国であり、多量の戦力を有している。しかも当時の深海棲艦との戦いの主戦場は欧州方面、極東方面の戦況は多少なりとも落ち着いていた。
祖父は大学のころ日本文化に興味を持ち専攻していたこともあっての提案だったそうだ。それでも文化形態が欧州とまるで違う上に日本語の話せない祖母は日本に向かうことに抵抗があったようだが、結果的に言えばその祖父の判断は正しかった。

欧州からの最大の亡命先とも言えたブリテン島は、その約5年後に陥落した。

アメリカからの補給を受けて戦っていたイギリスだが、欧州からの大量の難民を受け入れたことで物資を大量に消費するようになってしまう。それを補うためにアメリカから大量の物資を買い付けるわけだが、その輸送船団に深海棲艦は襲い掛かった。

無論、イギリス海軍（ロイヤルネイビー）の艦娘やアメリカ海軍の艦娘たちも輸送船団の護衛についたが、それでもすべてをカバーできるわけではない。アメリカからの輸送船団の被害が増え、真綿で首を絞められるようにイギリスは疲弊していった。そして物資欠乏に陥った末に深海棲艦の上陸を許してしまい、瓦解した。

生き残った人々はアメリカに向かって脱出したが、広大な大西洋での深海棲艦の執拗な追撃により、最後のイギリス海軍（ロイヤルネイビー）の艦娘たちの決死の護衛にも関わらずアメリカ亡命船団のおよそ8割は海の藻屑と消えてしまう。

もし祖父が亡命先をイギリスに選んでいたら、私は産まれることすらできなかっただろう。そう考えると、最初に日本を亡命先に選んだ祖父は先見の明があったと言える。

だが、日本もイギリスの滅んだ様はしっかりと見ていた。そしてその滅亡の原因の一つに『亡命者』という要素があるのを理解していたのである。そこで登場したのが『亡命外国人』という言葉だ。

『亡命外国人』はその名の通り外国からの亡命者であり、『亡命外国人』は移動や結婚、職業選択に物資配給や受ける公共サービスに厳しい制限がついていた。ようは『二等国民』として元からの自国民とは明確に差をつけ、なおかつ消費される物資をある程度コントロールしようというのである。

『亡命外国人』はその子孫も自動的に『亡命外国人』になるし、『亡命外国人』以外との結婚には厳しい制限がついていて難しく、脱する手段というのはほぼ無い。

『平等』『博愛』は美しい言葉だけど、常に『最善』というわけではない。そうしなければ国が滅びる、今のような非常時ならなおさら

だ。
　そのため私の家は貧しく、いつもギリギリの生活だった。
「ごめんなさい。　あなたを『亡命外国人』の家に産んでしまってごめんなさい」
　優しい母はよくそう言って、泣きながら私を抱きしめてくれた。母のぬくもりは心地よくて好きだったが、その言葉は私は好きではなかった。
　母はもちろん、私は父も祖父も祖母も、家族すべてを愛している。その家族の元に産まれることができたのは、私にとっての何よりの幸運なのだ。なのに、何故母はそれを謝るのか？
　私は、私のことを心から愛してくれる家族に不満など何もない。私が不満を持つとしたら、それは『亡命外国人』という仕組みそのものにだ。
　自分の選んだ行いの結果として現状があるのなら、それは自業自得だと納得できる。でも何の選択もなく、産まれた瞬間からその道を歩くことを決められている……それが不満なのだ。
　……力が欲しい。逆境をねじ伏せ、運命を自分の手で切り開くような力が……。
　私に『ドイツ駆逐艦　Ｚ３マックス・シュルツ』の艦娘適正があると分かったのはそんな時だ。
　深海棲艦に対し、唯一対抗できる艦娘。その数はいくらあっても足りない。そのため『亡命外国人』に艦娘適正があると分かった場合、強制的に兵役につく義務があった。
　私が艦娘として戦地に行くと決まると、「まだ１０も生きていない娘を戦場に送ることになるなんて」と家族は私を心配して揃って泣いた。しかし艦娘、とりわけ駆逐艦級のような小型艦の適正者はほとんどが私と同じくらいの歳に集中している。歳はなんの言い訳にもならない。しかも、とうの私はこれをチャンスだと考えていた。
　艦娘として戦果を挙げ勤め上げた場合、国への貢献の褒賞として特例で『亡命外国人』では無くなるのだ。それに艦娘になれば、その家族には国からお金が支給される。これがあれば家族の生活にも少し

ぐらいの余裕は生まれるだろう。
私は家族のため、そして何より決められた運命を自分の力で切り開くために、艦娘として戦地に赴いた。
そしてやってきた戦場は……この世の『地獄』そのものだった。
私が配属されたのは、同じ『亡命外国人』の艦娘だけで構成された先発突入艦隊だった。どんな戦場であろうとも艦隊の先鋒として敵に突入していく一番槍……といえば聞こえがいいが、ようは主力艦隊突入までの間に敵に打撃を与え、かつ敵の弾を消費させるという囮の意味合いの強い、危険極まる艦隊である。
「ここでの平均寿命は2週間」……私の着任時、艦隊のリーダーを務めていた最先任のプリンツ・オイゲンさんが言っていた言葉は脅しでも何でもなかった。次々に仲間が沈んでいき、その涙を拭いきらないうちに次の仲間が沈む……それを繰り返すような艦隊だ。
そんな過酷な艦隊だが、艦隊そのものに不満はなかった。誰もかれも、同じ境遇だからと私を可愛がってくれたからだ。それは基地の日本艦娘たちも同様で、日本艦娘たちも私たちを『亡命外国人』ではない、同じ戦場を行く戦友だと扱ってくれたのはありがたかった。
だから不満があるとしたら上層部にだ。私の艦隊など軍上層部に多い思想らしいが、『死ぬならまずは外国人から』という考え方がよく分かる艦隊だろう。
私たちの必死の戦いを、献身を、何故上層部は正当に評価しないのか？
私たちが『亡命外国人』だからか？
そう愚痴をこぼす仲間に、プリンツさんは「じゃあ、もっと無視できないくらいに生き残って暴れてやらないとね」と笑って言った。
ああも損耗が多く地獄のような環境ながら、私の艦隊に悲壮さも諦めもなくいれたのはやはりプリンツさんの存在が大きかったのだと思う。私もプリンツさんのことは姉のように慕っていた。
いつ死ぬか分からない日々を送りながらも、私はそれなりに充実した日々を送っていたと思う。
だが……それもあの日に終わった。

その日も私たちの役目は、いの一番に敵へと突撃していくことだった。私たちの突入で敵が混乱し、とどめの主力艦隊が突入してくるというその時、主力艦隊に大量の水柱がたった。それは潜んでいた敵潜水艦隊による奇襲攻撃だった。

その攻撃によって運悪く主力である戦艦・空母がことごとく損傷、さらに損傷した主力艦隊を殲滅するためだろう、新手の艦隊が現れた。これで主力艦隊は元からいた敵艦隊、潜水艦隊、そして新手の艦隊と三方向からの半包囲を受けてしまったようになる。私たちの攻撃は完全に敵に読まれていて、まんまと策にはまってしまったというわけだ。

この事態に基地の司令はすぐさま撤退を決意。そして……当然のように私たちの艦隊に殿が命じられた。

ここが主力艦隊を葬るチャンスと追撃しようとする敵艦隊、それを食い止めようとする私たち……その戦いがどれだけ続いたか分からない。

「くぅっ!?」

近距離での魚雷の爆発の衝撃が、私の身体を容赦なく叩く。

艤装の各所で発生した火災を消そうと妖精さんたちがせわしなく動き回る。私はもうかなりの損傷を負っていたが、それでも私から闘志が消えることはなかった。

(どんな死地であろうと負けない！　そんな運命なんて自分の力で切り開く！)

私はその想いでいつものようにがむしゃらに戦った。装填の完了した魚雷を発射、敵重巡リ級に直撃し海の藻屑に変えてやる。思わずガッツポーズしかかるがその後ろから新手が現れ、私は砲を構えるものの妖精さんがまだ装填作業中であることに気付く。

「誰か、誰か援護を!!」

私は夢中で叫びながら振り返る。だが、そこにはもう誰もいなかった。

そこかしこで燃え盛る艤装と、もう動かない誰かの骸。血の赤とオイルの黒が海面を汚していた。そして……私の前に、あのプリンツさ

んの帽子が流れてくる。
それを見て、もう私しか生き残りがいないのだということを嫌でも理解してしまった。
敵は容赦も待ったもない。たった1人になった私に向かっていくつもの砲口が向けられる。
「ちぃっ!?」
至近弾のビリビリとした衝撃に歯を食いしばりながら、私は回避を続ける。しかし、傷ついた私の艤装はどんどん稼働率を下げていく。
「まだよ、まだ!!」
それでも私は諦めない、諦めきれない。
(私は、私はまだ戦える。　戦って……自分の運命を切り開く!)
だがどんなに戦意があろうと、どんな想いがあろうと戦場の現実は残酷だ。
「あぅっ!?」
敵戦艦ル級の主砲が、私の艤装の船尾を抉り取っていた。そして衝撃と爆発。その衝撃に私は海面にしたたかに叩きつけられていた。
身体がそこかしこで悲鳴を上げ、艤装は浸水がはじまり冷たい水底へとゆっくりと引き込まれていく。歯を食いしばって顔を上げた私の目に映ったのは突き付けられたいくつもの砲口だ。逆転の目は……無い。
(私は……自分の運命を切り開けなかったわね……)
濃厚な死の香りに、ついに私はすべてを投げてしまった。
結局、私には自分の運命を自分の力で切り開くような強さはなかったのだ。だから何もできず、『亡命外国人』として捨て石となって死ぬのだ。
……もう、休もう。
私はゆっくりと目を閉じて最後の時を待つ。だが……その最後の時は訪れなかった。
ブオォン!!
グシャァァァン!!
何かの風を切るような音、そして衝撃を伴う破砕音が響き渡る。で

も、私の身体に痛みはない。恐る恐る目を開く私は……その運命に出会った。
最初に目に映ったのは私と同じくらいの歳の、整った顔立ちの男の子の姿。柔和そうな雰囲気なのに、今はすべてを貫くような鋭い視線が印象的だった。そしてその姿から想像もできないような凶悪極まりない艤装をその背に背負っている。
その手にはこれまた凶悪極まる巨大なドリルメイスが握られており、それをフルスイングで振り抜いたような体勢だ。そのドリルメイスが深海棲艦の血でべっとりと汚れていたことからも、その見立ては間違いないだろう。私にトドメを刺そうとしていた深海棲艦たちが千切れ飛びながら彼方へと吹き飛んでいる。
そして、彼はゆっくりと倒れた私に振り向いた。
つい先ほどまでの深海棲艦に向けていた、すべてを貫くような鋭い視線などどこにもない。綺麗な、そして温かみを持った瞳だった。
血と硝煙の匂いの充満した戦場のど真ん中、そして私は死にかけだという事実も忘れ、それに見惚れる。
そんな私に彼は微笑むと、言った。
「大丈夫、すぐに助けるから」
たったその一言、それだけで自分は助かるのだと信じられた。だから緊張の糸が切れてしまったのだろう。私は怪我と疲労で、彼の大口径砲の咆哮を子守歌にしながら意識を手放した。

「ここ……は……？」
次に私が目を覚ましたのは見覚えのない部屋だった。恐らくは医療施設だろう、白い部屋に薬品の匂いがかすかに香っている。
「あっ、気がついたんだね」
そして私のベッドの隣に、彼がいた。
彼は『羅號』と名乗り、ここが自分が拠点としている『緯度０秘密基地』だと言った。そしてその特殊な事情をゆっくりと私に説明してくれたのだ。
「それでね、助けた時には聞けなかったけど……君に選択してほしい

ことがあるんだ」
そこで私に迫られた選択が、原隊へ復帰するかこのまま彼の仲間になってここに残るかということだった。
当然のように、私は後者を選んだ。
確かに私には本土に家族がいる。家族のことを忘れたことは一度たりとも無い。私がここに残れば、そんな家族の元には私の戦死の報が届いてしまうことへの申し訳ない気持ちはある。だがここで原隊に戻っても、同じように戦場で使い潰されるだけだろう。そうなれば今度は本当の戦死の報を家族に届けてしまう。
ならばここで生き残り、いつか家族の元に無事を報告に帰ればいい。そう羅號に伝えると今は無理でも、いつか必ず家族と会わせてくれると約束してくれた。
そして、私はこの『緯度０秘密基地』の一員になった。
ここは驚きに満ち溢れた場所だ。どこにもないような強力な武装や、外部からの補給に頼ることのない燃料・弾薬・食料などの生産プラント……元の場所とは完全に別世界である。
そこで私は羅號と、彼の兄である轟天の指揮の元で日々を過ごしていた。羅號は私たちを理不尽な目に合わせることはしない、理想的な上司だった。
……いや、自分の気持ちを偽ることはできない。正直に言おう。
私は彼、羅號に恋をしている。私は気がつけば彼を目で追い、彼の役に立ちたいと考えるようになっていた。彼は私の理想だった『自分の力で運命を切り開く』人だ。しかもまるで物語の英雄のように、私の命を助けてくれた。おまけのように優しく見目も最上という完璧ぶり、それに何の特別な感情も抱くなという方が無理な話だ。
だが……それは私だけに限った話ではなかったようだ。
羅號の周りには、いつも誰かがいた。聞けば全員境遇は私と似たり寄ったり、つまり私と同じ感情に至るのは当たり前ということだ。しかも私は最後発である。
だが……『ライバルが多いから』とか『出会ったのが一番最後だから』程度の理由でこの感情を捨てられるはずもない。

「何してるの？」
仕事を一つ終えた私は、羅號の良く居る中庭へと来ていた。
予想通りに彼はそこにいたが……その左右には彼に身体を預けて眠る、暁と山風の姿があった。
今日はあの３人がいないのは確認済みだ。あわよくば２人だけの時間を……と思っていたが、どうやら先を越されたらしい。
「うん、ちょっとみんなで昼寝をと思ってね」
「ふぅん……で、目が覚めても２人が寝てて動くに動けないと？」
「あ、あはは……」
どうやら図星らしい。
「それで、２人を起こさないようにどかすのを手伝ってほしいんだけど……」
「却下よ」
そう言って、私は彼の正面に座るとそのまましな垂れかかるようにして身体を預ける。
「ま、マックスちゃん……？」
「何？　私、今仕事を終えてきたところなんだけど？
２人には抱き枕替わりになるのに、そんな私は休ませてくれないの？
ふぅん……」
「そ、そんなことないよ」
そんな風に私が少し不機嫌そうに言うと、彼は慌ててブンブンと首を振ると私の為すがままにさせてくれる。クスリと小さく笑うと私は目を瞑り、長くはないだろうこの時間を楽しむことにしたのだった……。

転　驚愕、世界ノ真実

転戦

人類が深海棲艦という脅威と遭遇し、訳も分からぬまま絶え間ない戦いに突入してから早１００余年、人類その版図を3分の1にまで後退させながらも深海棲艦にあらがっていた。しかし、その状況が大きく、しかも悪い方向へと動く。

『怪獣』の登場である。

『怪獣』……その皮膚は並みの砲弾を弾き、その強靭な膂力は鋼鉄の装甲すら引き裂いた。ある個体は高速で空を飛び回り、ある個体は熱光線で攻撃を仕掛ける特殊能力を持つものまで存在する、まさしく常識を超越した巨大生物たちである。それがどういうわけか、深海棲艦と共同しながら侵攻を開始したのだ。

『怪獣』の登場を知った日本海軍は、即座に人類勢力である世界各国へと情報の提供と警告を行った。しかし、当初その反応はあまり良くはなかった。その理由は『怪獣』の能力があまりに桁違いすぎて現実味がなかったせいである。

戦艦級の艦娘の装甲を引き裂き、戦艦級艦娘の至近距離からの砲撃をものともしないような生物が突如として現れる……まるで特撮映画のような話で、そんなものをおいそれと信じられるほど人類の頭は柔らかくはなかったのだ。日本に資源と引き換えに戦力の提供をしてもらっている一部の国では、報酬を引き上げるための悪質なブラフだと日本を非難する国さえ出た。しかし、『事実は小説よりも奇なり』ということを人類はすぐに思い知る。東南アジア方面へ侵攻してきた深海棲艦隊、その中に『怪獣』が存在したのだ。

『怪獣』により東南アジア方面の護りの主力であるリンガ泊地艦隊はほぼ壊滅、東南アジア各島への深海棲艦の上陸を許してしまう。リンガ泊地艦隊も残存戦力をまとめ上げ、被害を最小限に留めるために島民の避難のための時間を稼ぐため、決死の戦いを展開する。

ここに至り、各国はやっと、『怪獣』の存在を現実のものだと理解した。

だが、理解すると同時に人々は絶望する。今までの深海棲艦ですら人類の手に余る相手だったというのに、さらに『怪獣』という存在まで敵として現れたのだ。どうしたらいいのか……蹂躙されていく東南アジア各島の状況を見ながら、そして『怪獣』の強大な力に危機感を募らせていく。

だが、それに対する日本海軍の対応に世界は度肝を抜かれることになる。日本海軍の援軍が『怪獣』を撃破、それだけでなく上陸した深海棲艦を追い落とし、東南アジア各島を取り戻したのだ。

深海棲艦によって版図を削られ続けた人類が、逆に版図を取り戻したという例はけっして多くはない。一体どんな魔法を使ったのか……するとそこには『ある艦隊』の存在が浮かび上がってくる。

見たこともない新型兵器を使う艦隊……当然のように各国はその艦隊のことを問うが、日本海軍はこの艦隊について多くを語ることはなかった。

そして人類と深海棲艦の熾烈な戦いは『怪獣』の登場によって、一層激しさを増していくことになる……。

オーストラリア領、シドニー沖……青く広がる美しい海は今、怒号と砲声、血と硝煙の香りが渦巻く鉄火場と化していた。

世界最大の戦力を持つアメリカが『アメリカ第一主義』によって自国防衛にのみ専念するようになると戦力の少ない中・小国は深海棲艦の攻勢によって一気に滅亡の危機に陥った。そんな各国が頼ったのが海軍大国である日本であり、日本は自国では足りない資源などを報酬としたいわゆる傭兵のように各国へと戦力を展開、現在の深海棲艦との戦いの中心的な立場になっている。しかし、すべての国がその状況を諸手をあげて歓迎したというわけではない。その1つがこのオーストラリアという国だ。

オーストラリアは白豪主義という、いわゆる差別意識が渦巻いている。そんな中でその対象である日本に頼るというのは本心では拒んでいた。
だが、そんなオーストラリアの事情など深海棲艦と怪獣にはあずかり知らぬ話だ。そのためオーストラリアは日本に頼るということを最小限にし、しかも思いのほか容易く日本海軍が奪われた東南アジア各島を取り戻りたことで、怪獣という戦力を過小評価してしまった。結果として防衛部隊はほぼ全滅、最終防衛線は容易く突破されオーストラリアの重要都市の1つであるシドニーが深海棲艦によって占拠されるという大敗北を喫することになる。
早急に深海棲艦を排除しなければシドニーを橋頭堡にオーストラリア全土が深海棲艦によって占拠され住民が皆殺しにされる……ことここに至ってやっとオーストラリア政府は事態の深刻さを理解した。恥も外聞も捨てて日本に対し援軍を要請、日本もオーストラリアを深海棲艦に奪われるわけにはいかず、現在日本海軍を中心としたオーストラリア救援艦隊による『シドニー奪還作戦』の真っ最中なのである。

「全砲門、斉射!!」
日本海軍の誇る戦艦『武蔵』が率いる砲撃艦隊、その一斉射が深海棲艦隊をなぎ倒す。
「……よし、どうやらこの海域は制圧できたらしいな」
連戦による疲労からか、にじんだ汗を武蔵は拭う。しかし、決して周囲への警戒は怠っていない。今まで幾多の修羅場を超えてきただろう、そんな歴戦の艦娘の貫禄が彼女には漂っている。
そんな武蔵の元に、慌てたように駆逐艦娘が近付いてきた。
「武蔵さん!」
「どうした、清霜!?」
「探信儀に感! 何か、何か巨大なものがこっちに!?」
その悲鳴のような声に、武蔵は即座に叫んだ。
「各自散開! 『怪獣』が出たぞ!!」

その指示に即座に反応して艦隊は散開した。よく訓練された、見事な動きだ。だが、怪獣の出鱈目さはその上を行っていた。
「ぐぅ!?」
「武蔵さん!!?」
海面が突如として盛り上がると、そこから鋭い牙を大量に生やした巨大な顎が迫る。巨大な海イグアナのような形の怪獣が喰らい付いてきたのだ。
武蔵はとっさに隣にいた清霜を突き飛ばすと、その顎に捕らえられてしまった。日本海軍の、ひいては世界最高の強度を誇るだろう大和型戦艦の装甲がひしゃげていく。このままでは武蔵が噛み潰されるのは時間の問題だ。
その時。
ドゴォォン!
グギャァァァァ!!
どこからともなく飛来した、魚雷のようなものが怪獣の横っ面に叩き込まれる。まるで真横から殴りつけられたような爆発の衝撃で、怪獣はたまらず咥えていた武蔵を離す。
「武蔵さぁん!」
「大丈夫だ、まだ生きてる……」
慌てて駆け寄ってきた清霜に答えながら、武蔵は怪獣の方を見た。怪獣が最大限の警戒をするその視線を追うと、そこには巨大なドリルを持った男の艦娘（艦息?）が宙に浮いていた。そしてその男の艦娘（艦息?）の声が戦場に響く。
「こちらはE・D・F艦隊所属、轟天だ。　怪獣は俺に任せて早く退け!!」
言葉と同時にその男の艦娘（艦息?）、『轟天』から光線が怪獣めがけて発射される。たまらず海中へと潜る怪獣を、間髪入れずに『轟天』は空中から飛び込むようにして海中へと潜航して追っていく。
後にはあまりのことの連続に言葉を失った艦隊だけが残っていた。
「い、今のは……」
「ああ、あれが噂の対怪獣秘匿艦隊E・D・F、その旗艦の『轟天』ら

しい。
私も見るのは初めてだ」
しばしの間呆然とする武蔵だがハッと我に返って指示を出す。
「艦隊、今すぐにこの海域を離脱！　いったん後方に下がり、別方面の友軍の援護に向かうぞ!!」
武蔵の指示に、艦隊は素早くこの海域から脱出していった。

～～～

よって防がれているものの、ギリギリと絶えず強力な顎の圧力は増している。このままではいつかジラの牙は轟天の装甲を貫くだろう。
しかしそんな絶体絶命の状況に陥ったはずの轟天は、ニヤリと不敵な笑みを漏らす。
「俺は海底軍艦『轟天』だぜ。　俺の攻撃距離に……死角はない！」
瞬間、轟天の身体から強烈な電撃がほとばしった。
怪獣には船体に取り付いてくる相手も存在する。それに対抗する手段として轟天は『超高圧電流放電攻撃』ができるのだ。
その電撃にしびれたジラの顎が緩み、轟天の拘束が解けた。そのチャンスを逃さず轟天は攻撃に移る。
「フルメタルミサイル、全弾発射!!」
いかに素早いジラといえども、高圧電流でしびれた挙句目と鼻の先から放たれたフルメタルミサイルを避けることはできなかった。
ズドォォォン!!
何発ものフルメタルミサイルが爆発した衝撃で巨大な水柱が立ち、それに押し上げられるようにして吹き飛んだジラはそのまま抵抗も出来ず陸地へ向けて吹き飛んでいく。そしてジラはシドニーのランドマークともいえるオペラハウスへと突っ込んだ。
オペラハウスを瓦礫の山に変えながら、それでももがきながら体勢を立て直そうとするジラ。しかし、すでにその結末は決していた。ジラを追って空中に飛びあがった轟天が、自慢の光線兵器すべての照準をジラに合わせていたからだ。
「全武装、オールファイア!!」
メーサーキャノンや熱光線砲が連続してジラに命中した。ジラの怪獣にしては脆弱な防御ではそれに耐えることはできない。ジラは断末魔の雄たけびを上げながら、爆炎の中に消えていった。
「敵怪獣、殲滅……」
轟天は油断なくジラのいた場所を見つめるが、怪獣の生体反応が完全に消えていることを確認するとそこではじめて緊張を解いた。
「まぁ、マグロ喰ってるようなのじゃこのぐらいだろ」
軽口を叩きながら身体をほぐすように息をつくと、轟天は仲間へと

状況を確認するために通信機を起動させた。
まずは陸の方で駆逐艦を率いて作戦中だろう、村雨からだ。
「俺だ。　敵怪獣は殲滅完了。
そっちは……」
しかし轟天が言い終わるよりも早く、切羽詰まった村雨の声が通信機から飛び出す。
『ごめん轟くん！　今こっちは手が離せないの!!』
その裏からは連続した砲声と怒号、そして何かの動物……まるで恐竜の鳴き声のようなものが聞こえていた……。

探索

時間は少しさかのぼる。
E・D・F艦隊の最古参の1人、秘書艦である村雨はE・D・F艦隊所属の5人の駆逐艦娘……不知火・霞・叢雲・長月・文月を引き連れて行動していた。しかしそこはいつもの青い海ではない。そこはコンクリートの壁で囲まれた所々に頼りない照明があるだけのうす暗い通路だ。村雨たちの足元からは水の跳ねる音がし、時折どこからかピチャンピチャンと水の滴る音が聞こえる。
ここはシドニーの街の地下、下水道の中だ。
「まったく……鼠輸送は得意だけど、まさか本物のネズミの真似事をすることになるなんてね」
「まったくだ」
霞のぼやき声に、長月が相づちを打つ。しかし2人とも周囲の警戒には余念がない。
「長月ちゃん、大事なお仕事なんだから文句言ったらダメだよぉ」
「それは分かってるがな、文月」
長月をたしなめる文月。その時、遠くからかすかに爆発音が聞こえ、パラパラとホコリが頭上から落ちてくる。シドニーでは海上の戦いと並行して、地上部隊が深海棲艦隊の上陸部隊と市街地戦の真っ最中だ。
「今は戦いの真っ最中、上ではE・D・Fの仲間たちも戦っているんだ。任務の重要性は理解しているが調査任務なんて、戦闘がすんだ後でも……」
「……だそうよ、秘書艦どの」
このシドニー市街地戦には他のE・D・F艦隊の仲間も参加している。それがすんでからでもいいのではないかと長月は言うが、叢雲に話を振られた村雨は即座に首を振った。
「ダメよ。轟……天司令が言っていたことを忘れたの？」
いつものように『轟くん』と呼びそうになったのを慌てて飲み込み

ながら村雨は言う。
　こんな戦闘中に強力な戦力である村雨たちE・D・F艦隊所属の艦娘がこんな地下に潜っているのは、村雨が轟天からの指示を受けたからだ。
『悪いんだが、何人か率いて地下を調べてくれないか？　ちょっと気になることがあるんだ。
　まぁ、杞憂だといいんだが……』
　作戦前の事前の偵察では怪獣の種類までは不明だった。しかし怪獣襲撃から運良く生き残った人員からの聴取によって、轟天はシドニーを襲った怪獣が『ジラ』である可能性を見抜いていた。
　そして、『ジラ』の本当の厄介さを轟天は村雨に語っていた。ジラは繁殖力が高い怪獣であり、卵によって繁殖するのだ。出現して間もないもののその可能性を轟天は危惧し、もっとも信頼する村雨に調査を頼んでいたのである。
「もしも司令の予想が的中していたとしたら、敵怪獣がどこかで卵を産んでる可能性があるわ。
　怪獣が増えるなんて悪夢以外の何物でもない、早急な調査が必要よ」
　そう有無を言わせぬ口調で言うと、先導するように歩き出す。その姿に他のメンバーは軽く肩を竦めると、揃って歩き出した。
　そのやる気に満ち溢れた村雨の姿に、彼女と特に仲がいい叢雲・不知火・霞はその感情を読み取る。
（ああ、司令に特別頼りにされて嬉しいのね）
（ええ、そのようで）
（舞い上がっちゃって。バッカじゃないの）
　司令である轟天と艦隊秘書艦である村雨がただならぬ関係だというのは、E・D・F艦隊の中では『公然の秘密』というやつであった。
　村雨本人はうまく隠しているつもりのようだが、毎夜のように轟天と同じベッドで寝て、翌朝早くに自室に戻るという生活を続けているのだから目撃されていないほうがおかしい。早朝に轟天の部屋から寝間着姿で出てくる村雨の姿を見た艦娘は相当数いる。しかも村雨

は最古参の1人であると同時に、重要な決定や会議には必ず轟天とともに出席し、さらに何かにつけて轟天と一緒に行動しているとなればそんな噂がたつのは自然な成り行きだった。
　もっとも真実は、仲間が次々と使い捨てにされ死んでいく過酷な戦場で戦っていた過去のトラウマのせいで1人で眠れない村雨と、その事情を知る轟天が一緒に寝ているだけで特に恋人同士というような甘い関係ではない。確かにお互いに憎からず思っているだろうが、少なくとも現段階では本人たちはそういう関係に至っていないのだが、そのあたりを知らない外野からすれば関係のない話だ。
　その噂を知らないのはE・D・F艦隊では当事者である轟天と村雨くらいのものだろう。轟天の弟である副司令の羅號も、その取り巻きともいえるラヴァーズ艦隊の面々ですら当然知っており、納得して陰ながら祝福しているくらいだ。
　そんなわけで、不知火たちからすれば今の村雨の姿は、恋人に頼りにされて舞い上がっているようにも見えた。彼女たちにしても友人が幸せなことはいいことだと感じながら、任務中に危ないようならフォローしてあげないと……と妙な使命感を感じていた矢先、急に立ち止まった村雨に後ろを歩いていた霞がぶつかってしまう。
「何よ、いきなり……」
　抗議の声を上げようとした霞の口を、村雨が素早く塞ぐ。その顔は真剣そのものだ。
　その様子に全員が真剣な様子で、「何かあったのか?」と表情で訴える。するとそれを察した村雨は一歩退くと、進んでいた先を指さした。
　何事かとそこを覗くと、そこには……。
「ちょっと……嘘でしょ……」
　思わず叢雲が言葉を漏らす。
　そこは大きな縦穴のような場所になっていた。地上から続く大穴だが、ビルか何かがその穴を塞ぐ形で覆い隠しているのだろう、漏れ入る光は弱々しく、それと元から地下にあっただろう照明がその場の光のすべてだ。だがそんな光でもはっきりと、その場にある『卵』の

姿を浮かび上がらせている。その大きさは村雨たちの身長をゆうに超える。こんな巨大な卵は、普通の生物のものであるはずがない。間違いなく怪獣『ジラ』の卵だ。
そして……それがいくつも薄暗い闇の中に浮かび上がっている。
「……全員、探照灯準備」
「……」
薄暗いこの場所の全貌を確認するために全員で探照灯で照らそうという村雨の指示に黙って頷き、そして6基の探照灯の光によってその場の全貌が明かされる。
卵の数は軽く50を超える。それが綺麗に円形に並べられていた。巨石のような大きさのそれが並ぶ様はまるでストーンサークルである。そしてその子供のためのエサだろうか、その中心にはうず高く魚が山と積まれていた。
「「……」」
その光景に全員の背筋を冷たいものが走る。もしこれが誰にも知られずに孵っていたとしたら、間違いなく人類滅亡ものの案件だからだ。
「……どうしますか、村雨？」
「持ってきた爆薬、明らかに足りないわね……」
いち早く衝撃から立ち直った不知火が村雨に指示を仰ぐと、村雨は困ったように天を仰ぐ。卵を破壊するために時限爆弾を村雨たちは持ってきていた。しかしそれもせいぜいが10個程度、この卵の数は完全に想定外で数が足りない状態だ。
「仕方ない。砲撃ですべて破壊するしかなさそうね。
くれぐれも崩落に気を付けながらやりましょう」
村雨の言葉に全員が頷いた、その時だった。

ピキピキッ……

そこかしこから何かが割れるような音がしたかと思うと、次々と卵の殻を破ってジラの子供たちが出てくる。

「みんな、物陰に！」
村雨の鋭い声に、全員が探照灯を消して物陰に身を隠した。
卵から孵ったジラの子供たちは一目散に積まれた魚の山に向かうと、一心不乱に魚をむさぼり食う。
「うわぁ……すごい食欲だねぇ」
「ああ、あの勢いだとあれだけの魚の山もすぐに無くなるぞ」
息をひそめ様子を伺いながら、文月の言葉に長月が返す。
するとその時、何かに気付いたのか不知火が自分の腕を顔に近付けてスンスンと鼻を鳴らした。そして不知火はそのまま仲間の１人１人に同じようにして鼻を鳴らして廻る。
「どうしたのよ、不知火？」
「村雨……私たち全員、魚臭いです」
「えっ!?」
言われて慌てて全員が自分の匂いを嗅いでみると、確かに不知火が言うように魚臭い。この空間にいたことで、どうやら魚の山の匂いが移ってしまったようだ。
「ちょっと待ちなさいよ。　今ここで魚の匂いなんてさせてたら……」
そう、思い至りたくないことを閃いてしまった叢雲の言葉は最後まで続けられなかった。

ジャリ……

不吉な足音に全員がその方向に視線を向ける。魚の山を喰い尽した子ジラたちの物言わぬ双眸が、村雨たちが隠れる物陰へと向けられており、にじり寄るようにゆっくりと近付いて来ていた。
「……どうする、村雨？
あの行儀の悪い欠食児童ども、完全に私らのことを新しいエサだと思ってるわよ」
「……総員、合戦用意」
霞の問いに村雨が答え、全員が頷きながら武器の安全装置を解除す

る。
そして……。
「全員脱出するわ！　出口まで走って!!」
物陰から飛び出し、砲を撃つと同時に村雨は叫ぶ。そしてそれは彼女たちと子ジラたちの命がけの追いかけっこの、スタートの号砲だった。

～～～

一瞬の出来事に思わず呆ける長月の肩を村雨が叩く。
「何やってるの！　不知火たちの後退を援護するわよ!!」
「あ、ああ!!」
言われて膝立ちになると、村雨・叢雲・長月はこちらへ走ってくる不知火・霞・文月を追ってくる子ジラに向けて砲を連射した。ズガンズガンとオート・メラーラ１２７ｍｍ単装速射砲の重い射撃音が響き渡る。
その時、村雨の通信機から轟天の声が聞こえた。
『俺だ。　敵怪獣は殲滅完了。
そっちは……』
「ごめん轟くん！　今こっちは手が離せないの!!」
そう叫んで一方的に村雨は通信機を切った。その様子に長月は目を丸くする。
「いいのか、司令からの通信を？」
「今は一秒も手が離せないんだし、生きて帰れたら後でいくらでも謝るわよ！
それより叢雲、アクィラさんへの空爆要請は!?」
「とっくの昔に終わってるわよ！
さっきの巣のあった辺りを全力で集中爆撃するから早く退避してくれって!!
空爆の爆風なんて受けたらこんな地下道一発で崩落、急いで脱出しないとみんな仲良く瓦礫でペシャンコよ!!」
「言われなくても急ぐわよっ!!」
子ジラの集団が集中砲撃で怯んだ隙に、村雨たちは出口に向かって走る。村雨たちは執拗な子ジラの追撃を凌ぎながらついに出口近くへとたどり着いていた。
「出口よ、みんな急いで!!」
「!?　村雨、アクィラさんの空爆が開始されたわ!!」
「ッ!!?」
後ろを見れば、狭い下水道の奥から渦巻くように爆炎が迫ってきており、地下道全体の崩落も始まっていた。

「は、走れぇぇぇ!!」
もう全員、後ろを振り向かずなりふり構わぬ全力疾走だ。そして出口から飛び出すと、全員が倒れるようにして身を伏せる。次の瞬間、爆炎が下水道から噴き出し、下水道が崩落する。
その光景を見ながら村雨たちは、全員が力尽きたかのようにへたり込む。だがそんな彼女たちの前で瓦礫が動き出すと、1匹の子ジラが這い出てきた。しかしその姿は血まみれの満身創痍の状態である。
「はぁ……」
村雨は面倒くさそうに砲を持ちあげると、無造作にトリガーを引いた。放たれた砲弾が狙い違わず子ジラの頭部に叩き込まれ、今度こそ子ジラは息絶える。それを確認して、村雨は通信機のスイッチを入れた。
『村雨、どうした！　無事か！
そっちはどうなったんだ!?』
「あー、うん、無事無事。みんな無事。
ちょっと怪獣の巣で、元気すぎる怪獣ベビーと追いかけっこしてたから。
しっかり始末はつけてきたわよ」
疲れ切っているのか、非常におざなりに報告をする村雨。
「というか、あんなにたくさんの卵があるなんて村雨聞いてないんですけどぉ？」
『……悪かったよ、俺も読み違えた。
とにかく、無事でよかった。　いったん前線基地へ退いて休んでくれ』
「はいはい、了解よ。
……轟くんも早めに終わらせて無事に帰ってきてね」
『ああ、わかったよ』
それで轟天の通信は切れた。
「ふぅ……さて、これで任務は終了。
前線基地まで退くわよ」
轟天との通信を終え、一息ついて村雨が振り返りながら言うが、疲

労困憊の仲間からは「了解」の声はなく、ただ手を挙げてその意思を伝える。
やがてゆっくりと、お互いに肩を貸しながら立ち上がった村雨たちは前線基地へと帰還するのだった……。

～～～

『怪獣です！　怪獣の奇襲を受け……私たちを庇って羅號が大けがを！』

それを聞いた瞬間、轟天は即座に空中へと飛び出していた……。

危機

怪獣の攻撃によって羅號が大けがを負った……その知らせをラヴァーズ艦隊から聞いた瞬間、轟天は反射的に空中へと飛び出していた。その場所へと急ぐ轟天の通信機から、ラヴァーズ艦隊の会話が漏れ聞こえる。

『らーくん、らーくん!!』

『ロー、落ち着いて！　羅號を連れて全力で撤退するわよ!!』

『あさしー、マズいよ！　レーダーに反応、この周辺の深海棲艦がここに集まってきてる！

このままだと包囲されちゃうよ!!』

『なんですって!?』

『……深海棲艦は任せなさい。先行して退路を確保しているわ。

あなたたちは無事羅號を退避させることだけを考えて。

暁、山風……付いてきて！』

『了解、このレディに任せなさい！』

『うん、私頑張る!!』

『ローはそのまま羅號を連れて移動して！

リベは私と一緒にあの怪獣を少しでも足止めするわよ!!』

『この！　このこの!!』

『何なのこの泥田坊、砲も誘導噴進弾（ミサイル）もまるで効いてない!?』

……通信で聞く限り、どうやら戦場では逃げる羅號を連れたラヴァーズ艦隊、それを追う怪獣と包囲殲滅を狙う深海棲艦との戦いとなっているようだ。それが漏れ聞こえる通信からの断片的な情報から見て取れる。

轟天はすぐに村雨へと通信を繋ぐ。

「村雨、非常事態だ！

羅號が敵怪獣により負傷、撤退中だが敵怪獣と深海棲艦の追撃を受けている。

今、俺は現場に急行するから、救援の艦隊を寄越してくれ!!」

『わかった、私が何人か連れて向かうわ』

「疲れてるところ悪いな。　座標を送る、艦隊を率いてそこへ急行してくれ」
『了解よ、轟くん……気を付けてね』
「ああ」
　村雨との通信を終えて轟天が考えるのは、やはり敵怪獣のことだ。
（『泥田坊』なんて例えられる怪獣といえば……）
　そしてついに轟天はその現場へとたどり着いた。
「はは……こいつか。確かに『泥田坊』だな。
　だがまぁ……『泥田坊』にしちゃ、ちょっと臭すぎるだろ」
　呆れたように苦笑いする轟天がいうように、そこにいた怪獣はまるで妖怪の泥田坊のような泥人形のような容姿をしていた。しかし周囲に立ち込める鼻につく悪臭が、それが額面通りの泥ではないことを物語る。それは泥は泥でも、腐り切ったヘドロなのである。
　ヘドロの塊とも形容できる容姿で、その怪獣は不気味な縦長の目玉をギョロリと轟天に向けていた。
「敵怪獣『ヘドラ』を確認。
　ちぃ……連戦でよりにもよって相手がコイツかよ」
　言いながら轟天はメーサーキャノンを発射、それにヘドラがひるんでたたらを踏む。その隙に轟天は着地すると羅號、そしてラヴァーズ艦隊と合流した。
「司令！」
　相当切羽詰まっていたのだろう、ラヴァーズ艦隊から喜色を含んだ声が上がる。怪獣であるヘドラに追われ深海棲艦に包囲されかかっていては切羽詰まるのは当然だが、それでも全員が大きなけがもなく上手くここまで退いてこれたのは彼女たちの技量ゆえである。大好きな羅號の隣にいたいと努力を怠らなかった彼女たちの示した確かな結果だ。
　轟天はそのことに満足そうに一つ頷くと、ローに肩を借りている羅號を見た。
「派手にやられたな」
「……面目ない」

悔しそうにこぼす羅號。その右半身は焼け爛れたような怪我を負っている。その巨大で重厚な艤装も同じように損傷を負い、右の半分はほとんど無くなっている。しかし、その破壊の跡は奇妙なものだ。

砲や熱光線のように焼き切れたり衝撃で千切れ飛んだりした様子がないのである。代わりに腐食した構造材が奇怪なアートのように佇んでいた。これはヘドラの強力な溶解光線による損傷だ。

「らーくんはろーちゃんたちのことを庇って……」

「ああ、わかってる。　責める気はないよ」

轟天が叱責するとでも思ったのか羅號を庇う言葉がラヴァーズ艦隊から次々に飛び出すが、轟天は心配ないと手をひらひらさせる。むしろ海底軍艦である羅號の装甲だからこそこの程度で済んだのだ。これをラヴァーズ艦隊の誰かが受けていたら、今頃骨すら残っていないだろう。そういう意味では被害を最小限に抑えた結果だ、轟天には羅號をねぎらう気はあっても責める気は毛頭ない。

むしろ……。

「しっかし……お前も運がないな」

どこか憐憫を含んだような口調の轟天。

ヘドラはまるでヘドロの塊のような容姿の怪獣だ。それは宇宙生物が変異を起こして周囲のヘドロを吸収して成長したものであるとか、環境破壊の影響で突然変異したバクテリアの一種がヘドロを吸収し集合したものなど、その正体には諸説ある。しかし確かなことはその体はヘドロの塊のようなものであり、物理攻撃に対して極めて高い耐性を持っていることだ。そんなヘドラに対し、強力な物理砲を主兵装とする羅號では相性が悪い。

当然羅號もすべての怪獣に勝つことを目的とした海底軍艦だ、対抗手段はある。だがその肝心の対抗手段……数少ない光線兵器は溶解光線によって完全に溶け落ち、主砲の弾種変更・給弾システムまでも溶け落ちていた。当たり所が悪すぎである。

「まぁいい、ここは俺に任せて全員急いで退け。

このままここにいると、毒で全員お陀仏だぞ」

轟天の視線の先では体勢を立て直したヘドラがゆっくりとこちらに向かって来ている。ヘドラは怒ったかのように全身の各所から蒸気のようなものを噴き出していた。しかし、それは蒸気などという生易しいものではない。それは毒の霧『硫酸ミスト』だ。
硫酸ミストに巻き込まれれば金属は激しく腐食し、生命体は動植物問わずたちまち絶命するような凶悪極まりないしろものである。生身の人間よりもずっと頑丈な艦娘といえど、巻き込まれれば長くはもたないだろう。
「今、村雨の方にも連絡して救援がくる。
途中で深海棲艦の部隊がいるだろうが……それを突破して撤退しろ。
羅號を頼むぞ」
「……わかりました、司令のその信頼に応えます！
ご武運を！」
代表した朝潮の言葉とともにラヴァーズ艦隊が綺麗な敬礼をして、羅號を連れて後退を始める。羅號は何か言いたそうだったが、自分の損傷を分かっているので残って戦うとは言いださなかった。
一人残った轟天はゆっくりと浮かび上がると、正面からヘドラを見据える。
「来いよ、哀れなヘドロの化け物。
ここで焼却処分にしてやる！」

キロロロロロッ!!

轟天に応えるように奇怪な鳴き声を上げると、ヘドラが襲い掛かってくる。ヘドラは轟天に向かって溶解光線を発射、しかしそれを空中で一気に加速した轟天がよける。
「今度はこっちの番だ。
メーサー第一から第五、一斉発射!!」
轟天から放たれたメーサー光線がヘドラに直撃し、ゴミを燃やした時のような悪臭が周囲に立ち込める。その攻撃にヘドラは苦悶の声

を上げた。
ヘドラは前述したようにヘドロの塊のようなもので極めて高い物理攻撃に対する耐性を持っている。だがそれと同時に弱点も存在していた。それは『熱による乾燥に弱い』ということだ。そのため轟天のメーサー光線はかなりのダメージを与えていた。つまり羅號にとってはヘドラは相性最悪の相手だが、高熱高威力の光線兵器を主兵装にしている轟天にとっては、相性のいい相手なのである。
無論、ヘドラもやられっぱなしというわけではない。轟天に対し連続して溶解光線を放ち、さらに身体からヘドロの塊のようなもの……これも強力な溶解力を持つヘドロ弾をミサイルのように飛ばしてくる。しかし轟天には当たらない。
ヘドラの動きは、怪獣の中でも鈍い方だ。先ほど轟天が戦ったジラと比べれば雲泥の差がある。もちろん羅號の装甲を溶解するような高い攻撃力は脅威だ。しかしそれもしっかりと観察していれば、攻撃の予兆から轟天にとっては回避することは十分に可能だ。
羅號は奇襲を受けたこと、そしてラヴァーズ艦隊を守るためにあれだけの傷を負ってしまったのだ。もしそれが無く、最初からヘドラと正面から相対していれば、時間はかかるだろうが羅號もヘドラと互角以上には戦えただろう。
ヘドラは言ってみれば『初見殺し』の怪獣だ。何も知らずに戦えば厄介なことこの上ないが、その特性が分かってしまえば対処の方法はいくらでもある。そしてそのための知識が、轟天と羅號の頭の中には存在する。
(しかし……この怪獣についての豊富すぎる知識の出所は一体どこなんだろうな?)
轟天はふと思う。
轟天と羅號は過去の記憶が何もない。そのくせ怪獣の特性や弱点などの怪獣のことに関してだけは、遭遇したり目撃情報や推測できる状況に遭遇すると頭の中から自動的にスラスラと出てくるという奇妙極まる状態である。そしてその知識の中には、実際に戦ったことがなければ知りえないだろう知識も数多く存在していた。

（……やっぱり俺たちは『過去の住人』なのかね？）
『はじまりの妖精』が怪獣を封印したという約１００年前、それに立ち会い何らかの手段で現在まで眠っていた人間ではないかという、村雨がたどり着いていた仮説に轟天もたどり着いていたが、同時にそれだと腑に落ちない点があることにも轟天は気付いていた。
（だとしたら、何で俺や羅號は海のど真ん中で意識を取り戻した？）
轟天と羅號が確かに思いだせるもっとも古い記憶は、大海原の真ん中で目を覚ました時のものだ。そして艤装の妖精さんたちに導かれ、緯度０秘密基地に向かった。
もしこの目覚めた場所が緯度０秘密基地のような何かの施設であったならまだわかる。そこに１００年間眠りにつくような何かの設備があったと考えられるからだ。だが、海のど真ん中ではその説明がつかない。
答えにたどり着くには、まだ足りないピースがある――――そんなことを轟天は漠然と感じていた。
そんなことを考えていた轟天は、妖精さんたちの声で我に帰る。
「おっと!?」
轟天に迫っていたヘドロ弾をメーサー光線で撃ち落とす。
「……悪かった。
対怪獣戦なんだ、息の根を止めるまで注意を疎かにするなんて論外だったな」
非難じみた妖精さんたちからの視線にバツ悪そうにすると、轟天は今までの思考を頭の隅に放り込んで、目の前のヘドラとの戦いに集中することにした。

キロロロロロッ!!

連続したメーサー光線に焼かれ、ヘドラのダメージは間違いなく蓄積されている。心なしか、ヘドラの大きさが最初よりも小さい。これもメーサーによって水分が一気に蒸発してしまっている影響だろう。堪らなくなったのか、ついにヘドラは前のめりに倒れるようにしてう

ずくまった。
「やったか？」
轟天の期待を込めた声、しかし……。
「何ッ!?」
ゾワゾワとヘドラの身体が蠢き出したと思ったら、ヘドラの形状が人型から変わっていく。その時になって、轟天の脳裏に閃きのように情報が浮かんできた。
「飛行形態か！」
まるでエイのような形状に変化したヘドラが、硫酸ミストを勢いよく噴出させ、それを推進力に空中へと飛び出す。
「ちぃ!?」
怪獣の被害というものは目に見える破壊だけではないが、特に動く有毒プラントともいえるヘドラはその傾向が強い。ヘドラ本体のもたらす破壊以上に、周辺環境に与える被害が大きすぎる。もしもあれがこのオーストラリア大陸の穀倉地帯にでも飛来したら、豊かな穀倉地帯は草一つ生えぬ汚染された土地に変わり、人類勢力は飢えに苛まれることになるだろう。
轟天はヘドラを叩き落とそうと全力射撃を行うがヘドラも必死だ、そうやすやすとは落ちない。だがその瞬間だった。
ヒュー、という空気を切り裂く音が響き、次の瞬間飛行しているヘドラに大爆発が起きる。同時に物凄い勢いで炎が生まれ、ヘドラを焼き焦がす。
「今のは!?」
慌てて周囲を見れば、そこには見慣れた噴式航空機の姿があった。羅號の艦載機である『氷龍』だ。撤退中の羅號が氷龍による観測射撃で、ヘドラに超高温ナパーム砲弾を叩き込んだのだ。
「サンキュー、羅號」
轟天は羅號の援護に感謝しながら、ヘドラの様子を見る。ヘドラは大爆発を真上から受け、さらに高温の炎に巻かれたことで叩き落とされるように地面に落ちていた。地上でもう一度飛び立とうともがくが、燃え盛る炎の中ではまともに動けていない。この千載一遇のチャ

ンスを、轟天は逃さなかった。
「全兵装オールファイア！　あのヘドロ野郎を塵も残すな!!」
その轟天の号令とともに轟天からメーサー光線が連続して発射される。構えたドリルの先からも、轟天の必殺兵器であるドリルスパイラルメーサーキャノンが連続発射され、それがヘドラへと吸い込まれていく。

キロロロロロッ

ヘドラはもがき、溶解光線で轟天に反撃もしてきたがしばらくするとそれもなくなり、カラカラに乾いたヘドラが砕けながら崩れていく。轟天はしばらくメーサー光線の照射を続け、完全にヘドラか崩れ落ちるまでそれを続けた。そしてそこでやっと一息をついてメーサー光線の照射を止める。
「敵怪獣、殲滅……」
辺りを確認すれば、深海棲艦の抵抗も止んでいた。そしてタイミングよくこの作戦の司令部から本作戦の成功を報告する通信が入る。
「人類（俺たち）の勝利、か……」
だがその報に浮かれることもできず、轟天は手早く撤収を始めるのだった……。

～～～

かに酒でのどを潤す。そんな元帥に声をかけたのは、彼の息子でありこの作戦に参加した提督の1人であるトラック泊地の中條提督である。
「戦勝の宴だというのに、浮かない顔ですね」
「……分かるか？」
日本海軍が中心となった今回の作戦では中條元帥は勝利の立役者、ということになっている。そんな中條元帥がせっかくの宴で浮かない顔をしていては皆も楽しめないだろうと努めて機嫌の良いポーズをしてきたつもりだったが、やはり実の息子には分かってしまうらしい。お互いに壁を向いて並ぶと、小さくため息をついた。
「今回のシドニー奪還作戦で遭遇した2体の怪獣……もうこれで人類に襲い掛かってきた怪獣は8体目だ。
ただでさえおかしかったこの深海棲艦との戦争は、ここ最近加速度的に『異常』になってきておる」
「ＥＤＦ艦隊（彼ら）がいなければ今頃、人類は絶滅一歩前だったでしょうね」
だがそれはまるで薄氷の上を歩くかのような紙一重の均衡、いつ崩れ落ちてもおかしくない砂上の楼閣だ。
こんな小さな一勝にいちいち喜んでいる暇はもう人類にはない……そんな焦りが状況をよく知る2人にはある。だがそれを辺りにぶちまけるわけにもいかず、2人はそれを悟られぬように胸の内に仕舞い込んで厳重に鍵をかけていた。
「そう言えばＥＤＦ艦隊（彼ら）は？　どうやら一人もいないようですが……？」
「彼らなら、最低限の応急処置と補給をしてもう本拠地（ラゴス島）へ帰ったよ。
今回の対怪獣戦で羅號くんがかなりの損傷を受けたそうで、その修復のために急いで戻るそうだ」
ＥＤＦ艦隊の装備は特殊すぎて、日本側が用意した前線基地ではとても完全な修理ができるものではない。そのため、一刻も早い羅號の回復のためと、ＥＤＦ艦隊はすでにオーストラリアを離れていた。
「彼らには我々は頼りっぱなしだ。
怪獣という敵を相手に援護もまともにできず、その傷を癒すことも

できない……我々日本海軍はこんなにも情けないものだったか？」
「心中、察します。ですが下手なことはかえって彼らの足を引っ張る結果になるかと」
「わかっておるよ。　だからこうして、静かにヤケ酒をあおっておる」
　そう言って中條元帥はグラスに残った酒をあおり、そして話を変えるように言った。
「……『はじまりの妖精』の目撃情報は？」
「今のところは何も……」
　真の絶望『怪獣』が現れたのなら人類の前に再び現れ力を貸すと言ってくれた『はじまりの妖精』も、いまだその姿を現してはいない。彼女たちの言葉を胸に戦い続けてきた中條元帥はその登場を待ちわびている。
「前途多難、か……」
「ええ……」
　戦勝に沸く会場の片隅で、２人は揃って再びため息をつく。
　だが……２人はまさにこの時、『はじまりの妖精』が姿を現す戦いにＥＤＦ艦隊が突入しているとは夢にも思っていなかったのである。